

様式第2号の1-①【(1)実務経験のある教員等による授業科目の配置】

※大学・短期大学・高等専門学校は、この様式を用いること。専門学校は、様式第2号の1-②を用いること。

学校名	愛知淑徳大学
設置者名	学校法人 愛知淑徳学園

1. 「実務経験のある教員等による授業科目」の数

学部名	学科名	夜間・ 通信 制の 場合	実務経験のある 教員等による 授業科目の単位数				省令 で定 める 基準 単位 数	配 置 困 難
			全学 共通 科目	学部 等 共通 科目	専門 科目	合計		
文学部	国文学科		32	0	20	52	13	
	総合英語学科				22	54	13	
	教育学科				113	145	13	
教育学部	教育学科※5		32	0	22	54	13	
人間情報学部	人間情報学科 感性工学専攻※1		32	0	44	76	13	
	人間情報学科 データサイエンス 専攻※1							
	人間情報学科							
心理学部	心理学科		32	0	48	80	13	
創造表現学部	創造表現学科 創作表現専攻		32	29	110	171	13	
	創造表現学科 メディアプロデュ ース専攻				32	93	13	
	創造表現学科 建築・インテリア デザイン専攻				64	125	13	
建築学部	建築学科 建築まちづくり・ 専攻※5		32	0	34	66	13	
	建築学科 住居・インテリア デザイン専攻※5				34	66	13	

健康医療科学部	医療貢献学科 言語聴覚学専攻		32	0	118	150	13	
	医療貢献学科 視覚科学専攻				90	122	13	
	医療貢献学科 理学療法学専攻 ※4				71	103	13	
	医療貢献学科 臨床検査学専攻 ※4				81	113	13	
	スポーツ・健康科 学学科 スポーツ・健康科 学専攻 ※2				51	83	13	
	スポーツ・健康科 学学科 救急救命学専攻 ※2				118	150	13	
	スポーツ・健康医 科学科				41	73	13	
	健康栄養学科				37	69	13	
食健康科学部	健康栄養学科※4		32	0	25	57	13	
	食創造科学科※4				23	55	13	
福祉貢献学部	福祉貢献学科 社会福祉専攻		32	17	74	123	13	
	福祉貢献学科 子ども福祉専攻				44	93	13	
交流文化学部	交流文化学科 ランゲージ専攻		32	0	130	162	13	
	交流文化学科 国際交流・観光専攻						13	
ビジネス学部	ビジネス学科※3		32	0	63	95	13	
	ビジネス学科 現代ビジネス専攻						13	
	ビジネス学科 グローバルビジネ ス専攻						13	
グローバル・コミ ュニケーション学 部	グローバル・コミ ュニケーション学 科		32	0	12	44	13	

(備考)

※1 人間情報学科 感性工学専攻	2023 年度開始
人間情報学科 データサイエンス専攻	2023 年度開始
※2 スポーツ・健康医科学科 スポーツ・健康科学専攻	2021 年度開始
スポーツ・健康医科学科 救急救命学専攻	2021 年度開始
※3 ビジネス学科	2023 年度開始
※4 医療貢献学科 理学療法学専攻	2024 年度開始
医療貢献学科 臨床検査学専攻	2024 年度開始
食健康科学部 健康栄養学科	2024 年度開始
食健康科学部 食創造科学科	2024 年度開始
※5 教育学部 教育学科	2025 年度開始
※5 建築学部 建築学科 建築・まちづくり専攻	2025 年度開始
建築学部 建築学科 住居・インテリアデザイン専攻	2025 年度開始

2. 「実務経験のある教員等による授業科目」の一覧表の公表方法

シラバス検索システムの時間割条件検索の『担当教員の実務経験と本科目との関連』のプルダウン「該当する」を選択し検索する。ただし、件数が多い場合は開講所属ごとに検索する。

【シラバス閲覧システム】

<https://www.aasa.ac.jp/life/support/summary/>

3. 要件を満たすことが困難である学部等

学部等名

(困難である理由)

様式第2号の2-①【(2)-①学外者である理事の複数配置】

※ 国立大学法人・独立行政法人国立高等専門学校機構・公立大学法人・学校法人・準学校法人は、この様式を用いること。これら以外の設置者は、様式第2号の2-②を用いること。

学校名	愛知淑徳大学
設置者名	学校法人 愛知淑徳学園

1. 理事（役員）名簿の公表方法

<https://www.aasa.ac.jp/gakuen/organization/index.html>

2. 学外者である理事の一覧表

常勤・非常勤の別	前職又は現職	任期	担当する職務内容や期待する役割
非常勤	弁護士	R7.6.24～ R11 年度定時評議員会	コンプライアンス
非常勤	株式会社代表取締役	R7.6.24～ R11 年度定時評議員会	財務・経理
非常勤	元中学校・高等学校校長	R7.6.24～ R11 年度定時評議員会	中等教育
非常勤	前大学学長	R7.6.24～ R11 年度定時評議員会	高等教育
(備考)			

様式第2号の3 【(3)厳格かつ適正な成績管理の実施及び公表】

学校名	愛知淑徳大学
設置者名	学校法人 愛知淑徳学園

○厳格かつ適正な成績管理の実施及び公表の概要

1. 授業科目について、授業の方法及び内容、到達目標、成績評価の方法や基準その他の事項を記載した授業計画書(シラバス)を作成し、公表していること。	
(授業計画書の作成・公表に係る取組の概要) 毎年12月上旬に、シラバス執筆者にシラバス執筆を依頼。シラバス執筆者は、シラバス執筆要領により、執筆項目を記載。執筆項目は、次のとおり。 ①授業の概要、②担当教員の実務経験と当該科目との関連、③到達目標、④授業計画、⑤学外教育、⑥授業外学習の指示、⑦成績評価基準、⑧使用テキストの有無とテキストのタイトル、⑨参考文献・資料の明示、⑩視聴覚教材の使用の有無。 遠隔授業(オンデマンド授業)を実施する場合は、シラバスに詳細を記載することを条件とする。 提出にあたり、シラバス執筆者自身がシラバス・チェックリストで記載内容を確認の上、提出。提出方法は、シラバス執筆システムへの入力による。 1月中旬の提出締め切りの後、学内において開講主体ごとにシラバス内容が適切かどうかを客観的な視点で確認する第三者チェック作業をおこない、修正が必要なシラバスは再執筆を依頼し、3月上旬にシラバスデータを完成。完成したシラバスデータは、3月中旬に大学HP上のシラバス閲覧システムにて公開する。	
授業計画書の公表方法	https://www.aasa.ac.jp/life/support/summary/
2. 学修意欲の把握、試験やレポート、卒業論文などの適切な方法により、学修成果を厳格かつ適正に評価して単位を与え、又は、履修を認定していること。	
(授業科目の学修成果の評価に係る取組の概要) 成績は、授業担当者が定期試験・レポート・小テスト・平常の学修状況・実技実習等の評価方法により、学修指標に対する到達結果をもって評価する。科目ごとの具体的な評価基準法については、「シラバス」に記載。 また、学部ごとに成績評価における評価項目・評価基準を定めている。	
3. 成績評価において、GPA等の客観的な指標を設定し、公表するとともに、成績の分布状況の把握をはじめ、適切に実施していること。	
(客観的な指標の設定・公表及び成績評価の適切な実施に係る取組の概要) 履修した科目のうちGPA算出対象科目について、それぞれの科目の成績を表す評価点に、単位数を掛けたものを総合計し、該当科目の総単位数で割ることにより算出。成績評価が「認」(読み替えによる認定)、「合」「否」(合/否により成績が評価される授業)、「W」(履修中止)の科目は、GPA算出対象から除外。 《GPAの算出方法》 $\frac{[(履修登録した科目の総単位数) \times (その科目の評価点)] の総和}{(履修登録した科目の単位数) の総和}$	

学内設置委員会である教務連絡会において、6月・前年度後期、11月・当年度前期のGPA成績を、学部教委員長に提供し、開講科目の難易度の適正化や学生の履修指導等に利用している。	
客観的な指標の算出方法の公表方法	https://www.aasa.ac.jp/life/support/summary/directory.html
4. 卒業の認定に関する方針を定め、公表するとともに、適切に実施していること。	
(卒業の認定方針の策定・公表・適切な実施に係る取り組みの概要) 1. 文学部 (2025年度入学者) ■国文学科 学位授与方針 文学部国文学科は、〈言葉の力〉を不断に練磨することにより、〈創造的思考力〉とその基盤をなす知的・文化的遺産に関する深い知識を身につけて、社会の発展に寄与できる優れた人材を育成することを教育目的とし、以下の能力を修得した学生に学士の学位を授与する。 (1) 文学・文化・歴史をはじめとする人類の知的営みを尊重し、自ら主体的に探究し活用する精神を不断に持ち続けることができる。(関心・意欲・態度) (2) 〈創造的思考力〉すなわち「物事の本質を認識する力」、「問題を分析し情報を整理する力」、「課題を発見し解決策を導き出す力」、「論証を通して自分の考えを伝える力」を発揮できる。(思考・判断・技能) (3) 日本の知的・文化的遺産を正しく継承し、世界に開かれ繋がりあう現代社会に対して深く多面的に洞察することができる。(知識・理解) (4) 〈言葉の力〉を不断に練磨することができる。(表現・態度) 求める能力 文学部国文学科では、日本の古典文学、近・現代文学、国語学及び中国文学に関する基礎的かつ専門的な教育研究を行う。これにより、読解力を深化させて総合的な認識力・判断力・批判力を身につけるとともに、情報収集・整理・批判能力を体得させ、知性と感性を磨いて豊かな人間性を涵養し、もって社会に貢献できる有為の人材を育成することを目指すし、以下の能力の修得を求める。 (1) 国文学に関して幅広い知識を習得し、我が国の文化、歴史および伝統に対する理解と関心を深めることができる。(知識・理解) (2) 文学作品または言語現象の中から新たな問題を発見し、自ら調べ考えることによって解答を導き出すことができる。(関心・意欲) (3) 自らの考えを論理的かつ効果的に、文章で表現することができる。(思考・判断) (4) ディスカッションやプレゼンテーションに見られる、口頭でのコミュニケーション力を発揮できる。(技能・表現・態度) (5) キャリアに必要な素養を身につけ、また国文学の知識と魅力とを教示する力を備えることができる。 年次ごとの教育目標 (1) 1年次は、〈基礎科目〉等を通じて、国文学の基礎的な知識・技能を習得する。 (2) 2年次は、国文学の各時代・分野を幅広く学びながら各自の興味・関心を深めるとともに、選択した科目のレポート等の課題に取り組みながら自らの考えを論理的文章にまとめる鍛錬を積む。 (3) 3年次は、各ゼミを通じて、専門分野の研究手法に習熟する。加えて、発表・討議を繰り返しながらコミュニケーション能力を高め、レポート等についての添削指導を受けながら文章表現力を向上させる。	

(4) 4年次は、大学における学修の総決算として、学術的価値を有する卒業論文を完成させる。その過程で、社会人に必須の創造的思考力を身につけるとともに、20,000字以上に及んで論理一貫した文章を構成する力を獲得する。

(5) 卒業論文の評価項目・指標（基準）は以下の通り。

評価項目	評価基準	評価
知識・理解	文学・語学に関する知識・知見の豊かさと文化、歴史、伝統に対する理解度	A+・A・B・C・F
関心・意欲	文学作品・言語現象に関する課題発見能力と調査・分析力および課題解決能力	A+・A・B・C・F
思考・判断	自らの考えを論理的かつ効果的に展開し、文章で表現することができる力	A+・A・B・C・F
技能・表現	ディスカッション・プレゼンテーションなどの口頭でのコミュニケーション能力	A+・A・B・C・F
学術的価値	創造的思考力と論理的文章力に支えられた学術的価値をもつ論文としての完成度	A+・A・B・C・F

〈2024年度以前入学者〉

文学部は、〈言葉の力〉を不断に練磨することにより、〈人間探究〉の精神と〈創造的思考力〉とを身につけて、社会の発展に寄与できる優れた人材を育成することを教育目的とし、以下の能力を修得した学生に学士の学位を授与する。

- (1) 〈人間探究〉の精神を不断に持ち続けることができる。（関心・意欲・態度）
- (2) 〈創造的思考力〉すなわち「物事の本質を認識する力」、「問題を分析し情報を整理する力」、「課題を発見し解決策を導き出す力」、「論証を通して自分の考えを伝える力」を発揮できる。（思考・判断・技能）
- (3) 人類の知的・文化的遺産を正しく継承し、現代社会に対して深く洞察することができる。（知識・理解）
- (4) 〈言葉の力〉を不断に練磨することができる。（表現・態度）
- (5) 最終的学修成果として各学科が求めるものは以下の通りである。

国文学科

読解力の深化、問題発見能力の開発、調査能力すなわち情報収集・整理・批判能力の体得、論理的思考力の練磨、自己表現力の獲得等、知的社会に生きる現代人に必須の様々な能力を身につけること。

総合英語学科

英語で自在に「読み」「書き」「聞き」「話す」ことのできる高度な英語運用能力、技能を活用した思考力・判断力・発信力、さらに、日本および英語が使われる国や地域の歴史・文化についての深い知識を備えた鋭い国際感覚を身につけること。

教育学科

児童の個性に寄り添える確かな専門的知識と優れた実践的能力をもつとともに、特別支援を必要とする児童への深い理解と障害の多様化・重度化に適切に対応できる実践力を備えること。さらに学校教育の枠を超えた生涯学習分野に活躍の場を求める場合も新しい時代の教育に対応できる基本を修得し、柔軟な思考力をもったリーダーたる力を身につけること。

■国文学科

国文学科は、日本の古典文学、近・現代文学、国語学及び中国文学に関する基礎的かつ専門的な教育研究を行うことにより、総合的な認識力・判断力・批判力を身につけるとともに、知性と感性を磨いて豊かな人間性を涵養し、もって社会に貢献できる有為の人材を

育成することを教育目的とし、以下の能力の修得を求める。

- (1) 国文学に関して幅広い知識を習得し、我が国の文化、歴史および伝統に対する理解と関心を深めることができる。(知識・理解)
- (2) 文学作品または言語現象の中から新たな問題を発見し、自ら調べ考えることによって解答を導き出すことができる。(関心・意欲)
- (3) 自らの考えを論理的かつ効果的に、文章で表現することができる。(思考・判断)
- (4) ディスカッションやプレゼンテーションに見られる、口頭でのコミュニケーション力を発揮できる。(技能・表現・態度)
- (5) キャリアに必要な素養を身につけ、また国文学の知識と魅力とを教示する力を備えることができる。

年次ごとの教育目標は以下の通りである。

- (1) 1年次は、〈基礎科目〉等を通じて、国文学の基礎的な知識・技能を習得する。
- (2) 2年次は、国文学の各時代・分野を幅広く学びながら各自の興味・関心を深めるとともに、選択した科目のレポート等の課題に取り組みながら自らの考えを論理的文章にまとめる鍛練を積む。
- (3) 3年次は、各ゼミを通じて、専門分野の研究方法に習熟する。加えて、発表・討議を繰り返しながらコミュニケーション能力を高め、レポート等についての添削指導を受けながら文章表現力を向上させる。
- (4) 4年次は、大学における学修の総決算として、学術的価値を有する卒業論文を完成させる。その過程で、社会人に必須の創造的思考力を身につけるとともに、20,000字以上に及んで論理一貫した文章を構成する力を獲得する。
- (5) 卒業論文の評価項目・指標（基準）は以下の通り。

評価項目	評価基準	評価
知識・理解	文学・語学に関する知識・知見の豊かさと文化、歴史、伝統に対する理解度	A+・A・B・C・F
関心・意欲	文学・文化・言語に関する課題発見能力と調査・分析力および課題解決能力	A+・A・B・C・F
思考・判断	自らの考えを論理的かつ効果的に展開し、文章で表現することができる力	A+・A・B・C・F
技能・表現	ディスカッション・プレゼンテーションなどの口頭でのコミュニケーション能力	A+・A・B・C・F
学術的価値	創造的思考力と論理的文章力に支えられた学術的価値をもつ論文としての完成度	A+・A・B・C・F

■総合英語学科

総合英語学科は、「総合的に英語を教育する学科」として、英語コミュニケーション、英語学、国際文化、キャリア教育などに関する科目を幅広く履修させながら、英語の「読む」「書く」「聞く」「話す」という4技能を鍛え上げ、これらの技能を活用した思考力・判断力・発信力を育成する。その結果、高度な英語力を有し、鋭い国際感覚を身につけた職業人を育成することを教育目的とし、以下の能力の修得を求める。

- (1) 英語のスキルと理論と応用力を修得し、英語で自在に「読み」「書き」「聞き」「話す」ことのできる高度な英語運用能力（知識・理解）
- (2) 日本および英語が使われる国や地域の歴史・文化についての知識と海外セミナー・海外インターンシップなどを通じて身につける鋭い国際感覚（技能・表現・態度）
- (3) 総合的な英語のスキルと理論と応用力を身につけたうえで、関心のあるテーマを発見し、追究できる能力（関心・意欲・判断）
- (4) キャリアに必要な知識や技能の修得、およびキャリアアップにつながる英語力などの優れた職業人にとって必要な能力（知識・技能）
- (5) 卒業論文の評価項目・指標（基準）は以下の通り。

評価項目	評価基準	評価
知識・理解	文学・語学に関する知識・知見の豊かさと文化、歴史、伝統に対する理解度	A+・A・B・C・F
関心・意欲	文学・文化・言語に関する課題発見能力と調査・分析力および課題解決能力	A+・A・B・C・F
思考・判断	自らの考えを論理的かつ効果的に展開し、文章で表現することができる力	A+・A・B・C・F
技能・表現	ディスカッション・プレゼンテーションなどの口頭でのコミュニケーション能力	A+・A・B・C・F
学術的価値	創造的思考力と論理的文章力に支えられた学術的価値をもつ論文としての完成度	A+・A・B・C・F

■教育学科

教育学科は、小学校ならびに特別支援学校の教員養成を主とし、さらに生涯学習分野における指導者養成も視野に含み、確かな専門知識と優れた実践能力を持つ人材を育成することを教育目的とし、以下の能力の修得を求める。

- (1) 教育に関する専門的知識を習得し実践できる。(知識・理解・表現)
- (2) 子どもの発達可能性を深く理解することができる。(関心・態度)
- (3) 子どもを取り巻く社会環境や歴史に広い視野を持つことができる。(思考・判断)
- (4) 障害のある子どもも含めて、様々な子どもに対して適切な指導と配慮をおこなうことができる。(意欲・技能)

年次ごとの教育目標は以下の通りである。

- (1) 1・2 年次は、適性の確認と教職への自覚を促進し、小学校教員養成を軸として、教科の確かな指導力の涵養と、教育に関する基礎的な知識・技能を習得する。
- (2) 3 年次は、教育実習（小）・介護実践演習などを通して、豊かな人間性や教育現場で求められる実践的な指導力を養う。
- (3) 4 年次は、専門分野の研究方法に習熟し、卒業研究（論文）を完成させる。さらに、生涯学習の知識や技能を習得し、総合的な力を養う。
- (4) 卒業論文の評価項目・指標（基準）は以下の通り。

評価項目	評価基準	評価
知識・理解	教育に関する専門的知識を習得し実践する力	A+・A・B・C・F
関心・意欲	子どもの発達可能性を積極的に深く理解しようとする姿勢	A+・A・B・C・F
思考・判断	子どもを取り巻く社会環境や歴史に対する広い視野	A+・A・B・C・F
技能・表現	様々な子どもに対して適切な指導と配慮をおこなうことができる力	A+・A・B・C・F
学術的価値	創造的思考力と論理的文章力に支えられた学術的価値をもつ論文としての完成度	A+・A・B・C・F

2. 教育学部

教育学部は、教育を多面的に捉える視点と専門的知識を身に付け、子どもの発達可能性を深く探究する意欲と、子どもを取り巻く社会環境や多様性への対応について、よりよい方向を導き出すために主体的に考え、特別な配慮や支援を必要とする子どもも含めて、様々な子どもに対して適切な指導と支援を行う、総合的な実践力を身に付ける人材を育成することを教育の目的とする。

■教育学科

教育学科は、小学校、中学校・高等学校（英語）、特別支援学校の教員養成を主とし、確かな専門知識と優れた実践力を身に付け、社会や教育界の発展に寄与したいと考える意欲的な人材を育成することを教育目的とし、以下の能力を修得した学生に学士の学位を授与する。

- (1) 教育を多面的に捉える視点と専門的知識を身に付けている。(知識・理解)
- (2) 子どもの発達可能性を深く探究する意欲がある。(関心・意欲)
- (3) 子どもを取り巻く社会環境や多様性への対応について、よりよい方向を導き出すために主体的に考えることができる。(思考・判断)
- (4) 特別な配慮や支援を必要とする子どもも含めて、様々な子どもに対して、適切な指導と支援を行う、総合的な実践力を身に付けている。(態度・技能・表現)

3. 人間情報学部

〈2023 年度以降入学者〉

人間情報学部人間情報学科では、「人」中心の発想から情報技術を捉えることで、人々が暮らしやすい AI（人工知能）時代の情報化社会の形成と発展に貢献できる力を身につけた人材を養成することを目標としている。感性工学専攻、およびデータサイエンス専攻では、以下にあげるような能力を修得した学生に学位を授与する。

■感性工学専攻

感性工学専攻では、これからの持続可能な社会において STEAM 人材として貢献し活躍することを目標として、以下の知識や技能の修得を求める。

- (1) 人間の感性とユニバーサルデザインの観点より、ユーザの多様性に配慮し効果的に情報サービス・製品・空間等をデザインできる能力を身につけている。(技能・表現)
- (2) AI・IoT・ビッグデータ・ロボット等の技術を活用できる知識やスキルを身につけ、これからの持続可能な社会に貢献し活躍できる。(知識・関心・意欲)
- (3) デジタル社会における人々の快適な情報環境の提供や効率的な業務推進のためのアプリやシステム構築を実践し、情報セキュリティや情報の評価・活用などデジタル情報の適切な利用を支援する能力を身につけている。(思考・判断・技能)

■データサイエンス専攻

データサイエンス専攻では、今後ますます多様化・複雑化する情報化社会においてデータ分析のスペシャリストとして活躍できることを目標として、以下の知識や技能の修得を求める。

- (1) 人の知覚、感情、行動、運動、性格等の「人」の理解に加えて、モノやサービスを評価するための、心理的・生理的な測定技術と統計に基づくデータ分析能力を身につけている。(技能・表現・関心)
- (2) データ分析に機械学習を含む AI（人工知能）を活用することで、高い応用性を持ったデータ戦略を立案して実行することができる。(知識・思考・態度)
- (3) データ分析の知識と技術を人の行動予測やマーケティング、エンターテインメント、スポーツ、流通、情報通信、健康、福祉等の多岐に渡る分野に応用することで、多様化・複雑化する情報化社会に貢献できる。(技能・態度・意欲)

〈2020 年度～2022 年度入学者〉

人間情報学部人間情報学科では、「合理的・論理的・科学的に思考する力」、「変わりゆく人間社会の未来を予測できる力」、「様々な情報資源を的確に活用できる力」、そして「ヒューマンフレンドリーな情報社会に貢献できる力」を身につけた人材を育成することをめざしている。この目標を達成するために、以下にあげるような能力を修得した学生に学位を授与する。

人間情報学部人間情報学科 (3 専修共通)

- (1) 人間情報学についての学問の内容と方法を理解し、ものづくりや情報サービスに活用することができる (知識・理解)
- (2) 人間、情報、コンピュータの特性を科学的に考察し、合理的・論理的・科学的に思考や判断することができる (思考・判断)

情報デザイン専修

- (1) 人間の感性やユニバーサルデザインの観点から情報サービス・製品・空間を効果的にデザインできる (関心・意欲・態度)
- (2) 人にやさしく豊かなデジタルライフを提案・創造できる (技能・表現・態度)

心理情報専修

- (1) より良いモノづくりや情報サービスに向けて、心理学の観点から、人間とモノとの関わりを理解・考察することができる (関心・意欲・態度)
- (2) 人間の知覚特性や行動特性を科学的に検証し、定量化・可視化・文章化することができる (技能・表現・態度)

情報システム専修

- (1) 情報システムの設計・開発や情報サービス提供のための問題探求能力を身に付けている (関心・意欲・態度)
- (2) 適切な情報活用のために、ユーザの多様性に配慮した情報システムや情報サービスを企画・提案できる (技能・表現・態度)

4. 心理学部

現代の心理学は実証主義に基づく経験科学であり、また、現実生活で生じる人と人、人と環境のダイナミックな相互作用現象を問題にする行動科学である。したがって、現象を机上のみで理解するのではなく、現象を捉える客観的なデータの収集、分析、考察という、段階的に積み上げていく科学的アプローチが必要とされる。心理学部ではこのような特徴をもつ現代心理学の学修を通じて、心の多様性と普遍性を理解し、他者を尊重するとともに、自己を正しく表出することができる人材、さらには人間関係の中で生じる諸問題に適切に対処することができる人材を育成することを目指している。この目標を達成するため、人間行動のさまざまな現象を現代心理学の主要な領域である「生理・認知」「社会」「発達」「臨床」の4つの領域から多角的な視点で総合的に究明するカリキュラムを編成し、以下のような知識・能力を身につけた者に学位を授与する。

心の多様性と普遍性、人と人、人と環境の相互作用を理解する力

科学的な根拠に基づいて実証的に分析し、論理的に思考する力

幅広い人間行動や社会現象の中から問題点を発見し解決していく力

ディスカッションやプレゼンテーションを含むコミュニケーション力

5. 創造表現学部

〈2025 年度入学者〉

創造表現学部では、それぞれの専攻の学修を通じて「表現力」「創造力」「コミュニケーション力」を高めることによって、豊かな自己表現ができ、実社会の諸問題にも適切な対処ができる人材の育成を目標にしている。この教育目標を達成するために、以下にあげるような能力を修得した学生に学位を授与する。

■創作表現専攻

1. 知的財産としての言語文化・表象文化に関する見識を持ち、その価値の継承・発信の社会的意義を理解することができる。(知識・関心・理解)
2. 文化的叡智に幅広く触れることで総合的な判断力を養い、自己の考えを他者に的確に伝えることができる。(思考・判断)

3. 文芸を中心とした創造的な表現活動に携わり得る知識と実践的な表現技術とを身につけることができる。(技能・表現)

■メディアプロデュース専攻

1. PC やメディア機器を使用する映像処理を理解し、ビデオやパンフレットなどのメディアコンテンツの制作に関する基礎知識を身につけている。(技能・表現)
2. 各種メディアの特徴を理解し、メディアを利用して豊かに表現、発想ができ、戦略的に企画・立案する能力を身につけている。(関心・態度)
3. 現代社会の問題を読み解き、時代のニーズを的確に捉え、社会的視座を持って問題解決に臨むことができる。(知識・理解)

〈2024 年度以前入学者〉

創造表現学部では、それぞれの専攻の学修を通じて「表現力」「創造力」「コミュニケーション力」を高めることによって、豊かな自己表現ができ、実社会の諸問題にも適切な対処ができる人材の育成を目標にしている。この教育目標を達成するために、以下にあげるような能力を修得した学生に学位を授与する。

■創作表現専攻

1. 知的財産としての言語文化・表象文化に関する見識を持ち、その価値の継承・発信の社会的意義を理解することができる。(知識・関心・理解)
2. 文化的叡智に幅広く触れることで総合的な判断力を養い、自己の考えを他者に的確に伝えることができる。(思考・判断)
3. 文芸を中心とした創造的な表現活動に携わり得る知識と実践的な表現技術とを身につけることができる。(技能・表現)

■メディアプロデュース専攻

1. PC やメディア機器を使用する映像処理を理解し、ビデオやパンフレットなどのメディアコンテンツの制作に関する基礎知識を身につけている。(技能・表現)
2. 各種メディアの特徴を理解し、メディアを利用して豊かに表現、発想ができ、戦略的に企画・立案する能力を身につけている。(関心・態度)
3. 現代社会の問題を読み解き、時代のニーズを的確に捉え、社会的視座を持って問題解決に臨むことができる。(知識・理解)

■建築・インテリアデザイン専攻

1. 周辺環境、文化的背景、機能や経済性などの多様な条件を読み解き、建築・インテリアに関わる各種課題を解決するために必要な思考力・判断力を有する。(思考・理解・判断)
2. コンセプトを的確に伝えるプレゼンテーション能力と共同作業に必要なコミュニケーション能力を身につけている。(表現・態度)
3. 建築の専門的知識と技能を身に付け、一級建築士などの資格を目指すことができる。(知識・技能)

6. 建築学部

建築学部は、建築の計画・設計、歴史、材料、構造、環境・設備、まちづくり、インテリアデザインなど建築学とそれに関連する複数分野の専門的学修を行い、それらを通じて「コミュニケーション力」、「表現力」、「創造力」を高めることにより、建築、インテリア、都市計画、まちづくりなどにおける実社会の諸問題の解決や、より豊かで質の高い生活の創生に貢献する人材の育成を目標としている。この教育目標は、本学の理念である「違いを共に生きる」を建築・まちづくり、住居・インテリアの分野で実践するものであり、これを達成するために以下に掲げるような能力を修得した学生に学位を授与する。

1. 周辺環境、文化的背景、機能や経済性などの多様な条件を読み解き、建築・まちづくり、住居・インテリアデザインに関わる各種課題を解決するために必要な思考力・判断力を有する。(思考・理解・判断)
2. 諸条件を満たすアイデアやコンセプトを発案する創造力、それらを具体化する計画能力及び的確に伝えるプレゼンテーション能力、共同作業に必要なコミュニケーション能力を有する。(創造・表現・態度)
3. 建築に関わる計画・設計、歴史、材料、構造、環境などの十分な基礎知識を背景とした建築の専門的知識と技術とを身に付け、一級建築士などの資格取得を目指すことができるとともに、建築・まちづくり、住居・インテリアデザインの専門家として社会貢献できる能力を有する。(知識・技能・専門)

7. 健康医療科学部

〈2024 年度以降入学者〉

健康医療科学部は高齢者や障がいのある人をはじめ、すべての人の生活の質を向上することに貢献し得る人材、さらに良い人間関係を築くための対人技術および他者への理解と尊重を有する人材の育成を目標にしている(態度)。

この教育目標を達成するために、以下の能力を習得した学生に学位を授与する。

■医療貢献学科(言語聴覚学専攻)

1. 言語聴覚士の国家資格を目指し、障がい児・者支援のための専門家として必要な知識と技能を有する者(知識・技能)
2. 職能の範囲にとどまらず、豊かなコミュニケーション能力を有し、必要に応じて問題点を発見し、新しい検査・評価・訓練・指導・支援の技法の開発および評価を行い得る知識と技能を有する者(意欲・判断力・開発力・コミュニケーションスキル)
3. 科学的な根拠にもとづいて実証的に分析し、論理的に思考する能力を有する者(科学的思考力)

■医療貢献学科(視覚科学専攻)

1. 視能訓練士の国家資格を目指し、障がい児・者支援のための専門家として必要な知識と技能を有する者(知識・技能)
2. 職能の範囲にとどまらず、必要に応じて問題点を発見し、新しい検査・評価・訓練・指導・支援の技法の開発および評価を行い得る知識と技能を有する者(意欲・判断力・開発力)
3. 科学的な根拠にもとづいて実証的に分析し、論理的に思考する能力を有する者(科学的思考力)

■医療貢献学科(理学療法学専攻)

1. 理学療法士の国家資格取得を目指し、障がい児・者支援のための専門家、とりわけ、小児理学療法の専門家として必要な知識と技能を有する者(知識・技能)
2. 理学療法士として、多職種の視点も加味して問題点を発見し理学療法を行い得る知識と技能を有すると同時に、新しい検査や練習・支援技法の開発に意欲を有する者(意欲・判断力・開発力)
3. 科学的な根拠にもとづいて実証的に分析し、論理的思考能力を有する者(科学的思考力)

■医療貢献学科(臨床検査学専攻)

1. 臨床検査技師の国家資格取得を目指し、高い倫理観を持った臨床検査の専門家として必要な知識と技能を有する者(知識・技能・臨床力)
2. チーム医療実践のための基本的能力を有し、職能の範囲にとどまらず、問題点を発見し解決するための知識と技能を有する者(意欲・判断力・コミュニケーションスキル)
3. 臨床検査に関する問題を自ら発見し、問題解決に向け科学的な根拠にもとづいて論理的に思考し実証的に分析する能力を有し、科学技術の進歩を理解し新たな検査の開発およ

び評価をおこない得る知識と技能を有する者（科学的思考力・開発力）

■スポーツ・健康医科学科（スポーツ・健康科学専攻）

1. スポーツ・運動科学および健康科学に関する幅広い知識を有し、その知識を背景に、生涯にわたる健康の維持・増進に携わる専門家として認められる者（知識・技能）
2. 修得した知識をもとに生涯健康に関する諸問題に対し、自ら考え、解決策を見出し、それをもとに行動できる者（意欲・判断力・創造力・行動力）
3. スポーツ、運動および健康に関する問題に対し、科学的な根拠にもとづいて実証的に分析し、論理的に思考する能力を有する者（科学的思考力）

■スポーツ・健康医科学科（救急救命学専攻）

1. 救急救命士の国家資格を目指し、健康と救急救命を中心とした医学に関する基礎的な知識を有し、その知識を背景として人命を守り、社会に貢献できる者（知識・技能）
2. 救急救命士として必要とされる総合的な観察力、知識にもとづいた判断力、およびコミュニケーション能力を有し、それをもとにチームワークとリーダーシップのある行動ができる者（観察力・判断力・コミュニケーションスキル・行動力）
3. 救急救命士として求められる科学的根拠にもとづいた論理的な思考力を有する者（科学的思考力）

〈2021 年度～2023 年度入学者〉

健康医療科学部は高齢者や障がいのある人をはじめ、すべての人の生活の質を向上することに貢献し得る人材、さらに良い人間関係を築くための対人技術および他者への理解と尊重を有する人材の育成を目標にしている（態度）。この教育目標を達成するために、以下の能力を習得した学生に学位を授与する。

■医療貢献学科（言語聴覚学専攻）

1. 言語聴覚士の国家資格を目指し、障がい児・者支援のための専門家として必要な知識と技能を有する者（知識・技能）
2. 職能の範囲にとどまらず、豊かなコミュニケーション能力を有し、必要に応じて問題点を発見し、新しい検査・評価・訓練・指導・支援の技法の開発および評価を行い得る知識と技能を有する者（意欲・判断力・開発力・コミュニケーションスキル）
3. 科学的な根拠にもとづいて実証的に分析し、論理的に思考する能力を有する者（科学的思考力）

■医療貢献学科（視覚科学専攻）

1. 視能訓練士の国家資格を目指し、障がい児・者支援のための専門家として必要な知識と技能を有する者（知識・技能）
2. 職能の範囲にとどまらず、必要に応じて問題点を発見し、新しい検査・評価・訓練・指導・支援の技法の開発および評価を行い得る知識と技能を有する者（意欲・判断力・開発力）
3. 科学的な根拠にもとづいて実証的に分析し、論理的に思考する能力を有する者（科学的思考力）

■スポーツ・健康医科学科（スポーツ・健康科学専攻）

1. スポーツ・運動科学および健康科学に関する幅広い知識を有し、その知識を背景に、生涯にわたる健康の維持・増進に携わる専門家として認められる者（知識・技能）
2. 修得した知識をもとに生涯健康に関する諸問題に対し、自ら考え、解決策を見出し、それをもとに行動できる者（意欲・判断力・創造力・行動力）
3. スポーツ、運動および健康に関する問題に対し、科学的な根拠にもとづいて実証的に分析し、論理的に思考する能力を有する者（科学的思考力）

■スポーツ・健康医科学科（救急救命学専攻）

- 1.救急救命士の国家資格を目指し、健康と救急救命を中心とした医学に関する基礎的な知識を有し、その知識を背景として人命を守り、社会に貢献できる者（知識・技能）
- 2.救急救命士として必要とされる総合的な観察力、知識にもとづいた判断力、およびコミュニケーション能力を有し、それをもとにチームワークとリーダーシップのある行動ができる者（観察力・判断力・コミュニケーションスキル・行動力）
- 3.救急救命士として求められる科学的根拠にもとづいた論理的な思考力を有する者（科学的思考力）

■健康栄養学科

- 1.管理栄養士として必要な幅広い教養と、専門的かつ科学的知識、高度な実践能力を有し、人々の健康の保持・増進、生活の質の向上を通して健康長寿社会に貢献していく高い志を有する者（知識・技能）
- 2.強い使命感と判断力、豊かなコミュニケーション能力を有し、各ライフステージおよび人々の状況に対応した適切な栄養管理を、他職種と協調しながら遂行できる者（意欲・判断力・コミュニケーションスキル）
- 3.「健康」と「栄養」、「食」に関する問題を自ら発見し、問題解決に向け、科学的根拠に基づいて実証的に分析し、論理的に思考する能力を有する者（創造的・科学的思考力）

8. 食健康科学部

食健康科学部は、人の健康の保持、増進における食や栄養の関わりについての知識を修得し、「食」と「栄養」の専門家として、実社会の食品、健康に関する諸問題に論理的かつ科学的根拠に基づき対処ができ、すべての人々の生活の質を向上させることに貢献できる人材の育成を目標にしている。この教育目標を達成するために、以下の能力を習得した学生に学位を授与する。

■健康栄養学科

- 1.管理栄養士として必要な幅広い教養と、専門的かつ科学的知識、高度な実践能力を有し、人々の健康の保持・増進、生活の質の向上を通して健康長寿社会に貢献していく高い志を有する者（知識・技能）。
- 2.強い使命感と判断力、豊かなコミュニケーション能力を有し、各ライフステージおよび人々の状況に対応した適切な栄養管理を、他職種と協調しながら遂行できる者（意欲・判断力・コミュニケーションスキル）。
- 3.「健康」と「栄養」、「食」に関する問題を自ら発見し、問題解決に向け、科学的根拠に基づいて実証的に分析し、論理的に思考する能力を有する者（創造的・科学的思考力）。

■食創造科学科

- 1.食創造科学領域における専門知識を深め、食と健康分野において必要な総合力を培い、豊かな食生活と健康社会に貢献するために必要な知識と技能を有する者（知識・技能）。
- 2.修得した知識をもとに食に関する諸問題に対し、自ら考え、解決策を見だし、創造性や先見性を有した食創造力を持って食産業に貢献できる「食」の専門家として行動できる者（判断・関心・行動）。
- 3.食に関する問題に対し、科学的根拠に基づいて実証的に分析し、他者と協調・協働して新たな食品の創造・創生の提案ができる能力を有する者（創造的・科学的思考力）。

9. 福祉貢献学部

愛知淑徳大学福祉貢献学部では、福祉に関する社会のしくみと対象の理解に必要な基礎知識を修得したうえで、対象者の求めと必要を理解し、総合的に判断・実践できる人材の育成を目標にしている。この教育目標を達成するために、以下にあげるような能力を習得した学生に学位を授与する。

1.知識・理解

人を多面的に理解し、人と社会環境の視点から問題・課題を理解することができる。

2. 関心・意欲・態度

乳幼児期から高齢期までの人々の尊厳を重視してかかわることができる。

3. 思考・判断

対象者の求めと必要を理解し、総合的に判断することができる。

4. 技能・表現

体験と実習をとおして学びを深め、専門職としての基礎的実践力を身につけている。

10. 交流文化学部

交流文化学部は、様々な文化背景を持つ人々との交流を通して、相互理解と尊重に基づきグローバル社会の発展に積極的に貢献する人材の育成を目標にしている。この教育目標を達成するために、以下の能力を修得した学生に学位を授与する。

- (1) 多文化・異文化に関する基本的な知識を習得し、広い視野から社会をとらえ、理解することができる。(知識・理解)
- (2) 多様な考え方・生き方を受け入れることができる。(態度)
- (3) 獲得した知識・技能・態度などを活用して問題の解決を図ることや新しい社会・文化を生成することに貢献できる。(思考・判断)
- (4) 日本語と特定の外国語を用いて、読み・書き・聞き・話すことができる。多様な文化的背景を持つ人々と効果的なコミュニケーションができる。(技能・表現)
- (5) 継続的に、自律して学習・探求することができる。(関心・意欲)

11. ビジネス学部

企業や職場を取り巻く環境は合理化、情報化、グローバル化の波を受け、日々刻々と変化を遂げている。ビジネス学部は、環境変化に柔軟に対応し、実社会で自ら道を切り開く人材を育成する。そのためには、まず自らが持たない能力やスキルを持つ「他者」とつながり、「他者」の能力、スキルを活用することが不可欠となる。さらに、終身雇用制度の衰退、メンバーシップ雇用からジョブ型雇用への変化に対応するためには、「多様な業界に関する知識」を持ち、「高い職業意識」を育成することが必要となる。その上で、簿記、IT パスポート、TOEIC など実務的に有用な資格を取得し、その資格を現場で「応用」可能なノウハウを身に付けなければならない。合理化、グローバル化の波に対応するためには、企業・団体等との連携を通じたアクティブラーニング・海外インターンシップ研修によって「行動するチカラ」を高めることも必須となる。

この目標を達成するために、ビジネス学部は「ビジネスイノベーション（マーケティング×経営学×アクティブラーニング）」、「ビジネスアカウンティング（会計理論・実務×経営分析×アクティブラーニング）」、「グローバルビジネス（国際経済・国際金融×ビジネス英語×アクティブラーニング）」の3専修を設置し、専修を相互に横断できる柔軟性に富むカリキュラムを編成し、以下のような知識・能力を身に付けた者に学位を授与する。

DP① ビジネスパーソンとして不可欠となるコミュニケーション力・情報スキルをみかく「つながるチカラ」

DP② 多様な業界に関する知識を修得し、シゴトを理解していると同時に高い職業意識を持つことによって高められる「適応するチカラ」

DP③ 資格を取得し、そのスキルを社会で役立てることを可能にする「応用するチカラ」

DP④ 企業・団体等と連携したプログラムや海外インターンシップ研修など、実践を通じて主体的にやり抜く「行動するチカラ」

これに加え、各専修（コース）で、次の「第5の能力」を修得することを学位授与の条件と定める。

【ビジネスイノベーション専修】（2023年度以降入学者）

【現代ビジネス専攻ビジネスイノベーションコース】（2021・2022年度入学者）

DP⑤・BI マーケティングと経営学の知識をベースとし、アクティブラーニングを通じて、企業、組織に対して問題解決案を提示する「アイデアを創造し、形にする

チカラ」

【ビジネスアカウンティング専修】(2023 年度以降入学者)

【現代ビジネス専攻ビジネスアカウンティングコース】(2021・2022 年度入学者)

DP⑤-BA 会計学全般の知識をベースとし、財務諸表を作成・分析するスキルを修得した上で、経営者に対して専門的な助言ができる「ビジネスの言語を読み解き、経営をサポートするチカラ」

【グローバルビジネス専修】(2023 年度以降入学者)

【グローバルビジネス専攻】(2021・2022 年度入学者)

DP⑤-GB 国際経済・国際金融などのグローバルビジネスの現場に必要な専門知識を、英語と日本語のバイリンガルで学修することで得られる「世界とつながり、現場で活躍するチカラ」

12. グローバル・コミュニケーション学部

グローバル・コミュニケーション学部では、グローバル社会において、文化や価値観の異なる人々と協力してさまざまな課題や問題を解決する能力のある「地球市民」を育成することになっている。

(DP1)

国内・国外の文化や社会情勢を理解し、世界の人々に説得力のあるメッセージを発信するために必要な知識を見に付ける。

(DP2)

グローバル社会であらゆる状況に対応するために必要な英語運用能力、英語コミュニケーション能力、問題解決能力を身に付ける。

(DP3)

文化や価値観が異なる社会での学修や体験を通じ、社会的・文化的背景の異なる人々の違いを認め、同じ「地球市民」として共生するように考えることができる姿勢を身に付ける。

卒業の認定に関する
方針の公表方法

https://www.aasa.ac.jp/guidance/public_info/diploma_policy_fac.html

様式第2号の4-①【(4)財務・経営情報の公表(大学・短期大学・高等専門学校)】

※大学・短期大学・高等専門学校は、この様式を用いること。専門学校は、様式第2号の4-②を用いること。

学校名	愛知淑徳大学
設置者名	学校法人 愛知淑徳学園

1. 財務諸表等

財務諸表等	公表方法
貸借対照表	https://www.aasa.ac.jp/gakuen/jigyo/index.html
収支計算書又は損益計算書	https://www.aasa.ac.jp/gakuen/jigyo/index.html
財産目録	https://www.aasa.ac.jp/gakuen/jigyo/index.html
事業報告書	https://www.aasa.ac.jp/gakuen/jigyo/index.html
監事による監査報告(書)	https://www.aasa.ac.jp/gakuen/jigyo/index.html

2. 事業計画(任意記載事項)

単年度計画(名称:	対象年度:
公表方法:	
中長期計画(名称:	対象年度:
公表方法:	

3. 教育活動に係る情報

(1) 自己点検・評価の結果

公表方法: https://www.aasa.ac.jp/guidance/efforts/accreditation.html

(2) 認証評価の結果(任意記載事項)

公表方法: https://www.aasa.ac.jp/guidance/efforts/accreditation.html

(3) 学校教育法施行規則第 172 条の 2 第 1 項に掲げる情報の概要

①教育研究上の目的、卒業又は修了の認定に関する方針、教育課程の編成及び実施に関する方針、入学者の受入れに関する方針の概要

文学部
教育研究上の目的（公表方法： https://www.aasa.ac.jp/guidance/about/policy.html） （概要） 文学部は、すべての学問の根本となる普遍のテーマである〈人間探究〉を基本理念とする。この理念に基づき、人類の過去の知的・文化的遺産を継承しつつ、同時に未来に向けた創造的思考力を身につけることにより、人間と社会に対する深い洞察力に基づく広い視野に立った課題探究及び解決能力を養成し、もって教員をはじめとする社会のあらゆる分野における有為の人材を育成することを教育の目的とする。文学部の理念に基づき構成される 3 学科の理念及び教育目的は、次の通りである。 国文学科は、自立した総合的な認識力・判断力・批判力を身につけるとともに、知性と感性を磨いて豊かな人間性を涵養し、もって社会に貢献できる有為の人材の養成を目的とし、現代の国際的な社会にあつて日本文化、歴史、伝統の継承と発展を視野に入れながら日本の古典文学、近現代文学、国語及び中国文学に関する基礎的かつ専門的な教育研究を行う。 総合英語学科は、「総合的に英語を教育する学科」として、高度な英語力を有し、鋭い国際感覚を身につけた職業人を育成することを教育目的とし、英語の「読む」「書く」「聞く」「話す」という 4 技能を鍛え上げ、これらの技能を活用した思考力・判断力・発信力を身につけるための教育研究を行う。 教育学科は、小学校教員並びに特別支援学校教員、加えて生涯学習分野での指導者の養成を目的とし、教育の本質である人格形成について広い視野から考えられる確かな専門的知識と時代や環境の変化に対応できる優れた実践的能力を身につけるための教育研究を行う。
卒業又は修了の認定に関する方針（公表方法： https://www.aasa.ac.jp/guidance/public_info/diploma_policy_fac.html） （概要） 〈2025 年度入学者〉 ■国文学科 学位授与方針 文学部国文学科は、〈言葉の力〉を不断に練磨することにより、〈創造的思考力〉とその基盤をなす知的・文化的遺産に関する深い知識を身につけて、社会の発展に寄与できる優れた人材を育成することを教育目的とし、以下の能力を修得した学生に学士の学位を授与する。 (1) 文学・文化・歴史をはじめとする人類の知的営みを尊重し、自ら主体的に探究し活用する精神を不断に持ち続けることができる。（関心・意欲・態度） (2) 〈創造的思考力〉すなわち「物事の本質を認識する力」、「問題を分析し情報を整理する力」、「課題を発見し解決策を導き出す力」、「論証を通して自分の考えを伝える力」を発揮できる。（思考・判断・技能） (3) 日本の知的・文化的遺産を正しく継承し、世界に開かれ繋がりあう現代社会に対して深く多面的に洞察することができる。（知識・理解） (4) 〈言葉の力〉を不断に練磨することができる。（表現・態度） 求める能力

文学部国文学科では、日本の古典文学、近・現代文学、国語学及び中国文学に関する基礎的かつ専門的な教育研究を行う。これにより、読解力を深化させて総合的な認識力・判断力・批判力を身につけるとともに、情報収集・整理・批判能力を体得させ、知性と感性を磨いて豊かな人間性を涵養し、もって社会に貢献できる有為の人材を育成することを目指し、以下の能力の修得を求める。

- (1) 国文学に関して幅広い知識を習得し、我が国の文化、歴史および伝統に対する理解と関心を深めることができる。（知識・理解）
- (2) 文学作品または言語現象の中から新たな問題を発見し、自ら調べ考えることによって解答を導き出すことができる。（関心・意欲）
- (3) 自らの考えを論理的かつ効果的に、文章で表現することができる。（思考・判断）
- (4) ディスカッションやプレゼンテーションに見られる、口頭でのコミュニケーション力を発揮できる。（技能・表現・態度）
- (5) キャリアに必要な素養を身につけ、また国文学の知識と魅力とを教示する力を備えることができる。

年次ごとの教育目標

- (1) 1年次は、〈基礎科目〉等を通じて、国文学の基礎的な知識・技能を習得する。
- (2) 2年次は、国文学の各時代・分野を幅広く学びながら各自の興味・関心を深めるとともに、選択した科目のレポート等の課題に取り組みながら自らの考えを論理的文章にまとめる鍛練を積む。
- (3) 3年次は、各ゼミを通じて、専門分野の研究方法に習熟する。加えて、発表・討議を繰り返しながらコミュニケーション能力を高め、レポート等についての添削指導を受けながら文章表現力を向上させる。
- (4) 4年次は、大学における学修の総決算として、学術的価値を有する卒業論文を完成させる。その過程で、社会人に必須の創造的思考力を身につけるとともに、20,000字以上に及んで論理一貫した文章を構成する力を獲得する。
- (5) 卒業論文の評価項目・指標（基準）は以下の通り。

評価項目	評価基準	評価
知識・理解	文学・語学に関する知識・知見の豊かさと文化、歴史、伝統に対する理解度	A+・A・B・C・F
関心・意欲	文学作品・言語現象に関する課題発見能力と調査・分析力および課題解決能力	A+・A・B・C・F
思考・判断	自らの考えを論理的かつ効果的に展開し、文章で表現することができる力	A+・A・B・C・F
技能・表現	ディスカッション・プレゼンテーションなどの口頭でのコミュニケーション能力	A+・A・B・C・F
学術的価値	創造的思考力と論理的文章力に支えられた学術的価値をもつ論文としての完成度	A+・A・B・C・F

〈2024年度以前入学者〉

文学部は、〈言葉の力〉を不断に練磨することにより、〈人間探究〉の精神と〈創造的思考力〉とを身につけて、社会の発展に寄与できる優れた人材を育成することを教育目的とし、以下の能力を修得した学生に学士の学位を授与する。

- (1) 〈人間探究〉の精神を不断に持ち続けることができる。（関心・意欲・態度）
- (2) 〈創造的思考力〉すなわち「物事の本質を認識する力」、「問題を分析し情報を整理する力」、「課題を発見し解決策を導き出す力」、「論証を通して自分の考えを伝える力」を発揮できる。（思考・判断・技能）
- (3) 人類の知的・文化的遺産を正しく継承し、現代社会に対して深く洞察することができる。（知識・理解）
- (4) 〈言葉の力〉を不断に練磨することができる。（表現・態度）
- (5) 最終的学修成果として各学科が求めるものは以下の通りである。

国文学科

読解力の深化、問題発見能力の開発、調査能力すなわち情報収集・整理・批判能力の体得、論理的思考力の練磨、自己表現力の獲得等、知的社会に生きる現代人に必須の様々な能力を身につけること。

総合英語学科

英語で自在に「読み」「書き」「聞き」「話す」ことのできる高度な英語運用能力、技能を活用した思考力・判断力・発信力、さらに、日本および英語が使われる国や地域の歴史・文化についての深い知識を備えた鋭い国際感覚を身につけること。

教育学科

児童の個性に寄り添える確かな専門的知識と優れた実践的能力をもつとともに、特別支援を必要とする児童への深い理解と障害の多様化・重度化に適切に対応できる実践力を備えること。さらに学校教育の枠を超えた生涯学習分野に活躍の場を求める場合も新しい時代の教育に対応できる基本を修得し、柔軟な思考力をもったリーダーたる力を身につけること。

■国文学科

国文学科は、日本の古典文学、近・現代文学、国語学及び中国文学に関する基礎的かつ専門的な教育研究を行うことにより、総合的な認識力・判断力・批判力を身につけるとともに、知性と感性を磨いて豊かな人間性を涵養し、もって社会に貢献できる有為の人材を育成することを教育目的とし、以下の能力の修得を求める。

(1) 国文学に関して幅広い知識を習得し、我が国の文化、歴史および伝統に対する理解と関心を深めることができる。(知識・理解)

(2) 文学作品または言語現象の中から新たな問題を発見し、自ら調べ考えることによって解答を導き出すことができる。(関心・意欲)

(3) 自らの考えを論理的かつ効果的に、文章で表現することができる。(思考・判断)

(4) ディスカッションやプレゼンテーションに見られる、口頭でのコミュニケーション力を発揮できる。(技能・表現・態度)

(5) キャリアに必要な素養を身につけ、また国文学の知識と魅力とを教示する力を備えることができる。

年次ごとの教育目標は以下の通りである。

(1) 1年次は、〈基礎科目〉等を通じて、国文学の基礎的な知識・技能を習得する。

(2) 2年次は、国文学の各時代・分野を幅広く学びながら各自の興味・関心を深めるとともに、選択した科目のレポート等の課題に取り組みながら自らの考えを論理的文章にまとめる鍛練を積む。

(3) 3年次は、各ゼミを通じて、専門分野の研究方法に習熟する。加えて、発表・討議を繰り返しながらコミュニケーション能力を高め、レポート等についての添削指導を受けながら文章表現力を向上させる。

(4) 4年次は、大学における学修の総決算として、学術的価値を有する卒業論文を完成させる。その過程で、社会人に必須の創造的思考力を身につけるとともに、20,000字以上に及んで論理一貫した文章を構成する力を獲得する。

(5) 卒業論文の評価項目・指標(基準)は以下の通り。

評価項目	評価基準	評価
知識・理解	文学・語学に関する知識・知見の豊かさと文化、歴史、伝統に対する理解度	A+・A・B・C・F
関心・意欲	文学作品・言語現象に関する課題発見能力と調査・分析力および課題解決能力	A+・A・B・C・F
思考・判断	自らの考えを論理的かつ効果的に展開し、文章で表現することができる力	A+・A・B・C・F

技能・表現	ディスカッション・プレゼンテーションなどの口頭でのコミュニケーション能力	A+・A・B・C・F
学術的価値	創造的思考力と論理的文章力に支えられた学術的価値をもつ論文としての完成度	A+・A・B・C・F

■総合英語学科

総合英語学科は、「総合的に英語を教育する学科」として、英語コミュニケーション、英語学、国際文化、キャリア教育などに関する科目を幅広く履修させながら、英語の「読む」「書く」「聞く」「話す」という4技能を鍛え上げ、これらの技能を活用した思考力・判断力・発信力を育成する。その結果、高度な英語力を有し、鋭い国際感覚を身につけた職業人を育成することを教育目的とし、以下の能力の修得を求める。

- (1) 英語のスキルと理論と応用力を修得し、英語で自在に「読み」「書き」「聞き」「話す」ことのできる高度な英語運用能力（知識・理解）
- (2) 日本および英語が使われる国や地域の歴史・文化についての知識と海外セミナー・海外インターンシップなどを通じて身につける鋭い国際感覚（技能・表現・態度）
- (3) 総合的な英語のスキルと理論と応用力を身につけたうえで、関心のあるテーマを発見し、追究できる能力（関心・意欲・判断）
- (4) キャリアに必要な知識や技能の修得、およびキャリアアップにつながる英語力などの優れた職業人にとって必要な能力（知識・技能）
- (5) 卒業論文の評価項目・指標（基準）は以下の通り。

評価項目	評価基準	評価
知識・理解	文学・語学に関する知識・知見の豊かさと文化、歴史、伝統に対する理解度	A+・A・B・C・F
関心・意欲	文学・文化・言語に関する課題発見能力と調査・分析力および課題解決能力	A+・A・B・C・F
思考・判断	自らの考えを論理的かつ効果的に展開し、文章で表現することができる力	A+・A・B・C・F
技能・表現	ディスカッション・プレゼンテーションなどの口頭でのコミュニケーション能力	A+・A・B・C・F
学術的価値	創造的思考力と論理的文章力に支えられた学術的価値をもつ論文としての完成度	A+・A・B・C・F

■教育学科

教育学科は、小学校ならびに特別支援学校の教員養成を主とし、さらに生涯学習分野における指導者養成も視野に含み、確かな専門知識と優れた実践能力を持つ人材を育成することを教育目的とし、以下の能力の修得を求める。

- (1) 教育に関する専門的知識を習得し実践できる。（知識・理解・表現）
- (2) 子どもの発達可能性を深く理解することができる。（関心・態度）
- (3) 子どもを取り巻く社会環境や歴史に広い視野を持つことができる。（思考・判断）
- (4) 障害のある子どもも含めて、様々な子どもに対して適切な指導と配慮を行うことができる。（意欲・技能）

年次ごとの教育目標は以下の通りである。

- (1) 1・2年次は、適性の確認と教職への自覚を促進し、小学校教員養成を軸として、教科の確かな指導力の涵養と、教育に関する基礎的な知識・技能を習得する。
- (2) 3年次は、教育実習（小）・介護実践演習などを通して、豊かな人間性や教育現場で求められる実践的な指導力を養う。
- (3) 4年次は、専門分野の研究方法に習熟し、卒業研究（論文）を完成させる。さらに、生涯学習の知識や技能を習得し、総合的な力を養う。
- (4) 卒業論文の評価項目・指標（基準）は以下の通り。

評価項目	評価基準	評価
知識・理解	教育に関する専門的知識を習得し実践する力	A+・A・B・C・F
関心・意欲	子どもの発達可能性を積極的に深く理解しようとする姿勢	A+・A・B・C・F
思考・判断	子どもを取り巻く社会環境や歴史に対する広い視野	A+・A・B・C・F
技能・表現	様々な子どもに対して適切な指導と配慮をおこなうことができる力	A+・A・B・C・F
学術的価値	創造的思考力と論理的文章力に支えられた学術的価値をもつ論文としての完成度	A+・A・B・C・F

教育課程の編成及び実施に関する方針（公表方法：
https://www.aasa.ac.jp/guidance/public_info/curriculum_policy_fac.html）

（概要）

〈2025 年度入学者〉

文学部国文学科は、表現力と読解力を錬磨することにより、現代社会に対する洞察力和創造的思考力を身につけ、社会に貢献できる優れた人材を育成する。本学科の求める 4 つの能力の修得のために、以下のような方針でカリキュラムを編成する。

古典文学／近・現代文学／国語学／中国文学の各領域を、段階・目的別に〈基礎科目〉〈基幹科目〉〈基本科目〉〈展開科目〉〈実践科目〉〈中核科目〉〈国文学教養科目〉へと分類し、体系的な学修ができるように教育課程を編成することで、「国文学に関して幅広い知識を習得し、我が国の文化、歴史および伝統に対する理解と関心を深めることができる（知識・理解）」能力を身につけられるようにする。

この目標を実現するために、必修科目として「演習Ⅰ」（3 年次）、「演習Ⅱ」（4 年次）、「文献講読演習」（4 年次）および「卒業論文」（4 年次）からなる〈中核科目〉群を開講する（ただし、「卒業論文」を除いて選択必修科目）。これは各自の興味と関心に応じて自由に科目を選択し学修することで、「文学作品または言語現象の中から新たな問題を発見し、自ら調べ考えることによって解答を導き出すことができる（関心・意欲）」能力を主体的に伸ばしていく機会を多く設けるためである。

さらに、「自らの考えを論理的かつ効果的に、文章で表現することができる（思考・判断）」能力と「ディスカッションやプレゼンテーションに見られる、口頭でのコミュニケーション力を発揮できる（技能・表現・態度）」能力を会得するためには、土台となる文章表現や論理的思考に関わる基礎的な力をまずは固めておく必要がある。導入教育の一環として、〈基礎科目〉群を開講し、「日本語表現 12」を 1 年次の必修としてアクティブ・ラーニングなどの手法を用いながら、適切な方法によって自ら発信する力を涵養する。

そして国文学の深い理解に欠かせない歴史や国内外の言語文化の知識を身につけ、専門性と広い視野とを合わせ持つ人材を育成するため、〈国文学教養科目〉群を開講する。

これら 4 つの能力については、必修科目である「演習Ⅰ」、「演習Ⅱ」および「文献講読演習」における少人数教育を通じてさらなる習熟をはかり、その成果を卒業論文として結実させることとする。

なお、本学科の求める 4 つの能力はあらゆる「社会に貢献できる有為の人材」とにとって欠かすことのできないものであるが、その能力をより生かすことのできる道のひとつに、教育職員という職業がある。その志望者のために、国語科教育について豊かな経験を有する教員が担当する〈実践科目〉群を開講する。教育職員以外の進路については、3 年次必修科目「キャリアプランニング」で自らが活躍できる場を意識させる機会を設ける。

〈2024 年度以前入学者〉

文学部は、学部共通の必修科目と、学科ごとの専門教育課程を通じて、言葉の力を錬磨することにより、人間探究の精神と創造的思考力を身につけ、社会に貢献できる優れた人材

を育成する。学部共通必修科目は、文学部所属の学生の精神と学修の方向づけを行い、学科の専門教育科目をより有益で発展的なものとする土台となるものである。

本学部の求める 4 つの能力の修得のために、共通必修科目は以下のような方針でカリキュラムを編成する。

人類の知的・文化的遺産を正しく継承し、現代社会に対して深く洞察することができる（知識・理解）能力を身につけ、人間探究の精神を不断に持ち続けること（関心・意欲・態度）の基盤として、「人間探究」を 1 年次必修とする。大学および文学部で学ぶことの意義を理解して、人間と社会に対する深い洞察力に基づく、広い視野に立った課題探求能力や実践力を身につけるために何が必要かを考えることを求める。この科目は、学部所属の専任教員が担当する。

言葉の力を不断に練磨し、創造的思考力すなわち「物事の本質を認識する力」、「課題を発見し解決策を引き出す力」、「論証を通して自分の考えを伝える力」（思考・判断・技能）を発揮するために、「日本語表現 12」を 1 年次の必修とする。日本語リテラシーの基礎を習得し、言葉の力を不断に練磨すること（表現・態度）、そしてその意義を理解する。さらに、社会の発展に寄与できる人材を育成するために、キャリア教育科目を 3 年次の必修科目として、大学卒業後の進路について考える。国文学科「キャリアプランニング」、総合英語学科「Globalization and Society」、教育学科「職業としての教育」といった、学科の教育方針に沿った実践的な授業によって、幅広い視点を持ち、自らが活躍できる場を意識する機会とする。

■国文学科

本学科の求める 4 つの能力の修得のために、以下のような方針でカリキュラムを編成する。

古典文学/近・現代文学/国語学/中国文学の各領域を、段階・目的別に〈基礎科目〉〈基幹科目〉〈基本科目〉〈展開科目〉〈実践科目〉〈中核科目〉へと分類し、体系的な学修ができるように教育課程を編成することで、「国文学に関して幅広い知識を習得し、我が国の文化、歴史および伝統に対する理解と関心を深めることができる（知識・理解）」能力を身につけられるようにする。

この目標を実現するために、学科独自の必修科目として「演習Ⅰ」（3 年次）、「演習Ⅱ」（4 年次）、「文献講読演習」（4 年次）および「卒業論文」（4 年次）を開講する（ただし、「卒業論文」を除き選択必修科目）。これは各自の興味と関心に応じて自由に科目を選択し学修することで、「文学作品または言語現象の中から新たな問題を発見し、自ら調べ考えることによって解答を導き出すことができる（関心・意欲）」能力を主体的に伸ばしていく機会を多く設けるためである。

さらに、「自らの考えを論理的かつ効果的に、文章で表現することができる（思考・判断）」能力と「ディスカッションやプレゼンテーションに見られる、口頭でのコミュニケーション力を発揮できる（技能・表現・態度）」能力を会得するためには、土台となる文章表現や論理的思考に関わる基礎的な力をまずは固めておく必要がある。導入教育の一環として〈基礎科目〉群 14 科目を開講し、アクティブ・ラーニングなどの手法を用いながら、適切な方法によって自ら発信する力を涵養していく。

これら 4 つの能力については、必修科目である「演習Ⅰ」、「演習Ⅱ」および「文献講読演習」における少人数教育を通じてさらなる習熟をはかり、その成果を卒業論文として結実させることとする。

なお、本学科の求める 4 つの能力はあらゆる「社会に貢献できる有為の人材」として欠かすことのできないものであるが、その能力をより生かすことのできる道のひとつに、教育職員という職業がある。その志望者のために、国語科教育についての豊かな経験を有する教員が担当する〈実践科目〉群 10 科目を開講する。

■総合英語学科

本学科が求める 4 つの能力の習得のために、〈基礎科目〉〈総合英語教育科目（スキル、理論、応用）〉〈国際文化科目〉〈発展科目〉〈キャリアデザイン科目（TOEIC 科目群、

留学準備科目群、翻訳・通訳科目群、ビジネス英語科目群、インターンシップ科目群、英語教員養成科目群））によって構成される専門教育科目を編成する。

全ての授業を英語でおこなう〈スキル〉科目を1年次から3年次前期まで半期6コマずつ集中的に配置することで、「英語のスキルと理論と応用力を修得し、英語で自在に「読み」「書き」「聞き」「話す」ことのできる高度な英語運用能力（知識・理解）」を身につけられるようにする。2年次から開講される〈理論〉科目では英語学の知識を使って英語理解の効率化を促し、〈応用〉科目では、〈スキル〉科目や〈理論〉科目で学修した内容を一層発展させ、英語運用能力のさらなる向上を図る。

また、〈国際文化科目〉は、社会言語学的観点や数量的変化の調査も踏まえながら、英語が使われている地域の文化、歴史などを学修する。文学作品の理解を授業の最終目標とせず、作品が作られた文化的・社会的背景、作者の心理理解に焦点をあてる。さらに、〈発展科目〉に属する海外セミナーでは、半期か1年の海外留学が可能である。これらの科目を履修することによって、「日本および英語が使われる国や地域の歴史・文化についての知識と海外セミナー・海外インターンシップなどを通じて身につける鋭い国際感覚（技能・表現・態度）」を育成できる。

3、4年次では、〈キャリアデザイン科目〉を通して、目的を持ちながら英語を学修して、「キャリアに必要な知識や技術の修得、およびキャリアアップにつながる英語力などの優れた職業人にとって必要な能力（知識・技能）」を育成する。

〈発展科目〉である「専門演習Ⅰ～Ⅳ」では、受講生が関心のある研究テーマを選び、調査した情報を基に自律的に思考し、独自の議論を展開できる能力を養う。その研究成果は、4年次の「課題実践演習Ⅰ、Ⅱ」にて、その授業内のプレゼンテーションやディスカッションを通じて自分の考えを推敲し、最終的には卒業論文として形にする。これにより、「総合的な英語のスキルと理論と応用力を身につけたうえで、関心のあるテーマを発見し、追究できる能力（関心・意欲・判断）」が育成可能となる。

■教育学科

本学科が求める4つの能力を修得し、確かな専門知識と優れた実践能力を有する小学校や特別支援学校の教員、さらに生涯学習分野における指導者を養成することを目標として、以下のような教育課程を編成する。

開講科目を〈基礎科目〉〈発展科目〉〈小学校教員養成科目A〉〈特別支援学校教員養成科目〉〈小学校教員養成科目B〉〈小学校教員養成科目C〉〈生涯学習指導者養成科目〉に分類し、希望する職種に就くために必要な資格が取得できるように体系的に授業科目を配置する。

〈基礎科目〉〈発展科目〉として、教育および教職関係の講義・演習科目、教育体験実習科目を開講し、「教育に関する専門的知識を習得し実践できる（知識・理解・表現）」能力を身につける。

〈小学校教員養成科目A〉〈特別支援学校教員養成科目〉〈小学校教員養成科目B〉として、目指す進路に応じた教員免許状取得のために必要な演習・講義・実習科目を開講し、「子どもの発達可能性を深く理解することができる（関心・態度）」能力を有し、「障害のある子どもも含めて、様々な子どもに対して適切な指導と配慮を行うことができる（意欲・技能）」小学校や特別支援学校の教員を養成する。

さらに本学の理念である「違いを共に生きる」の実現に向け、学校という場にとどまらず、生涯学習分野での指導者養成をも視野に入れ、〈小学校教員養成科目C〉〈生涯学習指導者養成科目〉として、「子どもを取り巻く社会環境や歴史に広い視野を持つことができる（思考・判断）」力を伸ばしていく。

入学者の受入れに関する方針（公表方法：

https://www.aasa.ac.jp/life/support/summary/pdf/summary_2025.pdf）

（概要）

1. 学生に期待すること

文学作品を深く鑑賞する感性と、自らの考えを適切な表現によって文章化し得る能力を高

め、社会の発展に寄与する人材となることを期待する。

2. 学生募集に際して重視すること
書物と主体的に向かい合う姿勢や、自身の意見を論理的な文章によって書き表す能力を有すること。また、その前提となる基本的な文章読解力や語彙力が身に付いていることを重視する。

3. 入学前学習として推奨すること
図書館などを大いに活用し、書物の世界に慣れ親しむこと。また、読後に要点や感想などを書き出してまとめ、思考力と文章力を養うことも推奨する。

教育学部

教育研究上の目的（公表方法：

<https://www.aasa.ac.jp/guidance/about/policy.html>）

（概要）

■教育学科

教育学科は、教育を多面的に捉える視点と専門的知識を身に付け、子どもの発達可能性を深く探究する意欲と、子どもを取り巻く社会環境や多様性への対応について、よりよい方面を導き出すために主体的に考え、特別な配慮や支援を必要とする子どもも含めて、様々な子どもに対して適切な指導と支援を行う、総合的な実践力を身に付ける人材を育成することを教育の目的とする。

卒業又は修了の認定に関する方針（公表方法：

https://www.aasa.ac.jp/guidance/public_info/diploma_policy_fac.html）

（概要）

教育学部は、教育を多面的に捉える視点と専門的知識を身に付け、子どもの発達可能性を深く探究する意欲と、子どもを取り巻く社会環境や多様性への対応について、よりよい方向を導き出すために主体的に考え、特別な配慮や支援を必要とする子どもも含めて、様々な子どもに対して適切な指導と支援を行う、総合的な実践力を身に付ける人材を育成することを教育の目的とする。

■教育学科

教育学科は、小学校、中学校・高等学校（英語）、特別支援学校の教員養成を主とし、確かな専門知識と優れた実践力を身に付け、社会や教育界の発展に寄与したいと考える意欲的な人材を育成することを教育目的とし、以下の能力を修得した学生に学士の学位を授与する。

- （1）教育を多面的に捉える視点と専門的知識を身に付けている。（知識・理解）
- （2）子どもの発達可能性を深く探究する意欲がある。（関心・意欲）
- （3）子どもを取り巻く社会環境や多様性への対応について、よりよい方向を導き出すために主体的に考えることができる。（思考・判断）
- （4）特別な配慮や支援を必要とする子どもも含めて、様々な子どもに対して、適切な指導と支援を行う、総合的な実践力を身に付けている。（態度・技能・表現）

教育課程の編成及び実施に関する方針（公表方法：

https://www.aasa.ac.jp/guidance/public_info/curriculum_policy_fac.html）

（概要）

教育学部では、学生自らが主体的に自己の特性を活かしながら進路決定し、教育の本質である人間性について広い視野から考えられる確かな専門的知識と時代や環境の変化に対応できる優れた実践的能力を身に付ける人材を育成することを目的とした教育プログラムを実現するために、4年間で小学校、中学校・高等学校（英語）及び特別支援学校の4つの教諭一種免許状の取得が可能なカリキュラムとし、学校教育コース、英語教育コース、

特別支援教育コースの3コースを設ける。2年次からコースの所属となるが、どのコースに所属しても他のコースの科目を自由に選択し学修することができる枠に囚われない連携が可能で、いわゆる「ゆるやかなコース制」も特色といえる。

小学校教諭免許状の取得に必要な科目は、1年次から全員が共通で学び、中学校・高等学校（英語）、特別支援学校の免許状の取得に必要な科目は2年次から学ぶ（一部1年次から行う）。

1年次は、全員が「基礎科目」、「教育の基礎的理解に関する科目」、「小学校教員養成科目」、「中学校・高等学校（英語）教員養成科目」、「特別支援学校教員養成科目」を共通に履修する。これらを履修することにより、「教育を多面的に捉える視点と専門的知識（知識・理解）」を身に付けることができる。「基礎科目」、「教育の基礎的理解に関する科目」はとりわけ1年次に多く設定されており、ここで教育を多面的に捉える視点と専門的知識の確固たる土台を固めることができる。

2年次からは、一人一人の学生に応じた履修設計に基づき学生の希望ごとに学校教育コース、英語教育コース、特別支援教育コースの3つに分かれ、各々の目指す進路に応じて「小学校教員養成科目」、「中学校・高等学校（英語）教員養成科目」、「特別支援学校教員養成科目」の教員免許取得に関連する科目を履修して「教育を多面的に捉える視点と専門的知識（知識・理解）」を深めつつ、「子どもの発達に関する科目」の学修を通して「子どもの発達可能性を深く探究する意欲（関心・意欲）」を涵養し、また「司書教諭資格関連科目」、「多様性関連科目」での探究を本格化させて「子どもを取り巻く社会環境や多様性への対応について、よりよい方向を導き出すために主体的に考える（思考・判断）」力を身に付ける。さらに、各コースが指定している科目を履修し、教養と専門性を深めるようにする。

3年次から希望のゼミに所属し、各自の研究テーマに基づいて体系的に学修を行い、4年次に卒業研究としてまとめ、学修成果の集大成とする。「発展科目」は「教育を多面的に捉える視点と専門的知識（知識・理解）」を完成させる総仕上げ的な位置付けの科目群であり、また英語教育コースの「英語学発展科目」、「英米文学発展科目」で学んだことは「子どもを取り巻く社会環境や多様性への対応について、よりよい方向を導き出すために主体的に考える（思考・判断）」力を一層高めることができる。主なカリキュラム編成は以下のⅠ～Ⅲの構成となる。

Ⅰ. 3コースが共通で行う科目：【カテゴリーⅠ】

〈基礎科目〉

〈教育の基礎的理解に関する科目〉

〈発展科目〉

Ⅱ. 教員免許取得に必要な科目：【カテゴリーⅡ】

小学校教員免許取得に関する科目：〈小学校教員養成科目〉

中学校・高等学校の英語教員免許取得に関する科目：〈中学校・高等学校（英語）教員養成科目〉

特別支援学校教員免許取得に関する科目：〈特別支援学校教員養成科目〉

Ⅲ. 各コースの専門性を高める科目：【カテゴリーⅢ】

〈司書教諭資格関連科目〉

〈多様性関連科目〉

〈英語学発展科目〉

〈英米文学発展科目〉

〈子どもの発達に関する科目〉

入学者の受入れに関する方針（公表方法：

https://www.aasa.ac.jp/life/support/summary/pdf/summary_2025.pdf ）

（概要）

教育学部では、教員としての専門的知識、総合力、実践力を身に付け、社会や教育界の発展に寄与したいと考えている意欲的な学生の入学を求める。

1. 学生に期待すること

小学校又は特別支援学校の教員、中学校・高等学校教員（英語）として活躍するために、必要な専門的な知識と技能の習得に積極的に取り組むことが求められる。また、教育が直面する諸問題に対応する力を備え、豊かな人間性と確かな実践力を身に付けた教員を目指して努力することを期待する。

2. 学生募集に際して重視すること

将来、小学校教員又は特別支援学校教員、中学校・高等学校教員（英語）として、学校教育に携わりたいという強い意欲があり、教育に対する情熱と責任感を有することを重視する。また、自ら進んで他者と協働して課題に取り組むコミュニケーション能力を備えていることも必要である。

3. 入学前学習として奨励すること

教師として幅広い分野での基本的な学力が必要となるため、高等学校までに学習する教科・科目の基礎的知識と技能を着実に習得しておくことが不可欠である。また、教育問題や教育活動に関心を向けることも重要である。

人間情報学部

教育研究上の目的（公表方法：

<https://www.aasa.ac.jp/guidance/about/policy.html>）

（概要）

■ 人間情報学科

人間情報学科は、「人」中心の発想から情報技術を捉えることで、人々が暮らしやすいAI（人工知能）時代の情報化社会の形成と発展に貢献できる人材を育成することを教育研究の目的とする。この目的に基づき、学科のもとに「感性工学」「データサイエンス」の2専攻を置く

■ 感性工学専攻

感性工学専攻においては、これからの持続可能な社会において STEAM 人材として貢献し活躍できる人材を育成するための教育研究を行う。

■ データサイエンス専攻

データサイエンス専攻においては、今後ますます多様化・複雑化する情報化社会においてデータ分析のスペシャリストとして活躍できる人材を育成するための教育研究を行う。

卒業又は修了の認定に関する方針（公表方法：

https://www.aasa.ac.jp/guidance/public_info/diploma_policy_fac.html）

（概要）

〈2023 年度以降入学者〉

人間情報学部人間情報学科では、「人」中心の発想から情報技術を捉えることで、人々が暮らしやすいAI（人工知能）時代の情報化社会の形成と発展に貢献できる力を身につけた人材を養成することを目標としている。感性工学専攻、およびデータサイエンス専攻では、以下にあげるような能力を修得した学生に学位を授与する。

■ 感性工学専攻

感性工学専攻では、これからの持続可能な社会において STEAM 人材として貢献し活躍することを目標として、以下の知識や技能の修得を求める。

1. 人間の感性とユニバーサルデザインの観点より、ユーザの多様性に配慮し効果的に情報サービス・製品・空間等をデザインできる能力を身につけている。（技能・表現）
2. AI・IoT・ビッグデータ・ロボット等の技術を活用できる知識やスキルを身につけ、これからの持続可能な社会に貢献し活躍できる。（知識・関心・意欲）

3. デジタル社会における人々の快適な情報環境の提供や効率的な業務推進のためのアプリやシステム構築を实践し、情報セキュリティや情報の評価・活用などデジタル情報の適切な利用を支援する能力を身につけている。（思考・判断・技能）

■データサイエンス専攻

データサイエンス専攻では、今後ますます多様化・複雑化する情報化社会においてデータ分析のスペシャリストとして活躍できることを目標として、以下の知識や技能の修得を求める。

1. 人の知覚、感情、行動、運動、性格等の「人」の理解に加えて、モノやサービスを評価するための、心理的・生理的な測定技術と統計に基づくデータ分析能力を身につけている。（技能・表現・関心）
2. データ分析に機械学習を含むAI（人工知能）を活用することで、高い応用性を持ったデータ戦略を立案して実行することができる。（知識・思考・態度）
3. データ分析の知識と技術を人の行動予測やマーケティング、エンターテインメント、スポーツ、流通、情報通信、健康、福祉等の多岐に渡る分野に応用することで、多様化・複雑化する情報化社会に貢献できる。（技能・態度・意欲）

〈2020年度～2022年度入学者〉

人間情報学部人間情報学科では、「合理的・論理的・科学的に思考する力」、「変わりゆく人間社会の未来を予測できる力」、「様々な情報資源を的確に活用できる力」、そして「ヒューマンフレンドリーな情報社会に貢献できる力」を身に付けた人材を育成することをめざしている。この目標を達成するために、以下にあげるような能力を修得した学生に学位を授与する。

■人間情報学部人間情報学科（3専修共通）

1. 人間情報学についての学問の内容と方法を理解し、ものづくりや情報サービスに活用することができる（知識・理解）

人間、情報、コンピュータの特性を科学的に考察し、合理的・論理的・科学的に思考や判断することができる（思考・判断）

■情報デザイン専修

1. 人間の感性やユニバーサルデザインの観点から情報サービス・製品・空間を効果的にデザインできる（関心・意欲・態度）
2. 人にやさしく豊かなデジタルライフを提案・創造できる（技能・表現・態度）

■心理情報専修

1. より良いモノづくりや情報サービスに向けて、心理学の観点から、人間とモノとの関わりを理解・考察することができる（関心・意欲・態度）
2. 人間の知覚特性や行動特性を科学的に検証し、定量化・可視化・文章化することができる（技能・表現・態度）

■情報システム専修

1. 情報システムの設計・開発や情報サービス提供のための問題探求能力を身につけている（関心・意欲・態度）
2. 適切な情報活用のために、ユーザの多様性に配慮した情報システムや情報サービスを企画・提案できる（技能・表現・態度）

教育課程の編成及び実施に関する方針（公表方法：

https://www.aasa.ac.jp/guidance/public_info/curriculum_policy_fac.html）

（概要）

〈2023 年度以降入学者〉

人間情報学部人間情報学科では、それぞれの専攻の人材養成目標にあわせたカリキュラム・ポリシーを以下の通り定める。

■感性工学専攻

感性工学専攻では、これからの持続可能な社会において STEAM 人材として貢献し活躍することを目標として、人間の感性やユニバーサルデザインの観点から効果的に情報分野での新たな価値を創出できる能力を身につけた人材を育成するために、以下のような方針でカリキュラムを編成する。

1 年次から 2 年次では、基礎的な知識と技能の修得のために、数学的スキルや情報管理に関する基礎科目について演習形式の講義を中心に配置する。また、高校までに学んだ知識をさらに高度化して主体的な学修を進めるために、ユーザに配慮したデザインや次世代システムの構築についての知識や技能を学修する科目群を編成する。3 年次からは各専用のソフトウェアや基本的な数値解析手法やアルゴリズムについて学びながら、デザイン技術とプログラミング技術を身につけ、演習系科目を中心に 3D モデリング、映像コンテンツ、ロボット製作、センサー工学、IoT・インタラクティブアート、感性プロトタイピングなどの技術修得へとステップアップできる科目群を編成する。またこれらの科目群により、AI スキルを活用した画像処理や言語処理などについても学び、社会課題解決における AI の応用可能性を検討できる力を修得する。これらをふまえて卒業プロジェクトを開始し、ユーザの多様性や社会貢献を視野に入れた研究テーマを設定する。4 年次では、これまでの学修をとおして培った論理的思考、得られたデータの適切な分析をふまえて、卒業研究を科学論文として完成させる。研究発表会にて効果的でわかりやすいプレゼンテーションをおこない、質問に対して的確な回答ができるようにし、インタラクティブなコミュニケーション力を向上させる。

■データサイエンス専攻

データサイエンス専攻では、多様化・複雑化する情報化社会において、データ分析のスペシャリストとして活躍できる人材を養成することを目標として、「人」の理解、心理的・生理的な測定技術、統計に基づくデータ分析能力、ならびにデータ分析における AI 活用と多分野への応用能力を養うために、以下のような方針でカリキュラムを編成する。心理的・生理的な測定技術や統計的分析能力、AI（人工知能）活用を含むプログラミング能力を養うために、必修科目として「実験法・分析法」、ならびに「プログラミング・データ活用」に関する科目群を編成する。これらの科目群は全て演習形式とし、自ら実験計画やデータ分析目標を立て、それらを実施するという主体的・体験的な学びを取り入れる。また、人の知覚や感情、行動、運動、性格等についての学修を深めるための「心理科学」に関する科目群、スポーツを含む人の生理・生体についての学修を深めるための「生体情報処理」に関する科目群、マーケティング等の実践的なデータ分析の活用能力を養うための「ビジネスデータ活用」に関する科目群を編成する。さらに、統計分析等の基盤となる数学についての学修を深める「数理科学」に関する科目群、ならびに専攻の学びを将来のキャリアに繋げるための「キャリア形成」に関する科目群を編成する。以上の 7 科目群では、系統ごとに 1 年次から段階的な学修ができるように各学年に科目を配置し、3 年次から始まる卒業プロジェクトを円滑に進めることができるように体系化する。論理的思考力とデータドリブン型の実証能力により問題解決に取り組める能力を 2 年間の卒業プロジェクトで向上させ、4 年間の学修の集大成として卒業論文を完成させる。4 年次に実施する成果発表会におけるプレゼンテーションと卒業論文の完成度に基づいて卒業プロジェクトの評価を行う。

〈2020 年度～2022 年度入学者〉

人間情報学部は、合理的・論理的・科学的に思考する力、変わりゆく人間社会の未来を予測できる力、様々な情報資源を的確に活用できる力、そしてヒューマンフレンドリーな情報社会に貢献できる力を身に付けた人材の育成を目指している。この人材育成の目標にも

とづき、1年次から3年次配当の「学部共通科目」、2年次からの専修分属以降の「専修の専門科目」に分けて、以下のような方針でカリキュラムを編成する。

学部共通科目

人間情報学の基礎となる幅広い知識と、人間、情報、そしてコンピュータの特性を科学的・論理的に考察できる能力を身に付けることを目標として、キャリア形成、ものづくりの基礎、人間理解の基礎、情報活用の基礎、コンピュータの基礎の授業分野から学部共通科目を用意する。

専修の専門科目

情報デザイン専修は、人にやさしく豊かなデジタルライフを提案・創造し、今後のヒューマンフレンドリーな情報社会に貢献する人材の育成を目指し、クリエイティブデザイン、情報デザイン、プロダクトデザイン、及び各コース別の卒業研究・制作の授業分野から専修の専門科目を用意する。

心理情報専修は、変わりゆく人間社会の未来を予測し、より良い情報サービスやシステム開発に自分の能力を活かせる人材の育成を目指し、心理学研究法、知覚心理学、発達・社会心理学、比較・生理心理学、心理・工学応用、及びコースの卒業研究の授業分野から専修の専門科目を用意する。

情報システム専修は、情報に価値を見出す企業や図書館・出版流通に寄与できる能力を身につけた人材の育成を目指し、人間社会と情報、情報メディアの利用、システム設計・開発、情報マネジメント、図書館情報サービス、及び各コース別の卒業研究・制作の授業分野から専修の専門科目を用意する。

入学者の受入れに関する方針（公表方法：

https://www.aasa.ac.jp/life/support/summary/pdf/summary_2025.pdf）

（概要）

■人間情報学科 感性工学専攻

1.学生に期待すること

情報デザイン制作と情報システム制作において、人の感性に関する知識とAI（人工知能）技術を活用することにより、AI時代の情報化社会においてSTEAM人材※として活躍する意欲を持つことを期待する。

※STEAM人材とは、科学的でありつつも、創造的な発想で技術開発や問題解決のできる人材を指す。

2.学生募集に際して重視すること

- ・人の感性やユニバーサルデザインの視点から効果的な情報サービス、製品、空間をデザインしたり、人にやさしく豊かなデジタルライフを提案・創造したりすることに関心を持っていること。
- ・AIやIoT、ビッグデータ、ロボット制御の技術を応用してアプリを開発したり、情報システムを構築したりすることに関心を持っていること。
- ・これらの内容について記載された文章や図表を理解できる論理的・数理的な思考力と基礎学力を身に付けていること。

3.入学前学習として推奨すること

- ・感性やユニバーサルデザイン、AI、IoT、ビッグデータ、ロボット等のキーワードを含む記事、ならびにそれらが情報サービス、製品、空間のデザインやアプリ・情報システムに活用されている事例について記載された記事に日頃から目を通すこと。
- ・これらの記事の論旨を要約できる力や主張の根拠の妥当性を的確に指摘できる力、ならびに記事内に記された図表が示す意味を読み取る力の向上に努めること。

■人間情報学科 データサイエンス専攻

1.学生に期待すること

統計学に基づく伝統的なデータ分析法から機械学習等の AI（人工知能）を駆使した最新のデータ分析法までを修得することで、AI 時代の情報化社会において、データ分析のスペシャリストとして活躍する意欲を持つことを期待する。

2. 学生募集に際して重視すること

- ・データ分析により、人の知覚や感情、行動、運動、性格等の“人”を理解することに関心を持っていること。
- ・データ分析の知識と技術をマーケティングやエンターテインメント、スポーツ、流通、情報通信、健康、福祉等の多岐に渡る分野に応用することに関心を持っていること。
- ・これらの内容について記載された図表や文章を読み解く論理的・数理的な思考力と基礎学力を身に付けていること。

3. 入学前学習として推奨すること

- ・新聞、雑誌、WEB ページなどに記載された図表を含む記事や広告等に日頃から目を通すこと。
- ・記事や広告等に記載された図表の示す意味や図表を表示する効果、図表とその説明文章との関係性を読み解く力、ならびに読み取った内容を要約して文章化できる力の向上に努めること。

心理学部

教育研究上の目的（公表方法：

<https://www.aasa.ac.jp/guidance/about/policy.html>）

（概要）

■心理学科

心理学科は、〈心の多様性と普遍性の理解〉を基本理念とし、人間行動のさまざまな現象を現代心理学の主要な領域から多角的な視点で総合的に究明する教育研究を行う。これにより、他者を尊重するとともに、自己を正しく表出しようとする人材、さらには人間関係の中で生じる諸問題に適切に対処し得る人材を育成することを目的とする。

卒業又は修了の認定に関する方針（公表方法：

https://www.aasa.ac.jp/guidance/public_info/diploma_policy_fac.html）

（概要）

現代の心理学は実証主義に基づく経験科学であり、また、現実生活で生じる人と人、人と環境のダイナミックな相互作用現象を問題にする行動科学である。したがって、現象を机上のみで理解するのではなく、現象を捉える客観的なデータの収集、分析、考察という、段階的に積み上げていく科学的アプローチが必要とされる。心理学部ではこのような特徴をもつ現代心理学の学修を通じて、心の多様性と普遍性を理解し、他者を尊重するとともに、自己を正しく表出することができる人材、さらには人間関係の中で生じる諸問題に適切に対処することができる人材を育成することを目指している。この目標を達成するため、人間行動のさまざまな現象を現代心理学の主要な領域である「生理・認知」「社会」「発達」「臨床」の 4 つの領域から多角的な視点で総合的に究明するカリキュラムを編成し、以下のような知識・能力を身につけた者に学位を授与する。

- ・心の多様性と普遍性、人と人、人と環境の相互作用を理解する力
- ・科学的な根拠に基づいて実証的に分析し、論理的に思考する力
- ・幅広い人間行動や社会現象の中から問題点を発見し解決していく力
- ・ディスカッションやプレゼンテーションを含むコミュニケーション力

教育課程の編成及び実施に関する方針（公表方法：

https://www.aasa.ac.jp/guidance/public_info/curriculum_policy_fac.html）

（概要）

本学部が目指す『4 つの知識・能力を身につけた人材』の養成を実現するために、以下のよ

うな方針でカリキュラムを編成する。

『心の多様性、普遍性に気づき、人と社会がどのように相互作用するのかを理解する力』を効果的に獲得できるよう、「心理学的な視点の広さ」と「科目間の有機的なつながり」を十分に考慮して1、2年次の科目を配し、各授業を計画する。また、それらの授業は専任教員が中心となって担当する。

「心理学」は、中等教育では学習されておらず、間違ったイメージを持っている可能性が高いことに鑑み、1年次には心理学の基礎知識を幅広く学べる科目を配置する。心理学への興味関心を維持、喚起するため、1年次から2年次にかけては、段階的に、より高度で新しい心理学の知識の修得を目標とした科目を、「生理・認知」「社会」「発達」「臨床」の領域でそれぞれ配置する。学生には、この4領域を偏りなく履修することを求める。

心の多様性、普遍性に気づき、理解するためには、以上のような1、2年次での幅広い視点からの段階的学修が必要不可欠である。この幅広い視点をさらに広げるため、専門領域に特化した心理学講義・演習科目を3年次以降に配し、自由な履修を求める。また、多様な視点を獲得させるべく、教養および心理学関連の講義科目を1年次から配置する。

『科学的根拠に基づいて実証的に分析し、それに基づいて論理的に思考する力』を学ぶため、知識を修得するための科目と同時に、1年次から実習、演習科目を必修とする。目には見えない心の働きを数量化、分類化することは、論理的に思考するために必要不可欠である。そのため、実際に他人からデータを採取する実習、演習科目を1年次から4年次まで、段階的に配置する。実習、演習科目で扱う題材は、基礎的知識を修得する科目で学んだことに依拠するものとし、また実習、演習科目で求められるスキルもそれまでの科目で修得したものとする。これらの実習、演習科目では、仮説の導出、データ収集・分析から結論を論理的に導く過程を学ぶだけでなく、グループでのディスカッションや、口頭、並びに研究レポートによる研究成果のプレゼンテーションを通じた、『コミュニケーション力』の向上も目指すものとする。

公認心理師資格取得を強く希望する学生には、1年次より講義科目並びに実習科目を段階的に履修するように求める。公認心理師につながる心理職の知識・技能を獲得するために、1、2年次より心理職の知識や関連領域の講義科目を配置し、2年後期からは、心理的支援の知識に関する講義科目や心理的支援の技術に関する実習、演習科目を用意する。

3年次以降の2年間は、専門演習、いわゆるゼミを用意し、ゼミに所属することを全員に求める。これは、1、2年次で修得した基礎知識とスキルを基に、学生自らが見つけた問いを、学生自らが心理学的アプローチにより実証し、卒業研究として完遂することを求めるためである。これを修学の集大成とする。卒業研究完成にいたる過程は、『幅広い人間行動や社会現象の中から問題点を発見し解決する力』の向上につなげるものとする。学生が研究を実施するにあたり、その多様な関心に応えられるよう、専門が異なる多くの専任教授陣を用意し十分な指導をおこなう。

入学者の受入れに関する方針（公表方法：

https://www.aasa.ac.jp/life/support/summary/pdf/summary_2025.pdf）

（概要）

1.学生に期待すること

心理学部では、人間に関わるさまざまな現象に関心を持ち、論理的かつ客観的に分析していく姿勢が求められる。また、人の心の問題について自分なりの考えを持っているだけでなく、異なる意見を持つ人たちと議論しながら考えをまとめていくことも必要となる。こうした学修活動に積極的に取り組むことが期待される。

2.学生募集に際して重視すること

心理学部では、自らおこなう心理学の研究を卒業論文という形でまとめる。そのためには、図表などからデータを読み取り、それに基づいて客観的に考え、まとめる力が必要である。また、自分の考えを主張するだけでなく、多角的な視点をふまえた上で他者と議論するコミュニケーションの力も必要となる。さらに、本学心理学部で学ぶことができる内容についても、偏りなく把握しておくことが重要である。

3.入学前学習として推奨すること

心理学は、文系・理系といった枠にとらわれない。文章理解力や数学的な分析力はもとより、人間の生物学的な特徴の理解も必要であるし、社会学的な視点も必要である。つまり、高校で学ぶ主要教科の基礎学力をバランスよく確実に身につけておく必要がある。そのため、受験のための教科以外についても、高校までの学習内容を復習しておくことが大切である。

創造表現学部

教育研究上の目的（公表方法：

<https://www.aasa.ac.jp/guidance/about/policy.html>）

（概要）

創造表現学部は、全ての表現活動の基礎となる創造力の涵養を基本理念とする。この理念に基づき、「言語」「メディア」「空間」といった多様な表現領域を包括した総合的な文化の構築や情報発信の担い手を育成することを教育の目的とする。学部の理念に基づき構成される、「創作表現」「メディアプロデュース」「建築・インテリアデザイン」の3専攻の理念及び教育目的は、次の通りである。

【創造表現学科 創作表現専攻】

創造表現学科 創作表現専攻は、知的財産としての言語文化・表象文化に関する見識を持ち、その価値の継承・発信の社会的意義を理解しつつ、自己の考えを的確に伝えることのできる人材の育成を目的とし、文化的叡智に幅広く触れることで総合的な判断力を養い、文芸を中心とした創造的な表現活動に携わり得る知識と表現技術を身につけるための教育研究を行う。

【創造表現学科 メディアプロデュース専攻】

創造表現学科 メディアプロデュース専攻は、ビジュアルメディアを中心に映像制作、メディアコンテンツ制作、コミュニケーションデザインなどの分野でメディアの特徴を活かし戦略的に企画・立案できる人材の養成を目的とし、変化する情報メディア社会の諸課題に適切な対処ができ、豊かな自己表現を通して情報発信し得る専門的知識と実践的能力を身につけるための教育研究を行う。

■創造表現学科 建築・インテリアデザイン専攻

創造表現学科 建築・インテリアデザイン専攻は、建築・インテリアデザイン及びそれに関連する分野で活躍する人材の養成を目的とし、環境、歴史、文化、機能、経済性やエネルギーなどの多様な条件を読み解き、現代社会の様々な課題に取り組むとともに、将来にわたる長いタイムスパンで都市や人々の生活を描く構想力を持ち、広く社会に貢献しうる専門的知識と優れた実践的能力を身につけるための教育研究を行う。

卒業又は修了の認定に関する方針（公表方法：

https://www.aasa.ac.jp/guidance/public_info/diploma_policy_fac.html）

（概要）

〈2025 年度入学者〉

創造表現学部では、それぞれの専攻の学修を通じて「表現力」「創造力」「コミュニケーション力」を高めることによって、豊かな自己表現ができ、実社会の諸問題にも適切な対処ができる人材の育成を目標にしている。この教育目標を達成するために、以下にあげのような能力を修得した学生に学位を授与する。

■創作表現専攻

1. 知的財産としての言語文化・表象文化に関する見識を持ち、その価値の継承・発信の社会的意義を理解することができる。（知識・関心・理解）

2. 文化的叡智に幅広く触れることで総合的な判断力を養い、自己の考えを他者に的確に伝えることができる。（思考・判断）
3. 文芸を中心とした創造的な表現活動に携わり得る知識と実践的な表現技術とを身につけることができる。（技能・表現）

■メディアプロデュース専攻

1. PC やメディア機器を使用する映像処理を理解し、ビデオやパンフレットなどのメディアコンテンツの制作に関する基礎知識を身につけている。（技能・表現）
2. 各種メディアの特徴を理解し、メディアを利用して豊かに表現、発想ができ、戦略的に企画・立案する能力を身につけている。（関心・態度）
3. 現代社会の問題を読み解き、時代のニーズを的確に捉え、社会的視座を持って問題解決に臨むことができる。（知識・理解）

〈2024 年度以前入学者〉

創造表現学部では、それぞれの専攻の学修を通じて「表現力」「創造力」「コミュニケーション力」を高めることによって、豊かな自己表現ができ、実社会の諸問題にも適切な対処ができる人材の育成を目標にしている。この教育目標を達成するために、以下にあげるような能力を修得した学生に学位を授与する。

■創作表現専攻

1. 知的財産としての言語文化・表象文化に関する見識を持ち、その価値の継承・発信の社会的意義を理解することができる。（知識・関心・理解）
2. 文化的叡智に幅広く触れることで総合的な判断力を養い、自己の考えを他者に的確に伝えることができる。（思考・判断）
3. 文芸を中心とした創造的な表現活動に携わり得る知識と実践的な表現技術とを身につけることができる。（技能・表現）

■メディアプロデュース専攻

1. PC やメディア機器を使用する映像処理を理解し、ビデオやパンフレットなどのメディアコンテンツの制作に関する基礎知識を身につけている。（技能・表現）
2. 各種メディアの特徴を理解し、メディアを利用して豊かに表現、発想ができ、戦略的に企画・立案する能力を身につけている。（関心・態度）
3. 現代社会の問題を読み解き、時代のニーズを的確に捉え、社会的視座を持って問題解決に臨むことができる。（知識・理解）

■建築・インテリアデザイン専攻

1. 周辺環境、文化的背景、機能や経済性などの多様な条件を読み解き、建築・インテリアに関わる各種課題を解決するために必要な思考力・判断力を有する。（思考・理解・判断）
2. コンセプトを的確に伝えるプレゼンテーション能力と共同作業に必要なコミュニケーション能力を身につけている。（表現・態度）
3. 建築の専門的知識と技能を身に付け、一級建築士などの資格を目指すことができる。（知識・技能）

教育課程の編成及び実施に関する方針（公表方法：

https://www.aasa.ac.jp/guidance/public_info/curriculum_policy_fac.html）

（概要）

〈2025 年度入学者〉

1. 創造表現学部のカリキュラム・ポリシー

創造表現学部では、人間のあらゆる創造活動の中から言語表現、視覚的情報伝達に特化

してそれぞれを柱とする専攻を設け、作品を「生み出す」行為を学術的に理論づけ、実践的に学べるようカリキュラムを編成する。また、創造性を涵養し、実社会で豊かに表現できる人材を育成するという目標を達成するために、各分野において「表現力」「創造力」「コミュニケーション力」を高められるよう具体的な課題解決を題材として学んでいくことを重視しており、それらは特に演習や実習の授業の中でアクティブに展開される。そのため、教員にも実務家や芸術家・作家を多く揃え、学生の創造活動を幅広く支援できるような授業体制をとる。

学修の進行にも配慮し、1 年次には、創作の魅力に触れる機会を提供して学修意欲を高めるとともに、多様な表現方法の存在に目を向けられるような科目を用意する。2 年次から 3 年次にかけては、基礎から応用へと移行するための科目を習熟度に従って段階的に展開し、4 年次には卒業プロジェクトやゼミの演習を通じて学修の成果を作品や論考としてまとめることを主眼とする。さらに、学部共通科目や他専攻の授業を自らの興味・関心に沿って履修することもできるようにし、多角的・総合的な視野を養うことができるようなシステムを整える。各専攻のカリキュラム・ポリシーは次の通りである。

■創作表現専攻

- (1) 1・2 年次は、基礎科目の学修と基礎演習等によるアカデミックリテラシーの養成とを軸にして、文芸を中心とした創造的な表現活動に携わるための基礎的な知識および能力を身につける。
- (2) 3・4 年次は、応用科目の学修と演習での協同学習とを軸に表現技術を磨き、卒業プロジェクトに学修成果を結実させる。

■メディアプロデュース専攻

- (1) 講義科目を通じて、メディアプロデュースに関する専門知識を身につける。
- (2) 実習系の授業を通じて、コンテンツに関する企画・構想力、表現力などのスキルを身につける。
- (3) ゼミや演習系の授業を通じて、現代社会や地域文化、メディア産業等に関する知識を生かす術を身につけ、コミュニケーション力を身につける。

2. 学部共通科目の設置

創造表現のスキルを磨くことは重要な課題であるが、何を表現し発信すべきであるのか、その理念や発想こそが最も重要な部分である。本学部では、社会や文化に対する意識や分析能力の向上を教育の重点課題とし、次の三つの観点からバックグラウンドの充実を図っていきけるように、各専攻の学修の基盤となる学部共通科目を設置する。

- (1) 芸術的素養を身につける

文学・文芸・美術・デザイン・音楽等、芸術作品を理解する力を高め、創作意欲に結びつけ、芸術的素養を磨いていく。

- (2) 科学的分析力を身につける

現状を把握し読み解く力、論理的思考力、具体的提案能力など基礎的な思考力を高め、創造活動の深化に結びつけていく。

- (3) 社会的視野を広げる

社会・民族・宗教・政治・文化・歴史の諸問題に対する理解力を高め、現代社会の状況を論理的に分析できる力を育み、創造活動の基盤を強化する。

3. カリキュラムの全体構成

授業科目は学部共通科目と各専攻の専門科目とに二分されるが、学生は、学部共通科目と各専攻の専門基礎科目との学修を足がかりにして、以後、学年進行にしたがって、応用科目・発展科目へと段階的に履修する。

授業科目の形態上の分類は、講義と演習、論文と制作、机上研究（デスクワーク）と体験的学修（フィールドワーク）といった組み合わせからなり、更に、学修の段階に応じて理論系・制作系の科目と演習（ゼミ）とを配置する。

〈2024 年度以前入学者〉

1.創造表現学部のカリキュラム・ポリシー

創造表現学部では、人間のあらゆる創造活動の中から言語表現、視覚的情報伝達、空間造形に特化してそれぞれを柱とする専攻を設け、作品を「生み出す」行為を学術的に理論づけ、実践的に学べるようカリキュラムを編成する。また、創造性を涵養し、実社会で豊かに表現できる人材を育成するという目標を達成するために、各分野において「表現力」「創造力」「コミュニケーション力」を高められるよう具体的な課題解決を題材として学んでいくことを重視しており、それらは特に演習や実習の授業の中でアクティブに展開される。そのため、教員にも実務家や芸術家・作家を多く揃え、学生の創造活動を幅広く支援できるような授業体制をとる。

学修の進行にも配慮し、1 年次には、創作の魅力に触れる機会を提供して学修意欲を高めるとともに、多様な表現方法の存在に目を向けられるような科目を用意する。2 年次から 3 年次にかけては、基礎から応用へと移行するための科目を習熟度に従って段階的に展開し、4 年次には卒業プロジェクトやゼミの演習を通じて学修の成果を作品や論文としてまとめることを主眼とする。さらに、学部共通科目や他専攻の授業を自らの興味・関心に沿って履修することもできるようにし、多角的・総合的な視野を養うことができるようなシステムを整える。各専攻のカリキュラム・ポリシーは次の通りである。

■創作表現専攻

- (1) 1・2 年次は、基礎科目の学修と基礎演習等によるアカデミックリテラシーの養成とを軸にして、文芸を中心とした創造的な表現活動に携わるための基礎的な知識および能力を身につける。
- (2) 3・4 年次は、応用科目の学修と演習での協同学習とを軸に表現技術を磨き、卒業プロジェクトに学修成果を結実させる。

■メディアプロデュース専攻

- (1) 講義科目を通じて、メディアプロデュースに関するさまざまな専門知識を身につける。
- (2) 実習系の授業を通じて、コンテンツに関する企画・構想力、表現力などのスキルを身につける。
- (3) ゼミや演習系の授業を通じて、グローバル社会や地域文化、メディア産業等に関する知識を生かす術を身につけ、コミュニケーション能力を身につける。

■建築・インテリアデザイン専攻

- (1) 講義科目を通じて、建築の専門知識を基礎から応用まで身につける。
- (2) 豊富な実習系の授業を通じて、様々なプレゼンテーションスキルを身につける。
- (3) 実験系の授業を通じて、物理現象を体験・理解し、専門技術を身につける。
- (4) ゼミや演習系の授業を通じて、共同作業を行い、実社会で役に立つスキルを身につけるため、具体的な問題解決を前提とした課題に取り組む。
- (5) 一級建築士、建築施工管理技士、インテリアプランナー等の資格取得に必要な指定科目を学修することによって、それぞれの専門分野で役に立つ知識・能力を身につける。

2. 学部共通科目の設置

創造表現のスキルを磨くことは重要な課題であるが、何を表現し発信すべきであるのか、その理念や発想こそが最も重要な部分である。本学部では、社会や文化に対する意識や分析能力の向上を教育の重点課題とし、次の三つの観点からバックグラウンドの充実を図っていきけるように、各専攻の学修の基盤となる学部共通科目を設置する。

- (1) 芸術的素養を身につける

文学・文芸・美術・デザイン・音楽等、芸術作品を理解する力を高め、創作意欲に結びつけ、芸術的素養を磨いていく。

- (2) 科学的分析力を身につける

現状を把握し読み解く力、論理的思考力、具体的提案能力など基礎的な思考力を高め、

創造活動の深化に結びつけていく。

(3) 社会的視野を広げる

社会・民族・宗教・政治・文化・歴史の諸問題に対する理解力を高め、現代社会の状況を論理的に分析できる力を育み、創造活動の基盤を強化する。

3. カリキュラムの全体構成

授業科目は学部共通科目と各専攻の専門科目とに二分されるが、学生は、学部共通科目と各専攻の専門基礎科目との学修を足がかりにして、以後、学年進行にしたがって、応用科目・発展科目へと段階的に履修する。

授業科目の形態上の分類は、講義と演習、論文と制作、机上研究（デスクワーク）と体験的学修（フィールドワーク）といった組み合わせからなり、更に、学修の段階に応じて理論系・制作系の科目と演習（ゼミ）とを配置する。

入学者の受入れに関する方針（公表方法：

https://www.aasa.ac.jp/life/support/summary/pdf/summary_2025.pdf）

（概要）

創造表現学部では、それぞれの専攻の学修を通じて「表現力」「創造力」「コミュニケーション力」を高めることによって、豊かな自己表現ができ、実社会の諸問題にも適切な対処ができる人材の育成を目標にしている。この目標を達成するために、入学者には以下の点を期待する。

■創造表現学科 創作表現専攻

1. 学生に期待すること

知的財産としての言語文化・表象文化についての興味関心と、それについて深く学ぼうとする意欲とを抱いて入学してほしい。

2. 学生募集に際して重視すること

本専攻のカリキュラムを理解し、文芸を中心とした創造的な表現活動に携わり得る知識と実践的な表現技術とを修めるのに必要な基礎力を有していること。

3. 入学前学習として推奨すること

高等学校までの学習範囲の知識・技能の修得。特に、国語の学習や読書を通して、文章を筋道立てて読み取る読解力と、自分の考えを正しく明確に表すことのできる表現力を磨いてほしい。

■創造表現学科 メディアプロデュース専攻

1. 学生に期待すること

現代のメディア社会の課題に関心を持ち、マスメディアやソーシャルメディアの役割を知ること。そうした社会のなかで、デジタルメディアや映像、情報デザインなどを通して表現に取り組み、創造的な価値をもたらすクリエイティブな人を目指すこと。

2. 学生募集に際して重視すること

基礎的な読解力や作文能力、他者とコラボレーションできるコミュニケーション能力、ビジュアル、写真、映像などを用いた表現力を持つことが望ましい。あるいは、これらの能力の向上に前向きであること。

3. 入学前学習として推奨すること

・映像作品や、身の回りにあるデザインなどに興味を持ち、それらがどのように制作されているのか、自ら調べて情報収集する。

・社会や表現活動の動向を多角的に見る習慣を身につける。具体的には、関連分野の読書や報道番組の視聴、芸術作品の鑑賞や批評に触れること。

建築学部
教育研究上の目的（公表方法： https://www.aasa.ac.jp/guidance/about/policy.html） （概要） ■建築学科 建築学科は、建築の計画・設計、歴史、材料、構造、環境・設備、まちづくり、インテリアデザインなど建築学とそれに関連する複数分野の専門的学修を行い、それらを通じて「コミュニケーション力」、「表現力」、「創造力」を高めることにより、建築、インテリア、都市計画、まちづくりなどにおける実社会の諸問題の解決や、より豊かで質の高い生活の創生に貢献する人材の育成を目標とする。
卒業又は修了の認定に関する方針（公表方法： https://www.aasa.ac.jp/guidance/public_info/diploma_policy_fac.html） （概要） 建築学部は、建築の計画・設計、歴史、材料、構造、環境・設備、まちづくり、インテリアデザインなど建築学とそれに関連する複数分野の専門的学修を行い、それらを通じて「コミュニケーション力」、「表現力」、「創造力」を高めることにより、建築、インテリア、都市計画、まちづくりなどにおける実社会の諸問題の解決や、より豊かで質の高い生活の創生に貢献する人材の育成を目標としている。この教育目標は、本学の理念である「違いを共に生きる」を建築・まちづくり、住居・インテリアの分野で実践するものであり、これを達成するために以下に掲げるような能力を修得した学生に学位を授与する。 1. 周辺環境、文化的背景、機能や経済性などの多様な条件を読み解き、建築・まちづくり、住居・インテリアデザインに関わる各種課題を解決するために必要な思考力・判断力を有する。（思考・理解・判断） 2. 諸条件を満たすアイデアやコンセプトを発案する創造力、それらを具体化する計画能力及び的確に伝えるプレゼンテーション能力、共同作業に必要なコミュニケーション能力を有する。（創造・表現・態度） 3. 建築に関わる計画・設計、歴史、材料、構造、環境などの十分な基礎知識を背景とした建築の専門的知識と技術とを身に付け、一級建築士などの資格取得を目指すことができるとともに、建築・まちづくり、住居・インテリアデザインの専門家として社会貢献できる能力を有する。（知識・技能・専門）
教育課程の編成及び実施に関する方針（公表方法： https://www.aasa.ac.jp/guidance/public_info/curriculum_policy_fac.html） （概要） 1. 建築学部のカリキュラム・ポリシー 建築学部では、建築の設計・施工などに携わることを目標とする〔建築〕科目群、既存の建築と周囲環境とを保存しつつ歴史・文化・伝統を継承し、再生することを目標とする〔まちづくり〕科目群、住居、インテリア、家具など、多様な人々が生活する空間を目的に応じて機能的にしつつ生理的・心理的に心地良くするための考え方・方法を学ぶ〔住居〕科目群、〔インテリアデザイン〕科目群があり、これらの科目群を学術的に理論付け、実践的に学修できるようにカリキュラム編成をする。4つの科目群は初年次より縦断的に配置されていると同時に互いに重なり合っており、科目群を横断的に履修することでそれぞれの目標に対して幅広い視野・知見を得ることができる。講義系科目は学部・学科で共通であるが、設計課題や実験・実習などの演習系科目では基本的に専攻ごとの履修体系を持つ。学修の進行にも配慮し、1年次には、建築・まちづくり、住居・インテリアデザインの魅力に触れる機会を提供して学修意欲を高めるとともに、多様な表現方法の存在に目を向けられるような科目を用意する。2年次から3年次にかけては、基礎から応用へと移行するための科目を習熟度に従って段階的に展開し、4年次には卒業プロジェクトやゼミ（教員ご

との少人数演習)を通じて学修の成果を作品や研究論文としてまとめることを主たる目標とする。

建築学部の授業科目は、専門基礎科目と専門応用科目、専門発展科目とに区分される。学生は、専門基礎科目の学修を基礎として、以後、学年進行に従って、専門応用科目、専門発展科目へと段階的に履修する。授業科目の形態上の分類は、講義と演習、実験・実習から構成され、それぞれの分野についてこれらの授業科目を組み合わせることで学修を深めていく。本学部のカリキュラム・ポリシーは次の通りである。

- (1) 講義科目を通じて、建築・まちづくり、住居・インテリアデザインの専門知識を基礎から応用まで身に付ける。
- (2) 豊富な実習系の授業を通じて、アイデアを求められた成果物に具現化するまでの能力を身に付ける。
- (3) 実験系の授業を通じて、建築に関わる様々な物理現象や技術を実際に体験し実感をともなった知識を身に付ける。
- (4) ゼミや演習系の授業を通じて、具体的な問題の解決を前提とした共同作業を行い、ディスカッションとコミュニケーション、プレゼンテーションなどの実社会で役に立つ能力を身に付ける。
- (5) 一級・二級建築士、建築施工管理技士、インテリアプランナー・コーディネーターなどの資格取得に必要な指定科目を学修することによって、それぞれの専門分野で役に立つ知識・能力を身に付ける。

入学者の受入れに関する方針（公表方法：

https://www.aasa.ac.jp/life/support/summary/pdf/summary_2025.pdf）

（概要）

建築学部は、建築とその内部空間、建築群を含む都市と地域、周囲環境との関わり方を考え、国や地域の歴史や文化、風土・気候などの多様な観点から将来目指すべき持続可能な建築・都市の未来像を構想する。建築・まちづくり、住居・インテリアデザインを学術的・実践的に学ぶことは、様々な学問領域を横断的・縦断的に学び応用することでもあることから、従来の思考の枠組みや自身の無意識の限界を自ら越えようという意欲と熱意を持つ学生の入学を期待する。

■建築学部建築学科 建築・まちづくり専攻

1. 学生に期待すること

- ・ 建築・まちづくりに限らず、様々なモノやコトに対する好奇心と興味・関心を持つこと。
- ・ 知らないことや知っているつもりのことを、自身の頭と身体を使って理解しようと心掛けること。
- ・ 建築やまちづくりを学ぶことを通して自然・環境・工学・芸術・歴史・文化・風土などのつながりを意識し、部分と全体とを同時に見る広い視野を持てるように心掛けること。

2. 学生募集に際して重視すること

- ・ 建築や環境・都市の機能や文化など有形無形のモノやコトを創造することに深い関心と高い情熱を持っていること。
- ・ 建築空間を目的に応じて機能的にしつつ生理的・心理的に心地良くすることに深い関心と高い情熱を持っていること。
- ・ 既存の建築と周囲の都市・環境に新たな機能と価値を加え、歴史・文化・伝統を継承し再生・発展させることに深い関心と高い情熱を持っていること。

3. 入学前学習として推奨すること

- ・ 建築やまちづくりなどととらわれず、幅広い分野の書籍・文献などをたくさん読み多様な世界に触れること。
- ・ 年代や場所にとらわれず様々な地域の町並みや建築を訪れ、それらの全体や細部・内部、周囲環境を見るとともに五感で建築空間の環境を感じ取ること。
- ・ 建築学は文系・理系などの学問分野の枠にとらわれず、様々な分野の学問を学び多様な視点を持つことが求められる。このことを踏まえて、国語や数学における文章理解力や

数理的分析力のみならず、環境や歴史、地域・社会への関心など、高校で学ぶ教科・科目の基礎的学力をバランスよく習得すること。

■建築学部建築学科 住居・インテリアデザイン専攻

1. 学生に期待すること

- ・住居・インテリアデザインに限らず、様々なモノやコトに対する好奇心と興味・関心を持つこと。
- ・知らないことや知っているつもりのことを、自身の頭と身体を使って理解しようと心掛けること。
- ・住居・インテリアデザインを学ぶことを通して自然・環境・芸術・歴史・文化・風土などのつながりを意識し、部分と全体とを同時に見る広い視野を持てるように心掛けること。

2. 学生募集に際して重視すること

- ・住居の形態や住まい方、空間内部の機能や視覚的デザインなど有形無形のモノやコトを創造することに深い関心と高い情熱を持っていること。
- ・住居空間を目的や住まい方に応じて機能的にしつつ視覚的・心理的に心地良くすることに深い関心と高い情熱を持っていること。
- ・既存建築の内部空間に新たな機能と価値を加え、歴史・文化・伝統を継承しつつ再生・発展させることに深い関心と高い情熱を持っていること。

3. 入学前学習として推奨すること

- ・住居やインテリアデザインなどにとらわれず、幅広い分野の書籍・文献などをたくさん読み多様な世界に触れること。
- ・様々な地域の町並みや建築を訪れ、それらの全体や細部・内部、周囲環境を見るとともに五感で建築空間の環境を感じ取ること。
- ・建築学は文系・理系などの学問分野の枠にとらわれず、様々な分野の学問を学び多様な視点を持つことが求められる。このことを踏まえて、国語や数学における文章理解力や数理的分析力のみならず、環境や歴史地域・社会への関心など、高校で学ぶ教科・科目の基礎的学力をバランスよく習得すること。

健康医療科学部

教育研究上の目的（公表方法：

<https://www.aasa.ac.jp/guidance/about/policy.html>）

（概要）

■医療貢献学科 言語聴覚学専攻

医療貢献学科 言語聴覚学専攻においては、言語聴覚士の国家資格を目指し、障がい児・者支援のための専門家として必要な知識と技能を有する人材、および職能の範囲にとどまらず、豊かなコミュニケーション能力を有し、必要に応じて問題点を発見し、新しい検査・評価・訓練・指導・支援の技法の開発および評価を行い得る知識と技能を有する人材、加えて科学的な根拠にもとづいて実証的に分析し、論理的に思考する能力を有する人材の育成のために必要な教育研究を行う。

■医療貢献学科 視覚科学専攻

医療貢献学科 視覚科学専攻においては、視能訓練士の国家資格を目指し、障がい児・者支援のための専門家として必要な知識と技能を有する人材、および職能の範囲にとどまらず、必要に応じて問題点を発見し、新しい検査・評価・訓練・指導・支援の技法の開発および評価を行い得る知識と技能を有する人材、加えて科学的な根拠にもとづいて実証的に分析し、論理的に思考する能力を有する人材の育成のために必要な教育研究を行う。

■医療貢献学科 理学療法学専攻

医療貢献学科 理学療法学専攻においては、理学療法士の国家資格取得を目指し、障がい児・

者支援のための専門家、とりわけ、小児理学療法専門家として必要な知識と技能を有する人材、および多職種の視点も加味して問題を発見し理学療法を行い得る知識と技能を有すると同時に、新しい検査や練習支援の技法の開発に意欲を有する人材、加えて科学的な根拠にもとづいて実証的に分析し、論理的思考能力を有する人材の育成のために必要な教育研究を行う。

■医療貢献学科 臨床検査学専攻

医療貢献学科 臨床検査学専攻においては、臨床検査技師の国家資格取得を目指し、高い倫理観を持った臨床検査の専門家として必要な知識と技能を有する人材、およびチーム医療実践のための基本的能力を有し、職能の範囲にとどまらず、問題点を発見し解決するための知識と技能を有する人材、加えて臨床検査に関する問題を自ら発見し、問題解決に向け科学的な根拠にもとづいて論理的に思考し実証的に分析する能力を有し、科学技術の進歩を踏まえた新たな検査の開発および評価を行い得る知識と技能を有する人材の育成のために必要な教育研究を行う。

■スポーツ・健康医科学科 スポーツ・健康科学専攻

スポーツ・健康医科学科 スポーツ・健康科学専攻においては、スポーツ・運動科学および健康科学に関する幅広い知識を有し、その知識を背景に、生涯にわたる健康の維持・増進に携わる専門家として認められる人材、および生涯健康に関する諸問題に対し、自ら考え、解決策を見出し、それをもとに行動できる人材を育成するために必要な教育研究を行う。

■スポーツ・健康医科学科 救急救命学専攻

スポーツ・健康医科学科 救急救命学専攻においては、救急救命士の国家資格を目指し、健康と救急救命を中心とした医学に関する基礎的な知識を有し、社会に貢献できる人材、救急救命士として科学的根拠にもとづく論理的思考、総合的な観察力と判断力およびコミュニケーション能力を有し、病院前救護の専門家として人命を守る中心的役割を担う人材の育成のために必要な教育研究を行う。

卒業又は修了の認定に関する方針（公表方法：

https://www.aasa.ac.jp/guidance/public_info/diploma_policy_fac.html）

（概要）

〈2024 年度以降入学者〉

健康医療科学部は高齢者や障がいのある人をはじめ、すべての人の生活の質を向上することに貢献し得る人材、さらに良い人間関係を築くための対人技術および他者への理解と尊重を有する人材の育成を目標にしている（態度）。

この教育目標を達成するために、以下の能力を習得した学生に学位を授与する。

■医療貢献学科（言語聴覚学専攻）

- 1.言語聴覚士の国家資格を目指し、障がい児・者支援のための専門家として必要な知識と技能を有する者（知識・技能）
- 2.職能の範囲にとどまらず、豊かなコミュニケーション能力を有し、必要に応じて問題点を発見し、新しい検査・評価・訓練・指導・支援の技法の開発および評価を行い得る知識と技能を有する者（意欲・判断力・開発力・コミュニケーションスキル）
- 3.科学的な根拠にもとづいて実証的に分析し、論理的に思考する能力を有する者（科学的思考力）

■医療貢献学科（視覚科学専攻）

- 1.視能訓練士の国家資格を目指し、障がい児・者支援のための専門家として必要な知識と技能を有する者（知識・技能）
- 2.職能の範囲にとどまらず、必要に応じて問題点を発見し、新しい検査・評価・訓練・指導・支援の技法の開発および評価を行い得る知識と技能を有する者（意欲・判断力・開

発力)

- 3.科学的な根拠にもとづいて実証的に分析し、論理的に思考する能力を有する者（科学的思考力）

■医療貢献学科（理学療法学専攻）

- 1.理学療法士の国家資格取得を目指し、障がい児・者支援のための専門家、とりわけ、小児理学療法の専門家として必要な知識と技能を有する者（知識・技能）
- 2.理学療法士として、多職種の視点も加味して問題点を発見し理学療法を行い得る知識と技能を有すると同時に、新しい検査や練習・支援技法の開発に意欲を有する者（意欲・判断力・開発力）
- 3.科学的な根拠にもとづいて実証的に分析し、論理的思考能力を有する者（科学的思考力）

■医療貢献学科（臨床検査学専攻）

- 1.臨床検査技師の国家資格取得を目指し、高い倫理観を持った臨床検査の専門家として必要な知識と技能を有する者（知識・技能・臨床力）
- 2.チーム医療実践のための基本的能力を有し、職能の範囲にとどまらず、問題点を発見し解決するための知識と技能を有する者（意欲・判断力・コミュニケーションスキル）
- 3.臨床検査に関する問題を自ら発見し、問題解決に向け科学的な根拠にもとづいて論理的に思考し実証的に分析する能力を有し、科学技術の進歩を理解し新たな検査の開発および評価をおこない得る知識と技能を有する者（科学的思考力・開発力）

■スポーツ・健康医科学科（スポーツ・健康科学専攻）

- 1.スポーツ・運動科学および健康科学に関する幅広い知識を有し、その知識を背景に、生涯にわたる健康の維持・増進に携わる専門家として認められる者（知識・技能）
- 2.修得した知識をもとに生涯健康に関する諸問題に対し、自ら考え、解決策を見出し、それをもとに行動できる者（意欲・判断力・創造力・行動力）
- 3.スポーツ、運動および健康に関する問題に対し、科学的な根拠にもとづいて実証的に分析し、論理的に思考する能力を有する者（科学的思考力）

■スポーツ・健康医科学科（救急救命学専攻）

- 1.救急救命士の国家資格を目指し、健康と救急救命を中心とした医学に関する基礎的な知識を有し、その知識を背景として人命を守り、社会に貢献できる者（知識・技能）
- 2.救急救命士として必要とされる総合的な観察力、知識にもとづいた判断力、およびコミュニケーション能力を有し、それをもとにチームワークとリーダーシップのある行動ができる者（観察力・判断力・コミュニケーションスキル・行動力）
- 3.救急救命士として求められる科学的根拠にもとづいた論理的な思考力を有する者（科学的思考力）

〈2021年度～2023年度入学者〉

健康医療科学部は高齢者や障がいのある人をはじめ、すべての人の生活の質を向上することに貢献し得る人材、さらに良い人間関係を築くための対人技術および他者への理解と尊重を有する人材の育成を目標にしている（態度）。この教育目標を達成するために、以下の能力を習得した学生に学位を授与する。

■医療貢献学科（言語聴覚学専攻）

- 1.言語聴覚士の国家資格を目指し、障がい児・者支援のための専門家として必要な知識と技能を有する者（知識・技能）
- 2.職能の範囲にとどまらず、豊かなコミュニケーション能力を有し、必要に応じて問題点を発見し、新しい検査・評価・訓練・指導・支援の技法の開発および評価を行い得る知識と技能を有する者（意欲・判断力・開発力・コミュニケーションスキル）
- 3.科学的な根拠にもとづいて実証的に分析し、論理的に思考する能力を有する者（科学的

思考力)

■医療貢献学科（視覚科学専攻）

- 1.視能訓練士の国家資格を目指し、障がい児・者支援のための専門家として必要な知識と技能を有する者（知識・技能）
- 2.職能の範囲にとどまらず、必要に応じて問題点を発見し、新しい検査・評価・訓練・指導・支援の技法の開発および評価を行い得る知識と技能を有する者（意欲・判断力・開発力）
- 3.科学的な根拠にもとづいて実証的に分析し、論理的に思考する能力を有する者（科学的思考力）

■スポーツ・健康医科学科（スポーツ・健康科学専攻）

- 1.スポーツ・運動科学および健康科学に関する幅広い知識を有し、その知識を背景に、生涯にわたる健康の維持・増進に携わる専門家として認められる者（知識・技能）
- 2.修得した知識をもとに生涯健康に関する諸問題に対し、自ら考え、解決策を見出し、それをもとに行動できる者（意欲・判断力・創造力・行動力）
- 3.スポーツ、運動および健康に関する問題に対し、科学的な根拠にもとづいて実証的に分析し、論理的に思考する能力を有する者（科学的思考力）

■スポーツ・健康医科学科（救急救命学専攻）

- 1.救急救命士の国家資格を目指し、健康と救急救命を中心とした医学に関する基礎的な知識を有し、その知識を背景として人命を守り、社会に貢献できる者（知識・技能）
- 2.救急救命士として必要とされる総合的な観察力、知識にもとづいた判断力、およびコミュニケーション能力を有し、それをもとにチームワークとリーダーシップのある行動ができる者（観察力・判断力・コミュニケーションスキル・行動力）
- 3.救急救命士として求められる科学的根拠にもとづいた論理的な思考力に有する者（科学的思考力）

■健康栄養学科

- 1.管理栄養士として必要な幅広い教養と、専門的かつ科学的知識、高度な実践能力を有し、人々の健康の保持・増進、生活の質の向上を通して健康長寿社会に貢献していく高い志を有する者（知識・技能）
- 2.強い使命感と判断力、豊かなコミュニケーション能力を有し、各ライフステージおよび人々の状況に対応した適切な栄養管理を、他職種と協調しながら遂行できる者（意欲・判断力・コミュニケーションスキル）
- 3.「健康」と「栄養」、「食」に関する問題を自ら発見し、問題解決に向け、科学的根拠に基づいて実証的に分析し、論理的に思考する能力を有する者（創造的・科学的思考力）

教育課程の編成及び実施に関する方針（公表方法：

https://www.aasa.ac.jp/guidance/public_info/curriculum_policy_fac.html）

（概要）

〈2024 年度以降入学者〉

健康医療科学部は 2 学科（言語聴覚学専攻、視覚科学専攻、理学療法学専攻および臨床検査学専攻を含む医療貢献学科、スポーツ・健康科学専攻および救急救命学専攻を含むスポーツ・健康医科学科）で構成され、カリキュラムは、「高齢者や障がいのある人をはじめ、すべての人の生活の質を向上することに貢献し得る人材、さらに良い人間関係を築くための対人技術および他者への理解と尊重を有する人材」を育成するために不可欠な基礎的知識とスキルを身につける目的で設定された「学部共通基礎科目」と、それぞれの学科・専攻のディプロマ・ポリシーにもとづいて編成された学科・専攻ごとの「学科共通基礎科目」、および専門的な科目によって構成する。

■医療貢献学科 言語聴覚学専攻

〈2025 年度入学者〉

本専攻では「3 つの人材養成像」を実現するために、以下の方針でカリキュラムを編成する。

「言語聴覚士の国家資格を目指し、障がい児・者支援のための専門家として必要な知識と技能を有する者（知識・技能）」となるために、言語聴覚学に関する知識と技能を学ぶための科目を1年次から4年次にかけて段階的に必修科目で配置する。1年次では、学部共通基礎科目と学科共通基礎科目において主に基礎医学、臨床医学、心理学、言語学に関する科目を配置し、言語聴覚学に関連する基礎内容について学ぶ。2年次には、言語聴覚に関する高度な内容を修得するため、コミュニケーション障害に関する専門中心科目を多く配置すると同時に、見学実習により言語聴覚士の役割と業務への理解を深める。さらに3年次には検査・評価・リハビリテーション手技の演習や実習前演習を実施する。これら学内で学んだ知識・技能をもとに、学外での評価・総合実習を行うことで、言語聴覚士に求められる知識と技能の水準を理解し、実践能力の獲得を目指す。4年次では学内外で学んだことについての理解をさらに深めるための演習科目を配置し、言語聴覚士に必要な知識と技能の総仕上げを行う。

「職能の範囲にとどまらず、豊かなコミュニケーション能力を有し、必要に応じて問題点を発見し、新しい検査・評価・訓練・指導・支援の技法の開発および評価を行い得る知識と技能を有する者（意欲・判断力・開発力・コミュニケーションスキル）」となるためには、実験や統計、心理に関する知識と幅広い対象者と接する機会が必要不可欠である。そのため、1年次から測定方法やデータ解析に関する科目、人を理解するための科目を必修とする。並行して高齢者施設・保育施設における体験実習をとおして幅広い対象者とのコミュニケーションについて学修する。2年次に配置されたコミュニケーション障害に関する科目から障がいの多様性を理解するとともに、3年次では、人を対象にした測定を行う演習科目を配置し、言語聴覚に関する高度な心理測定法やアセスメント法についてデータ収集の方法と分析の実際について理解を深める。

「科学的な根拠にもとづいて実証的に分析し、論理的に思考する能力を有する者（科学的思考力）」となるためには、実験・統計に関して修得した知識をもとにして、研究を実践するためのスキルを学ぶ必要があり、そのための演習科目を段階的に必修で配置する。1年次では、研究プレゼンテーション、グループディスカッションによって基本的なスキルを身につける。3年次前期からの2年間は、研究ゼミに所属することを全員に求める。学生は、科学研究に必要な方法論について学び、関心のある言語聴覚学の諸問題について問いを自ら見つけ、実証することが求められる。その成果は4年次に提出する卒業論文としてまとめられ、これを修学の集大成とする。

〈2024 年度以前入学者〉

本専攻では「3 つの人材養成像」を実現するために、以下の方針でカリキュラムを編成する。

「言語聴覚士の国家資格を目指し、障がい児・者支援のための専門家として必要な知識と技能を有する者（知識・技能）」となるために、言語聴覚学に関する知識と技能を学ぶための科目を1年次から4年次にかけて段階的に必修科目で配置する。1年次では、学部共通基礎科目と学科共通基礎科目において主に基礎医学、臨床医学、心理学、言語学に関する科目を配置し、言語聴覚学に関連する基礎内容について学ぶ。2年次には、言語聴覚に関する高度な内容を修得するため、コミュニケーション障害に関する専門中心科目を多く配置する。並行して、2年次後期から3年次前期にかけて障がい児・者の協力を得て、検査や訓練の実際について理解を深めるための学内実習科目を配置する。さらに3年次には実習前演習を実施し、学内で学んだ知識・技能をもとに、学外の臨床現場で実施する臨地実習を行うことで、高度な実践能力の獲得を目指す。4年次では学内外で学んだことについての理解をさらに深めるための演習科目を配置し、言語聴覚学の知識と技能の総仕上げを行う。

「職能の範囲にとどまらず、豊かなコミュニケーション能力を有し、必要に応じて問題点

を発見し、新しい検査・評価・訓練・指導・支援の技法の開発および評価を行い得る知識と技能を有する者（意欲・判断力・開発力・コミュニケーションスキル）」となるためには、実験や統計、心理に関する知識と幅広い対象者と接する機会が必要不可欠である。そのため、1 年次から測定方法やデータ解析に関する科目、人を理解するための科目を必修とする。これらの科目で学んだ知識をもとに、2 年次では職能の範囲にとどまらず、高齢者施設・保育施設における体験実習をととして幅広い対象者とのコミュニケーションについて学修する。3 年次では、人を対象にした測定を行う演習科目を配置し、言語聴覚に関する高度な心理測定法やアセスメント法についてデータ収集の方法と分析の実際について理解を深める。

「科学的な根拠にもとづいて実証的に分析し、論理的に思考する能力を有する者（科学的思考力）」となるためには、実験・統計に関して修得した知識をもとにして、研究を実践するためのスキルを学ぶ必要があり、そのための演習科目を段階的に必修で配置する。1 年次では、実験レポートや研究プレゼンテーション、グループディスカッションによって基本的なスキルを身につける。3 年次前期からの 2 年間は、研究ゼミに所属することを全員に求める。学生は、科学研究に必要な方法論について学び、関心のある言語聴覚学の諸問題について問いを自ら見つけ、実証することが求められる。その成果は 4 年次に提出する卒業論文としてまとめられ、これを修学の集大成とする。

■医療貢献学科 視覚科学専攻

本専攻では「3 つの人材養成像」を実現するために、以下の方針でカリキュラムを編成する。

「視能訓練士の国家資格を目指し、障がい児・者支援のための専門家として必要な知識と技能を有する者（知識・技能）」となるために、視覚科学に関する知識と技能を学ぶための科目を 1 年次から 4 年次にかけて段階的に必修科目で配置する。1 年次では、学部共通基礎科目と学科共通基礎科目において主に基礎医学に関する科目を配置し、人体の生理・解剖など基本的な内容について学ぶ。2 年次には、視覚に関する高度な内容を修得するため、専門中心科目において視能矯正と視覚心理に関する専門科目を配置する。3 年次からは検査や訓練の実際について理解を深めるための実習科目を配置する。学内で学んだ知識・技能をもとに、学外の臨床現場で実施する臨地実習を行うことで、高度な実践能力の獲得を目指す。4 年次では学内外で学んだことについての理解をさらに深めるための演習科目を配置し、視覚科学の知識と技能の総仕上げを行う。

「職能の範囲にとどまらず、必要に応じて問題点を発見し、新しい検査・評価・訓練・指導・支援の技法の開発および評価を行い得る知識と技能を有する者（意欲・判断力・開発力）」となるためには、実験や統計に関する知識が必要不可欠である。そのため、1 年次から測定方法やデータ解析に関する科目を必修とする。これらの科目で学んだ知識をもとに、2 年次では人を対象にした測定を行う演習科目を配置し、データ収集の方法と分析の実際について理解を深める。さらに視覚に関する高度な実験的方法について学ぶための演習科目を 3 年次に配置し、自由な履修を求める。

「科学的な根拠にもとづいて実証的に分析し、論理的に思考する能力を有する者（科学的思考力）」となるためには、実験・統計に関して修得した知識をもとにして、研究を実践するためのスキルを学ぶ必要があり、そのための演習科目を段階的に必修で配置する。1 年次では、実験レポートや研究プレゼンテーション、グループディスカッションによって基本的なスキルを、2 年次で科学研究に必要な方法論について学ぶ。3 年次から 2 年間は、研究ゼミに所属することを全員に求める。学生は、関心のある視覚科学の諸問題について問いを自ら見つけ、実証することが求められる。その成果は 4 年次に提出する卒業論文としてまとめられ、これを修学の集大成とする。

■医療貢献専攻 理学療法専攻

本専攻では「3 つの人材養成像」を実現するために、以下の方針でカリキュラムを編成する。

「理学療法士の国家資格取得を目指し、障がい児・者支援のための専門家として必要な知

識と技能を有する者（知識・技能）」となるために、理学療法学に関する知識と技能を学ぶための科目を1年次から4年次にかけて段階的に必修科目で配置する。1年次には、「学部共通基礎科目」と「学科共通基礎科目」の中で主に基礎医学、臨床医学に関する科目を配置し、人体に関連する基礎内容について学ぶ。2年次には、全世代に対応できる理学療法士を育成するために、理学療法に関する専門的な科目を配置する。さらに、本専攻が目指す養成人材の特性を明確化するために、小児理学療法に関する専門科目を多く配置する。3年次には2年次に学習した内容の理解を深めるために実習科目を配置し、高度な実践能力の獲得を目指す。4年次では学外臨床実習を行うことで、学内外で学んだことについての理解をさらに深め、理学療法学の知識と技能の総仕上げを行う。

「理学療法士として、多職種の視点も加味して問題点を発見し理学療法を行い得る知識と技能を有すると同時に、新しい検査や練習・支援技法の開発に意欲を有する者（意欲・判断力・開発力）」となるために、専門科目として検査・測定、練習、指導に関する科目を配置し、対象者と接する機会を設定する。1年次から測定方法やデータ解析を学ぶと同時に、人を理解するための科目を必修とする。これらの知識をもとに、2年次では小児、高齢者理学療法に関する知識を習得し幅広い対象者の検査・測定、練習・指導技法について学修する。3年次では、実習科目を配置し、理学療法の実践的な検査・評価、練習・指導技法の実践について理解を深め、実践力を高める。4年次には臨床実習を配置し、理学療法に求められる知識と技能の水準を理解することに加え、多職種連携の実践について学び理学療法士の役割を統合的に理解する。

「科学的な根拠にもとづいて実証的に分析し、論理的に思考する能力を有する者（科学的思考力）」となるために、専門科目として実験・統計に関する科目、研究手法に関する科目に加え、演習科目を段階的に配置する。1年次は、レポートやプレゼンテーション、グループディスカッションによって科学的な根拠を探索するための手法や議論に必要な情報を共有する技術を身につける。2年次には科学研究を遂行するための研究倫理と方法論について学び、課題解決に必要な論理的思考力を養成する。3年次および4年次は、各研究室に所属し、個々の目的意識に基づいて理論、研究、実践の各側面から議論を深め統合する力を身に着ける。学生は、理学療法学に関する諸問題を広い視点で調査し、設定した課題を論理的思考過程を経て実証（検証）する。その成果は4年次に発表し、審査教員の批評を踏まえて提出する卒業論文としてまとめ、これを修学の集大成とする。

■医療貢献学科 臨床検査学専攻

本専攻では「3つの人材養成像」を実現するために、以下の方針でカリキュラムを編成する。

「臨床検査技師の国家資格取得を目指し、高い倫理観を持った臨床検査の専門家として必要な知識と技能を有する者（知識・技能・臨床力）」となるために、臨床検査学に関する知識と技能を学ぶための科目を1年次から4年次にかけて段階的に必修科目で配置する。1年次には、「学部共通基礎科目」と「学科共通基礎科目」の中で主に臨床検査学の基礎科目を配置し、人体に関連する基礎内容について学ぶ。2年次には、全世代に対応できる臨床検査技師を育成するために、臨床検査に関する専門的な科目を配置する。3年次には2年次に学習した内容の理解を深めるために実習科目を配置し、学外臨床実習を行うことで、高度な実践能力の獲得を目指す。4年次では学内外で学んだことについての理解をさらに深め、臨床力を高めるために臨床検査学の知識と技能の総仕上げを行う。

「チーム医療実践のための基本的能力を有し、職能の範囲にとどまらず、問題点を発見し解決するための知識と技能を有する者（意欲・判断力・コミュニケーションスキル）」となるためには、臨床検査学のみならず医学・医療全般に関する知識、そして人間や社会に対する理解に基づいたコミュニケーションスキルが必要不可欠である。そのため、1年次から基礎医学や統計学に関する科目、人や社会を理解するための科目を必修とする。これらの科目で学んだ知識をもとに、2年次では臨床検査学に関する科目に加えて、本学独自の先制医療検査学や地域医療検査学によって幅広い医療職と協働する検査・測定・支援の技法について学修する。3年次では、実習科目および学外臨床実習を配置し、臨床検査の実践的な技法について理解を深める。

「臨床検査に関する問題を自ら発見し、問題解決に向け科学的な根拠にもとづいて論理的に思考し実証的に分析する能力を有し、科学技術の進歩を踏まえた新たな検査の開発および評価を行い得る知識と技能を有する者（科学的思考力・開発力）」となるためには、情報を理解・分析する能力や実験・統計に関して修得した知識をもとにして、研究を実践するためのスキルを学ぶ必要があり、そのための演習科目を段階的に必修で配置する。1 年次では、レポートやプレゼンテーション、グループディスカッションによって科学研究に必要な基本的なスキルを身につける。2 年次で科学研究に必要な基礎的な方法論について学ぶ。3 年次からの 2 年間は、研究ゼミに所属することを全員に求める。学生は、科学研究に必要な方法論について学び、関心のある臨床検査学の諸問題について問いを自ら見つけ、実証することが求められる。その成果は 4 年次に提出する卒業論文としてまとめられ、これを修学の集大成とする。

■ スポーツ・健康医科学科 スポーツ・健康科学専攻

本専攻では「3 つの人材養成像」を実現するために、以下の方針でカリキュラムを編成する。

「スポーツ・運動科学および健康科学に関する幅広い知識を有し、その知識を背景に、生涯にわたる健康の維持・増進に携わる専門家として認められる者（知識・技能）」になるために、学科共通基礎科目に 3 つの科目群「基礎科目」「応用科目」「研究科目」を構成し、これらの科目を 1 年次から 4 年次にかけて段階的に配置する。「基礎科目」は、基礎的な分野に属する科目群であり、1・2 年次を中心に配置する。「基礎科目」はスポーツ科学、体育学、医学、メンタルヘルス、栄養学の各分野の基礎科目であり、これらの分野の必修科目を履修することによって、学校教育および健康教育・ヘルスプロモーションに関する入門的な内容を幅広く修めることができる。「応用科目」は入門的な内容を修めた学生を対象としたより専門性の高い内容を学修する科目群であり、2・3 年次を中心に配置する。「応用科目」では、身体のメカニズムと健康のあり方、スポーツ・運動の知識とその技術や指導法を、またメンタルヘルスや栄養学を学ぶことによって、多角的に健康を維持・増進する方法を理解することを目標としている。さらに、「研究科目」である健康科学研究Ⅰ～Ⅳにおいてスポーツ・運動科学および健康科学の知識と技能の総仕上げを行う。

「修得した知識をもとに生涯健康に関する諸問題に対し、自ら考え、解決策を見出し、それをもとに行動できる者（意欲・判断力・創造力・行動力）」になるためには、研究法や統計学に関する知識が必要不可欠である。そのため、2 年次からは調査法や各分野における演習科目を配置し、各分野における測定の方法やデータの分析に関する理解を深める。さらに、3 年次には研究手法や実践的な統計法を学ぶ科目を必修科目として配置し、研究を実践するための能力を高めている。

「スポーツ、運動および健康に関する問題に対し、科学的な根拠にもとづいて実証的に分析し、論理的に思考する能力を有する者（科学的思考力）」になるためには、健康科学に関する知識をもとにした研究を実践する能力が必要である。そのための演習科目を段階的に配置し、1 年次はレポートやプレゼンテーション、グループディスカッションの基本的なスキルを学び、2 年次では研究の方法論を学ぶ。3 年次から 2 年間、学生は研究ゼミに所属し、関心のあるスポーツ・運動科学および健康科学の諸問題について問いを自ら見つけ、仮説を生成し、実証することが求められる。その成果は 4 年次に提出する卒業論文としてまとめられ、本専攻での学修を結実させていくとともに、卒業後の進路を見据えた専門知識・技能の定着を図る。

■ スポーツ・健康医科学科 救急救命学専攻

本専攻では「3 つの人材養成像」を実現するために、以下の方針でカリキュラムを編成する。

「救急救命士の国家資格を目指し、健康と救急救命を中心とした医学に関する基礎的な知識を有し、その知識を背景として人命を守り、社会に貢献できる者（知識・技能）」を育成するために、健康科学および救急救命学に関する知識と技能を学ぶ科目を 1 年次から 4 年次にかけて段階的に必修科目として配置する。1 年次では主に基礎医学に関する科目を

配置し、人体の解剖・生理など基本的な内容を学ぶ。2 年次には救急救命に関する高度な知識を修得するために内科・外科学に関する専門科目を配置する。3 年次にはより専門性の高い知識と技能を修得するために消防署や病院での臨地実習を配置し、救急車同乗実習・病院実習において組織的な活動と高度な実践力の獲得を目指す。4 年次には学内外で学んだことについての理解をさらに深めるための演習科目および実習科目を配置し、救急救命および救急現場において必要となる知識、技能の総仕上げを行う。

「救急救命士として必要とされる総合的な観察力、知識にもとづいた判断力、およびコミュニケーション能力を有し、それをもとにチームワークとリーダーシップのある行動ができる者（観察力・判断力・コミュニケーションスキル・行動力）」になるために、救急救命士として必要な実践力を修得するための学内実習を各学年に配置する。1 年次、2 年次は救急現場での基礎的な技術や特定行為（医師の具体的指示を得て行う救急救命処置）の理論と手技を修得する。3 年次、4 年次には個人のスキルを活かすとともに、チームで協働する実践力を体系的に修得する。

「救急救命士として求められる科学的根拠にもとづいた論理的な思考力を有する者（科学的思考力）」となるためには、救急救命に関する知識をもとにした研究を実践する能力が必要である。そのための演習科目を段階的に配置し、1 年次はレポートやプレゼンテーション、グループディスカッションの基本的なスキルを学び、2 年次では研究に必要な方法論を学ぶ。3 年次から 2 年間、研究ゼミに所属し、関心のある救急救命の問題を自ら発見し、問題解決に向け、科学的根拠にもとづいて実証的に分析し、論理的に思考する能力を身につける。その成果は 4 年次に提出する卒業論文としてまとめられ、本専攻での学修を結実させていくとともに、卒業後の進路を見据えた専門知識・技能の定着を図る。

〈2021 年度～2023 年度入学者〉

本学部は 3 学科（言語聴覚学専攻および視覚科学専攻を含む医療貢献学科、スポーツ・健康科学専攻および救急救命学専攻を含むスポーツ・健康医科学科、健康栄養学科）で構成され、カリキュラムは、「高齢者や障がいのある人をはじめ、すべての人の生活の質を向上することに貢献し得る人材、さらに良い人間関係を築くための対人技術および他者への理解と尊重を有する人材」を育成するために不可欠な基礎的知識とスキルを身につける目的で設定された「学部基礎科目」と、それぞれの学科・専攻のディプロマ・ポリシーにもとづいて編成された学科・専攻ごとの「専門教育科目」によって構成する。

■医療貢献学科 言語聴覚学専攻

本専攻では「3 つの人材養成像」を実現するために、以下の方針でカリキュラムを編成する。

「言語聴覚士の国家資格を目指し、障がい児・者支援のための専門家として必要な知識と技能を有する者（知識・技能）」となるために、言語聴覚学に関する知識と技能を学ぶための科目を 1 年次から 4 年次にかけて段階的に必修科目で配置する。1 年次では、学部基礎科目と専門基礎科目において主に基礎医学、臨床医学、心理学、言語学に関する科目を配置し、言語聴覚学に関連する基礎内容について学ぶ。2 年次には、言語聴覚に関する高度な内容を修得するため、コミュニケーション障害に関する専門中心科目を多く配置する。並行して、2 年次後期から 3 年次前期にかけて障がい児・者の協力を得て、検査や訓練の実際について理解を深めるための学内実習科目を配置する。さらに 3 年次には実習前演習を実施し、学内で学んだ知識・技能をもとに、学外の臨床現場で実施する臨地実習を行うことで、高度な実践能力の獲得を目指す。4 年次では学内外で学んだことについての理解をさらに深めるための演習科目を配置し、言語聴覚学の知識と技能の総仕上げを行う。

「職能の範囲にとどまらず、豊かなコミュニケーション能力を有し、必要に応じて問題点を発見し、新しい検査・評価・訓練・指導・支援の技法の開発および評価を行い得る知識と技能を有する者（意欲・判断力・開発力・コミュニケーションスキル）」となるためには、実験や統計、心理に関する知識と幅広い対象者と接する機会が必要不可欠である。そのため、1 年次から測定方法やデータ解析に関する科目、人を理解するための科目を必修とする。これらの科目で学んだ知識をもとに、2 年次では職能の範囲にとどまらず、高齢

者施設・保育施設における体験実習をととして幅広い対象者とのコミュニケーションについて学修する。3 年次では、人を対象にした測定を行う演習科目を配置し、言語聴覚に関する高度な心理測定法やアセスメント法についてデータ収集の方法と分析の実際について理解を深める。

「科学的な根拠にもとづいて実証的に分析し、論理的に思考する能力を有する者（科学的思考力）」となるためには、実験・統計に関して修得した知識をもとにして、研究を実践するためのスキルを学ぶ必要があり、そのための演習科目を段階的に必修で配置する。1 年次では、実験レポートや研究プレゼンテーション、グループディスカッションによって基本的なスキルを身につける。3 年次前期からの 2 年間は、研究ゼミに所属することを全員に求める。学生は、科学研究に必要な方法論について学び、関心のある言語聴覚学の諸問題について問いを自ら見つけ、実証することが求められる。その成果は 4 年次に提出する卒業論文としてまとめられ、これを修学の集大成とする。

■医療貢献学科 視覚科学専攻

本専攻では「3 つの人材養成像」を実現するために、以下の方針でカリキュラムを編成する。

「視能訓練士の国家資格を目指し、障がい児・者支援のための専門家として必要な知識と技能を有する者（知識・技能）」となるために、視覚科学に関する知識と技能を学ぶための科目を 1 年次から 4 年次にかけて段階的に必修科目で配置する。1 年次では、学部基礎科目と専門基礎科目において主に基礎医学に関する科目を配置し、人体の生理・解剖など基本的な内容について学ぶ。2 年次には、視覚に関する高度な内容を修得するため、専門中心科目において視能矯正と視覚心理に関する専門科目を配置する。3 年次からは検査や訓練の実際について理解を深めるための実習科目を配置する。学内で学んだ知識・技能をもとに、学外の臨床現場で実施する臨地実習を行うことで、高度な実践能力の獲得を目指す。4 年次では学内外で学んだことについての理解をさらに深めるための演習科目を配置し、視覚科学の知識と技能の総仕上げを行う。

「職能の範囲にとどまらず、必要に応じて問題点を発見し、新しい検査・評価・訓練・指導・支援の技法の開発および評価を行い得る知識と技能を有する者（意欲・判断力・開発力）」となるためには、実験や統計に関する知識が必要不可欠である。そのため、1 年次から測定方法やデータ解析に関する科目を必修とする。これらの科目で学んだ知識をもとに、2 年次では人を対象にした測定を行う演習科目を配置し、データ収集の方法と分析の実際について理解を深める。さらに視覚に関する高度な実験的方法について学ぶための演習科目を 3 年次に配置し、自由な履修を求める。

「科学的な根拠にもとづいて実証的に分析し、論理的に思考する能力を有する者（科学的思考力）」となるためには、実験・統計に関して修得した知識をもとにして、研究を実践するためのスキルを学ぶ必要があり、そのための演習科目を段階的に必修で配置する。1 年次では、実験レポートや研究プレゼンテーション、グループディスカッションによって基本的なスキルを、2 年次で科学研究に必要な方法論について学ぶ。3 年次から 2 年間は、研究ゼミに所属することを全員に求める。学生は、関心のある視覚科学の諸問題について問いを自ら見つけ、実証することが求められる。その成果は 4 年次に提出する卒業論文としてまとめられ、これを修学の集大成とする。

■スポーツ・健康医科学科 スポーツ・健康科学専攻

本専攻では「3 つの人材養成像」を実現するために、以下の方針でカリキュラムを編成する。

「スポーツ・運動科学および健康科学に関する幅広い知識を有し、その知識を背景に、生涯にわたる健康の維持・増進に携わる専門家として認められる者（知識・技能）」になるために、専門科目に 3 つの科目群「基礎科目」「応用科目」「研究科目」を構成し、これらの科目を 1 年次から 4 年次にかけて段階的に配置する。「基礎科目」は、基礎的な分野に属する科目群であり、1・2 年次を中心に配置する。「基礎科目」はスポーツ科学、体育学、医学、メンタルヘルス、栄養学の各分野の基礎科目であり、これらの分野の必修科目

を履修することによって、学校教育および健康教育・ヘルスプロモーションに関する入門的な内容を幅広く修めることができる。「応用科目」は入門的な内容を修めた学生を対象としたより専門性の高い内容を学修する科目群であり、2・3年次を中心に配置する。「応用科目」では、身体のメカニズムと健康のあり方、スポーツ・運動の知識とその技術や指導法を、またメンタルヘルスや栄養学を学ぶことによって、多角的に健康を維持・増進する方法を理解することを目標としている。さらに、「研究科目」である健康科学研究Ⅰ～Ⅳにおいてスポーツ・運動科学および健康科学の知識と技能の総仕上げを行う。

「修得した知識をもとに生涯健康に関する諸問題に対し、自ら考え、解決策を見出し、それをもとに行動できる者（意欲・判断力・創造力・行動力）」になるためには、研究法や統計学に関する知識が必要不可欠である。そのため、2年次からは調査法や各分野における演習科目を配置し、各分野における測定の方法やデータの分析に関する理解を深める。さらに、3年次には研究手法や実践的な統計法を学ぶ科目を必修科目として配置し、研究を実践するための能力を高めている。

「スポーツ、運動および健康に関する問題に対し、科学的な根拠にもとづいて実証的に分析し、論理的に思考する能力を有する者（科学的思考力）」になるためには、健康科学に関する知識をもとにした研究を実践する能力が必要である。そのための演習科目を段階的に配置し、1年次はレポートやプレゼンテーション、グループディスカッションの基本的なスキルを学び、2年次では研究の方法論を学ぶ。3年次から2年間、学生は研究ゼミに所属し、関心のあるスポーツ・運動科学および健康科学の諸問題について問いを自ら見つけ、仮説を生成し、実証することが求められる。その成果は4年次に提出する卒業論文としてまとめられ、本専攻での学修を結実させていくとともに、卒業後の進路を見据えた専門知識・技能の定着を図る。

■ スポーツ・健康医科学科 救急救命学専攻

本専攻では「3つの人材養成像」を実現するために、以下の方針でカリキュラムを編成する。

「救急救命士の国家資格を目指し、健康と救急救命を中心とした医学に関する基礎的な知識を有し、その知識を背景として人命を守り、社会に貢献できる者（知識・技能）」を育成するために、健康科学および救急救命学に関する知識と技能を学ぶ科目を1年次から4年次にかけて段階的に必修科目として配置する。1年次では主に基礎医学に関する科目を配置し、人体の解剖・生理など基本的な内容を学ぶ。2年次には救急救命に関する高度な知識を修得するために内科・外科学に関する専門科目を配置する。3年次にはより専門性の高い知識と技能を修得するために消防署や病院での臨地実習を配置し、救急車同乗実習・病院実習において組織的な活動と高度な実践力の獲得を目指す。4年次には学内外で学んだことについての理解をさらに深めるための演習科目および実習科目を配置し、救急救命および救急現場において必要となる知識、技能の総仕上げを行う。

「救急救命士として必要とされる総合的な観察力、知識にもとづいた判断力、およびコミュニケーション能力を有し、それをもとにチームワークとリーダーシップのある行動ができる者（観察力・判断力・コミュニケーションスキル・行動力）」になるために、救急救命士として必要な実践力を修得するための学内実習を各学年に配置する。1年次、2年次は救急現場での基礎的な技術や特定行為（医師の具体的指示を得て行う救急救命処置）の理論と手技を修得する。3年次、4年次には個人のスキルを活かすとともに、チームで協働する実践力を体系的に修得する。

「救急救命士として求められる科学的根拠にもとづいた論理的な思考力を有する者（科学的思考力）」となるためには、救急救命に関する知識をもとにした研究を実践する能力が必要である。そのための演習科目を段階的に配置し、1年次はレポートやプレゼンテーション、グループディスカッションの基本的なスキルを学び、2年次では研究に必要な方法論を学ぶ。3年次から2年間、研究ゼミに所属し、関心のある救急救命の問題を自ら発見し、問題解決に向け、科学的根拠にもとづいて実証的に分析し、論理的に思考する能力を身につける。その成果は4年次に提出する卒業論文としてまとめられ、本専攻での学修を結実させていくとともに、卒業後の進路を見据えた専門知識・技能の定着を図る。

■健康栄養学科

本学科では、「3つの人材養成像」を実現するために、以下の方針でカリキュラムを編成する。

本学科は、管理栄養士養成課程であるため、法令に適合した専門基礎分野および専門分野からなる科目編成を基本として、管理栄養士として必要な幅広い教養と、専門的かつ科学的知識、高度な実践能力を有し、人々の健康の保持・増進、生活の質の向上を通して健康長寿社会に貢献していく知識・技能を有する人材養成を達成するために、必要な科目を体系的に編成する。

教育内容としては、1年次を中心に、専門基礎科目のほか、学科基礎科目を導入し管理栄養士の社会的役割について理解を深めながら、学びに対する動機付けと将来に向けた目標設定を促すための科目を配置する。2年次・3年次は、主として管理栄養士として必要な高度な専門知識を身につけるための科目を中心に配置する。このうち3年次の臨地実習とその事前・事後学修のための科目、在宅を含む対象者への適切な栄養管理が実践できるための知識と技術を修得するための科目などを配置して、強い使命感と判断力、豊かなコミュニケーション能力を有し、各ライフステージおよび人々の状況に対応した適切な栄養管理を、他職種と協調しながら遂行できる人材養成を図る。3年次・4年次では、これまでの学びの集大成として、積み上げてきた各分野における知識と技能を融合させながら、少数で構成されるゼミナールによる卒業研究指導科目、および各専任教員の専門領域に関する演習科目などの学科発展科目を配置して「健康」と「栄養」、「食」に関する問題を自ら発見し、問題解決に向け、科学的根拠にもとづいて実証的に分析し、論理的に思考する能力を有する人材養成を図る。

これらの教育内容を効果的に学修できるように、専門基礎科目、専門中心科目および学科発展科目の学修方法は、講義に加え、実験・実習・演習も組み入れながら、基礎的な知識と実践的な技能の修得を図る。

学修の成果は、学期ごとの定期的な成績評価と、3年次の臨地実習評価、4年次の総合演習および卒業研究に対する評価によって確認し、最終的にディプロマ・ポリシーの到達状況を判断する。

入学者の受入れに関する方針（公表方法：

https://www.aasa.ac.jp/life/support/summary/pdf/summary_2025.pdf）

（概要）

■健康医療科学部

本学部は、言語聴覚学・言語聴覚障害学、視覚科学・視能学、理学療法学・リハビリテーション療法学、臨床検査学・臨床病態学、救急医療・救急救命学の専門家としての医療人の養成、心身の健康に関する広範な知識をもった教員を含めた生涯健康社会のリーダーの育成、医療や健康科学の現場で活躍する人材の養成を目指している。

上記の目標を達成するために、入学者には次の4点を期待する。

- 1.医療を含め、健康維持や健康回復に関する高い関心を有し、将来、こうした分野の専門家として社会貢献する強い意思を有していること。
- 2.病気や障がいのある人、高齢者などに対して、「違いを共に生きる」の理念に基づき、尊敬と人権尊重の精神を有し、日常的な生活においても、こうした精神を実践できるような人間性を有していること。
- 3.新しい知識や技能の習得に積極的で勉強熱心であり、科学的思考力、論理的思考力、実践的行動力を習得しているか、それらを新たに習得することに積極的であること。
- 4.人間関係において、適切な自尊感情を有するとともに、他者を尊重し、良好な関係を築くことのできるコミュニケーション能力を習得していること。あるいは、それらを新たに向上させることに積極的であること。

■医療貢献学科 言語聴覚学専攻

- 1.学生に期待すること

言語聴覚士の国家資格をめざす強い意思を持ち、専門領域を学ぶ意欲と情熱を持つこと

を期待する。

2. 学生募集に際して重視すること

自己表現力、読解力、作文能力、論理的思考力を身に付けていることと、豊かなコミュニケーション能力を身に付けていることが重要と考える。

3. 入学前学習として推奨すること

以下のことを通して言語聴覚士の職務内容などについて情報を得、自らの関心について自覚することが望まれる。

- ・オープンキャンパス参加、言語聴覚士の職場見学、ボランティア活動
- ・書籍やマスメディアを用いた言語聴覚学に関する情報収集

■医療貢献学科 視覚科学専攻

1. 学生に期待すること

視覚の研究を通して科学的思考と問題解決の方法論を習得するとともに、医療にふれる中で健康への安心と人への温かくかつ真面目な姿勢を養い、社会の現場において自己実現をするとともに信頼される人材となることを期待する。

2. 学生募集に際して重視すること

本専攻では医療職である視能訓練士の資格取得も目的の一つである。医療職に求められる健康科学への関心と、コミュニケーション能力を重視する。

3. 入学前学習として推奨すること

日本語能力を含む基礎学力の充実と、広い分野の読書を推奨する。また、ボランティア活動の経験も推奨する。

■医療貢献学科 理学療法学専攻

1. 学生に期待すること

理学療法士の国家資格取得に向けて、専門領域の知識・技能を学ぶ意欲を持ち、医療や福祉に関する幅広い知見と高い倫理観を有する人材となることを期待する。

2. 学生募集に際して重視すること

医療職に求められる高い倫理観と健康科学への関心と、読解力、作文能力、論理的思考力、コミュニケーション能力を重視する。

3. 入学前学習として推奨すること

日本語能力を含む基礎学力の充実と、種々のメディアを活用したグローバルな情報収集能力とボランティア活動を通じた行動力の養成を推奨する。

■医療貢献学科 臨床検査学専攻

1. 学生に期待すること

臨床検査技師の国家資格取得に向けて、専門領域の知識・技能を学ぶ意欲を持ち、保健・医療・福祉に関する幅広い知見をもとに他者と協働し、医療や医学研究・教育を通して社会へ貢献する人材となろうとする意欲を持つことを期待する。

2. 学生募集に際して重視すること

保健・医療・福祉を中心とした人間や社会への関心と、読解力、作文能力、論理的思考力、コミュニケーション能力、積極性、自主性を重視する。

3. 入学前学習として推奨すること

日本語能力を含む基礎学力の充実と、広い分野の読書やボランティア活動などを通して人間や社会に対する理解を深める活動を推奨する。

■スポーツ・健康医科学科 スポーツ・健康科学専攻

1. 学生に期待すること

本専攻は、体と心の健康に関する広範な知識を持った生涯健康社会のリーダーの育成を目指している。健康や運動に関する知識だけでなく、社会の動きにも興味を持ち積極的に学ぶ姿勢を持つことを期待する。

2. 学生募集に際して重視すること

心身の健康に関して学ぶ姿勢、社会情勢についての広い関心を持っていること、さらに、自らの健康だけではなく社会に資するために、他者への配慮を心がけることや円滑なコ

コミュニケーションをはかることも重要だと考える。 3. 入学前学習として推奨すること 教科書的な知識だけでなく、書籍やマスメディアからも広く健康・スポーツ・社会に関して学んでおくことが望まれる。 ■スポーツ・健康医科学科 救急救命学専攻 1. 学生に期待すること 本専攻は、救急救命の専門知識および実践力を身につけ、医療と地域社会の課題解決に貢献できる質の高い救急救命士を育成することを目指している。救急医療に関する知識だけでなく、国内外の社会情勢等にも積極的に興味を持ち、見聞を広め学ぶ姿勢を持つことを期待する。 2. 学生募集に際して重視すること 生命を守り、社会に貢献したいという強い信念を持っていること。さらに、救急救命士の資格を取得し、消防、自衛隊、海上保安庁、警察等の地方・国家公務員、医療機関等で活躍したいという強い意欲があることも重要であると考え。 3. 入学前学習として推奨すること 救急救命士として求められる知識や技術を身につけるために、基礎的な学力を有するための事前学習が望まれる。また、メディアや書籍を通して社会や健康に関して広く学んでおくことが推奨される。

食健康科学部
教育研究上の目的（公表方法： https://www.aasa.ac.jp/guidance/about/policy.html） （概要） 食健康科学部は、人の健康の保持、増進における食や栄養の関わりについての知識を修得し、「食」と「栄養」の専門家として、実社会の食品、健康に関する諸問題に論理的かつ科学的根拠に基づき対処ができ、すべての人々の生活の質を向上させることに貢献できる人材を養成することを教育の目的とする。 ■健康栄養学科 健康栄養学科においては、管理栄養士の国家資格を目指し、幅広い教養と、専門的かつ科学的な知識、高度な実践能力を有し、人々の健康の保持増進、生活の質の向上を通して健康長寿社会に貢献していく中心的な役割を担い得る人材の育成のために必要な教育研究を行う。 ■食創造科学科 食創造科学科においては、食と栄養に関する専門知識を深め、食と健康分野において必要な総合力を培い、豊かな食生活と健康社会に貢献するために必要な知識と技能を有する人材の育成のために必要な教育研究を行う。
卒業又は修了の認定に関する方針（公表方法： https://www.aasa.ac.jp/guidance/public_info/diploma_policy_fac.html） （概要） 食健康科学部は、人の健康の保持、増進における食や栄養の関わりについての知識を習得し、「食」と「栄養」の専門家として、実社会の食品、健康に関する諸問題に論理的かつ科学的根拠に基づき対処ができ、すべての人々の生活の質を向上させることに貢献できる人材の育成を目標としている。この教育目標を達成するために、以下の能力を習得した学生に学位を授与する。 ■健康栄養学科 1. 管理栄養士として必要な幅広い教養と、専門的かつ科学的知識、高度な実践能力を有し、

人々の健康の保持・増進、生活の質の向上を通して健康長寿社会に貢献していく高い志を有する者（知識・技能）。 2. 強い使命感と判断力、豊かなコミュニケーション能力を有し、各ライフステージおよび人々の状況に対応した適切な栄養管理を、他職種と協調しながら遂行できる者（意欲・判断力・コミュニケーションスキル）。 3. 「健康」と「栄養」、「食」に関する問題を自ら発見し、問題解決に向け、科学的根拠に基づいて実証的に分析し、論理的に思考する能力を有する者（創造的・科学的思考力）。 ■食創造科学科 1. 食創造科学領域における専門知識を深め、食と健康分野において必要な総合力を培い、豊かな食生活と健康社会に貢献するために必要な知識と技能を有する者（知識・技能）。 2. 修得した知識をもとに食に関する諸問題に対し、自ら考え、解決策を見だし、創造性や先見性を有した食創造力を持って食産業に貢献できる「食」の専門家として行動できる者（判断・関心・行動）。 3. 食に関する問題に対し、科学的根拠に基づいて実証的に分析し、他者と協調・協働して新たな食品の創造・創生の提案ができる能力を有する者（創造的・科学的思考力）。
教育課程の編成及び実施に関する方針（公表方法： https://www.aasa.ac.jp/guidance/public_info/curriculum_policy_fac.html）
（概要） 食健康科学部は2学科（健康栄養学科、食創造科学科）で構成され、カリキュラムは「食健康科学分野で「食」と「栄養」の専門家として社会貢献する人材、さらにすべての人の生活の質を向上させることに貢献し得る人材」を育成するために不可欠な基礎的知識とスキルを身につける目的で設定された「学部基礎科目」と、それぞれの学科のディプロマ・ポリシーにもとづいて編成された学科ごとの「専門教育科目」によって構成する。 ■健康栄養学科 本学科は、管理栄養士養成課程であるため、法令に適合した専門基礎分野および専門分野からなる科目編成を基本としている。教育内容は、管理栄養士として必要な幅広い教養と、専門的かつ科学的知識、高度な実践能力を有し、人々の健康の保持・増進、生活の質の向上を通して健康長寿社会に貢献していく知識・技能を有する人材養成を達成するために、必要な科目を体系的に編成する。 教育内容としては、1年次を中心に、「専門基礎科目」と「学科基礎科目」を導入し、管理栄養士の社会的役割について理解を深めながら、学びに対する動機付けと将来に向けた目標設定を促すための科目（「管理栄養士概論」、「早期体験学習」）を配置する。2年次・3年次は、主として管理栄養士として必要な高度な専門知識を身につけるための「専門中心科目」を配置する。このうち3年次の臨地実習とその事前・事後学修のための科目、在宅を含む対象者への適切な栄養管理が実践できるための知識と技術を修得するための科目（「対人技術演習」、「栄養総合演習Ⅰ」）などを配置して、強い使命感と判断力、豊かなコミュニケーション能力を有し、各ライフステージおよび人々の状況に対応した適切な栄養管理を、他職種と協調しながら遂行できる人材養成を図る。3年次・4年次では、これまでの学びの集大成として、積み上げてきた各分野における知識と技能を融合させながら、少数で構成されるゼミナールによる卒業研究指導科目、および各専任教員の専門領域に関する演習科目などの「専門中心科目」や「学科発展科目」を配置して「健康」と「栄養」、「食」に関する問題を自ら発見し、問題解決に向け、科学的根拠にもとづいて実証的に分析し、論理的に思考する能力を有する人材養成を図る。 これらの教育内容を効果的に学修できるように、「専門基礎科目」、「専門中心科目」および「学科発展科目」などの学修方法は、講義に加え、実験・実習・演習も組み入れながら、基礎的な知識と実践的な技能の修得を図る。 学修の成果は、学期ごとの定期的な成績評価と、3年次の臨地実習評価、4年次の総合演習および卒業研究に対する評価によって確認し、最終的にディプロマ・ポリシーの到達状

況を判断する。

■食創造科学科

食創造科学科では、豊かな食生活と健康社会に貢献し、創造性や先見性を有した食創造力により食健康科学分野で貢献できる人材を育成するため、幅広い教養と科学的かつ多角的な視点を有し、積極的に地域社会へ関わる姿勢を身につけるため、食創造科学の6領域である食品学領域、調理学領域、健康学領域、栄養学領域、食文化領域、食創生領域のそれぞれの「専門基礎科目」を経て、「専門中心科目」へと体系的に学修する。

教育内容としては、1年次は学びに対する動機付けと将来に向けた目標設定を促すための科目を配置する。食創造力を培うための食創造科学6領域である「専門基礎科目」を配置し、各領域の主となる科目を必修とし、各領域の実験・実習科目を選択必修とする。実験・実習科目はそれぞれに対応する講義科目の単位取得後に履修することを条件とする。また、食創造科学6領域の「専門中心科目」により実践的な食創造力を養成する専門科目を配置する。2年次は食健康科学分野での食創造科学の役割を各領域の専門分野の概論から学修する「学科基礎科目」を配置する。そして、食科学コース、食・健康創造コースの履修モデルや各種資格取得のための学修モデルを理解し、選択科目である各領域の「専門中心科目」を修得する。また、1年次後期と2年次前期では、少数で構成されるゼミナールにより食創造科学各分野の学修段階で修得した知識と技能を実践するため、文献講読や専門基礎オリジナル研究を遂行し、食創造力とコミュニケーション力を高める「食創造科学基礎演習」、「専門基礎演習Ⅰ」を配置する。さらに2年次後期に「専門基礎演習Ⅱ」で食創造科学の各分野のゼミナールを選択し、3年次から卒業研究を遂行するための基礎研究能力を培う「食創造科学研究Ⅰ～Ⅳ」を配置する。また、3年次は食産業や健康産業で活躍できるキャリアスキルを身に付けさせる必修科目を配置する。3年次・4年次はこれまでの学びの集大成として、積み上げてきた各分野における知識と技能を融合させながら、少数で構成されるゼミナールによる卒業研究指導科目、および各専任教員の専門領域に関する演習科目などを配置して食健康科学分野に関する問題を自ら発見し、問題解決に向け、科学的根拠にもとづいて実証的に分析し、論理的に思考する能力を有する人材養成を図る。

これらの教育内容を効果的に学修できるように、「専門基礎科目」、「専門中心科目」および「学科発展科目」の学修方法は、講義に加え、実験・実習・演習も組み入れながら、基礎的な知識と実践的な技能の修得を図る。学修の成果は、学期ごとの定期的な成績評価と、4年次の卒業研究に対する評価によって確認し、最終的にディプロマ・ポリシーの到達状況を判断する。

入学者の受入れに関する方針（公表方法：

https://www.aasa.ac.jp/life/support/summary/pdf/summary_2025.pdf）

（概要）

本学部は、食健康科学の知識を有し、「食」と「栄養」の専門家として食品分野や健康分野の現場で活躍する人材の養成を目指している。この目標を達成するために、入学者には次の3点を期待する。

1. 学生に期待すること

健康維持や疾病予防における食と栄養の係わりに関して高い関心を有し、将来、「食」と「栄養」の専門家として社会に貢献する強い意志を有していること。

2. 学生募集に際して重視すること

「食」と「栄養」に関する新しい知識や技能の修得に積極的で向学心が高く、科学的思考力、論理的思考力を修得することに積極的であること。

3. 入学前学習として推奨すること

人間関係において、他者を尊重し、良好な関係を築くことのできるコミュニケーション能力を有していること、あるいは、それらを修得し、向上させることに積極的であること。

■健康栄養学科

1. 学生に期待すること

「栄養」、「食」の科学に関する学修・研究を通して科学的思考と問題解決の方法論を修得すると共に、管理栄養士の現場にふれる中で保健・医療・福祉への関心と豊かな人間性を養い、社会の現場において自己実現できる人材となることを期待する。

2. 学生募集に際して重視すること

保健・医療・福祉に関して高い関心と真摯に学ぶ姿勢、社会情勢や当該分野に関連する様々な事象に対して向学心を持っていること、さらに、自らの健康だけでなく、社会に資するために他者への配慮を心掛けることや円滑なコミュニケーション能力を持っていることも重要である。

3. 入学前学習として推奨すること

高等学校で学ぶ生物、化学の基礎的な知識を身に付けておくことに加え、「健康」、「栄養」、「食」に関する分野の図書や雑誌、新聞記事などを読んでおくこと。

■食創造科学科

1. 学生に期待すること

食健康科学に関する学修・研究を通して科学的思考と問題解決の方法論を修得すると共に、創造性や先見性を有した食創造力を持って食産業、健康産業に貢献する人材となることを期待する。

2. 学生募集に際して重視すること

「食」と「栄養」に関する専門知識と創造性に関して高い関心と真摯に学ぶ姿勢を有し、「食」や「健康」に関連する様々な事象に対して向学心を持っていること、さらに、社会に資するために他者への配慮を心掛けることや円滑なコミュニケーション能力を持っていることも重要である。

3. 入学前学習として推奨すること

高校卒業レベルの基礎的な知識だけでなく、図書や、雑誌、新聞記事などのマスメディアから、「食」、「栄養」、「健康」に関する分野の知識を意欲的に吸収し、自ら考える習慣を身に付けていることが望まれる。

福祉貢献学部

教育研究上の目的（公表方法：

<https://www.aasa.ac.jp/guidance/about/policy.html>）

（概要）

■福祉貢献学科 社会福祉専攻

福祉貢献学科 社会福祉専攻においては、社会福祉士、精神保健福祉士等の国家資格を目指し専門職としての実践を通して社会に貢献する人材、及び教育や福祉に関する専門的知識・実践力・マインドを習得し、福祉社会の成熟に貢献できる人材の育成のために必要な教育研究を行う。

■福祉貢献学科 子ども福祉専攻

福祉貢献学科 子ども福祉専攻においては、保育士や幼稚園教諭の資格取得を目指し、幼児教育の専門家として中心的な役割を担い得る人材、及び幼児教育の範囲にとどまらず社会福祉の知識をも利用して、社会が必要とすることに積極的にかかわれる人材の育成を目指し必要な教育研究を行う。

卒業又は修了の認定に関する方針（公表方法：

https://www.aasa.ac.jp/guidance/public_info/diploma_policy_fac.html）

（概要）

愛知淑徳大学福祉貢献学部では、福祉に関する社会のしくみと対象の理解に必要な基礎知識を修得したうえで、対象者の求めと必要を理解し、総合的に判断・実践できる人材の育

成を目標にしている。この教育目標を達成するために、以下にあげるような能力を習得した学生に学位を授与する。

1.知識・理解

人を多面的に理解し、人と社会環境の視点から問題・課題を理解することができる。

2.関心・意欲・態度

乳幼児期から高齢期までの人々の尊厳を重視してかかわることができる。

3.思考・判断

対象者の求めと必要を理解し、総合的に判断することができる。

4.技能・表現

体験と実習をととして学びを深め、専門職としての基礎的实践力を身につけている。

教育課程の編成及び実施に関する方針（公表方法：

https://www.aasa.ac.jp/guidance/public_info/curriculum_policy_fac.html）

（概要）

福祉貢献学部では、乳幼児期から高齢期までの各ライフステージにおいて、すべての人が一人の人間として尊重され、その人らしく豊かな人生を送ることができる社会を希求する福祉マインドを養うことを目的としている。そして、超少子高齢社会で活躍する福祉マインドをもった高度な専門性を備えた福祉専門職、ならびに広く社会の様々な分野で活躍し、共生社会の実現に貢献する人材を育成するという二つの目的を達成するため以下のような方針でカリキュラムを編成する。

福祉貢献学部独自のカリキュラムでは、1・2年次学部基礎科目において「福祉マインドを培う」「福祉に関する社会のしくみと対象の理解」に必要な基礎知識を修得するとともに、1年次から4年次まで「対象者の求めと必要」を理解し、「総合的に判断・実践できる力」を身につけるため各専攻が設定した科目群において、それぞれの段階で、福祉・教育に関する知識と研究方法を学修することができる。

以下、福祉貢献学部各専攻の独自のカリキュラムの設置の教育的狙いについて概要を示す。

■社会福祉専攻

社会福祉専攻では、社会福祉、精神保健福祉、福祉関連の3つの科目群を置き、社会福祉士、精神保健福祉士等の国家資格を目指し、専門職としての実践を通して社会に貢献する人材、および教育や福祉に関する専門的知識・実践力・マインドを習得し、福祉社会の成熟に貢献できる人材の育成のためのカリキュラムを編成する。資格取得に向けて、社会福祉学および関連する学問の知識を学修するとともに援助技術・実践力を体系的に積み上げることができるようにするだけでなく、人々の生活に向き合い、地域社会に貢献する人間力を身につけることも視野に置いている。

1年次 社会福祉の本質・目的、社会のしくみを理解し、対象者に関する基礎理論を学ぶ科目を配置する。

2・3年次 社会福祉援助の基礎的技術を習得し、対象者の求めと必要に応じた総合的判断をすることができる科目と実習を配置する。

4年次 ゼミをととして、専門的な学びを深め、卒業研究/卒業論文に取り組む。

■子ども福祉専攻

子ども福祉専攻では、子ども家庭福祉、保育・幼児教育、子ども福祉関連の3つの科目群を置き、保育士資格や幼稚園教諭免許状の取得を目指し、幼児教育の専門家として中心的な役割を担い得る人材、および幼児教育の範囲にとどまらず社会福祉の知識をも利用して、社会が必要とすることに積極的にかかわれる人材の育成を目指す。さらに卒業研究および資格・免許の取得に向けて取り組む中で、子ども福祉および関連領域の学問の知識を学修するとともに保育・幼児教育の技術・実践力を体系的に積み上げることができるようにする。

1年次 保育・幼児教育の本質・目的を理解し、子どもの発達に関する基礎理論を学ぶ科目

を配置する。 2・3年次 保育の基礎的技術、内容、方法を身につけ、子どもが主体の環境を構成するための科目と実習を配置する。 4年次 ゼミをとおして、専門的な学びを深め、卒業研究/卒業論文に取り組む。
入学者の受入れに関する方針（公表方法： https://www.aasa.ac.jp/life/support/summary/pdf/summary_2025.pdf ） （概要） 福祉貢献学部は、福祉マインドを培い、福祉的な思考と実践力を身につけ、社会福祉、及び子ども福祉分野で活躍したいと希望する学生を求める。 ■福祉貢献学科 社会福祉専攻 1.学生に期待すること 社会福祉の仕事に関心を持ち、人間や社会について広い視野に立って学ぶとともに、福祉現場での実習や地域活動に主体的に取り組み、実践力を育てることを期待する。 2.学生募集に際して重視すること 様々な人々と関わり援助することに前向きに取り組む姿勢や肯定的な人間関係を育む能力を有すること。また、大学での学びの基盤となる高校等での学習習慣と基礎学力が養われていることを重視する。 3.入学前学習として奨励すること 社会福祉の専門職は、人の生活に直面しなければならない。メディア等を通じて生活問題や社会福祉の動向に関心を持ち、考える習慣を身につける。また、様々な活動に参加し、主体的な行動力と安定した社会性を培う。 ■福祉貢献学科 子ども福祉専攻 1.学生に期待すること 保育士や幼稚園教諭の仕事に関心を持ち、必要な専門的知識や技術の習得に取り組むこと。人間形成に関わる仕事の重要性を自覚し、個性豊かな保育者をめざして努力することを期待する。 2.学生募集に際して重視すること 子どもの成長を援助することに前向きに取り組む姿勢や、肯定的な人間関係を育む能力を有すること。また、大学での学びの基盤となる高校等での学習習慣と基礎学力が養われていることを重視する。 3.入学前学習として奨励すること 保育士や幼稚園教諭など子どもの育ちや子育てを支援する専門職には、寛容な人間性と多様な能力が要求される。様々な活動に参加し、主体的な行動力と安定した社会性を培うこと。また、子どもや家庭を取り巻く社会の動向にも目を向ける。
交流文化学部 教育研究上の目的（公表方法： https://www.aasa.ac.jp/guidance/about/policy.html） （概要） ■交流文化学科 交流文化学科は、さまざまな文化的背景を持つ人々との交流を通して、広い視野から社会を眺め、多様な考え方、生き方、文化を受け入れることができる積極的な姿勢、そして新しい社会・文化を生成する力を育成するための教育研究を行う。学部の理念に基づき構成される、「ランゲージ」「国際交流・観光」の2専攻の理念及び教育目的は、次のとおりである。

■ランゲージ専攻

ランゲージ専攻は、言語・文化を深く理解するとともに、実践的な言語活用能力を兼ね備えた人材の育成を目的とし、英語、中国語、韓国・朝鮮語の語学スキル、日本語を母語としない人への日本語教授法を身につけるための教育研究を行う。

■国際交流・観光専攻

国際交流・観光専攻は、広い視野と柔軟な思考力とともに、地域社会・地域観光、国際社会・国際観光の発展に貢献できる実践力を兼ね備えた人材の育成を目的とし、国際交流や異文化への理解とスキル、観光に関する幅広い知識やホスピタリティの理解及びそのスキルを身につけるための教育研究を行う。

卒業又は修了の認定に関する方針（公表方法：

https://www.aasa.ac.jp/guidance/public_info/diploma_policy_fac.html）

（概要）

交流文化学部は、様々な文化背景を持つ人々との交流を通して、相互理解と尊重に基づきグローバル社会の発展に積極的に貢献する人材の育成を目標にしている。この教育目標を達成するために、以下の能力を修得した学生に学位を授与する。

1. 多文化・異文化に関する基本的な知識を習得し、広い視野から社会をとらえ、理解することができる。（知識・理解）
2. 多様な考え方・生き方を受け入れることができる。（態度）
3. 獲得した知識・技能・態度などを活用して問題の解決を図ることや新しい社会・文化を生成することに貢献できる。（思考・判断）
4. 日本語と特定の外国語を用いて、読み・書き・聞き・話すことができる。多様な文化的背景を持つ人々と効果的なコミュニケーションができる。（技能・表現）
5. 継続的に、自律して学習・探求することができる。（関心・意欲）

教育課程の編成及び実施に関する方針（公表方法：

https://www.aasa.ac.jp/guidance/public_info/curriculum_policy_fac.html）

（概要）

〈2024 年度以降入学者〉

本学部では、学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）に基づき、さまざまな文化背景を持つ人々との交流を通して、相互理解と尊重に基づきグローバル社会の発展に積極的に貢献する人材を育成するために、以下のようにカリキュラムを編成し、実施する。

1. 一人一人の学生の興味・関心・適性に応じて、多角的に学ぶことを可能にさせるとともに、専門性を備えた知識と実践的な能力を習得させるために、「ランゲージ」および「国際交流・観光」の2つの専攻を置く。ランゲージ専攻には4つの専攻プログラム*1、国際交流・観光専攻には4つの専攻プログラム*2を設ける。

学生は、1年次に広範囲にわたるカリキュラムの中からさまざまな学問領域の履修を進め、2年次に自らの専攻において専門分野としての専攻プログラムを決定する。

2. 専門分野の知識・能力を着実に習得させるために、専門科目に中心科目、基盤科目、体験科目、プロジェクト科目の4つの科目群を設けるとともに、すべての学生に、基盤科目における1つ以上の外国語を履修すること、また体験科目の所定の単位数を修得することを義務付ける。

中 心 科 目：専門分野の知識を習得させるために、基礎的な科目から発展的な科目へと段階的に講義科目を配置する。

基 盤 科 目：国際社会で活用できる言語コミュニケーション能力を身に付けさせるために、英語・中国語・韓国語などの言語科目を体系的・段階的に配置する。

体 験 科 目：実践的な能力を習得させるために、特定の事象や事例についてディスカッションや模擬実践活動などを通して学ぶケーススタディ科目、国

	内外の現場での学修を主眼に置いた語学研修やフィールドスタディ科目を設ける。 プロジェクト科目：本学部が目指す国際社会に貢献できる人材の育成を目指し、様々なタイプのプロジェクトの実施に必要な企画力や分析力を養成するために必修科目としてのプロジェクト科目を設置する。学生は1年次には基礎演習を履修し、文献検索・プレゼンテーション・論文作成など基礎的なアカデミックスキルを演習形式で習得し、2、3年次には交流文化演習を履修し、調査の実施や企画の立案と実行により専門領域に関する知見を深め、4年次には卒業プロジェクトを通して、修学の集大成である卒業研究論文の完成を目指す。 ＊1 イングリッシュ・エキスパート、チャイニーズ・エキスパート、コリアン・エキスパート、日本語教育 ＊2 エリアスタディーズ、グローバルスタディーズ、観光ホスピタリティ、観光デザイン
	〈2023年度以前入学者〉 本学部では、学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）に基づき、様々な文化背景を持つ人々との交流を通して、相互理解と尊重に基づきグローバル社会の発展に積極的に貢献する人材を育成するために、以下のようにカリキュラムを編成し、実施する。 1.一人一人の学生の興味・関心・適性に応じて、多角的に学ぶことを可能にさせるとともに、専門性を備えた知識と実践的な能力を習得させるために、「ランゲージ」および「国際交流・観光」の2つの専攻を置く。ランゲージ専攻には4つの専攻プログラム＊1、国際交流・観光専攻には2つのコース＊2と5つの専攻プログラム＊3を設ける。学生は、1年次に広範囲にわたるカリキュラムの中からさまざまな学問領域の履修を進め、2年次に自らの専攻において専門分野としての専攻プログラムを決定する。 2.専門分野の知識・能力を着実に習得させるために、専門科目に中心科目、基盤科目、体験科目、プロジェクト科目の4つの科目群を設けるとともに、すべての学生に、基盤科目における1つ以上の外国語を履修すること、また体験科目の所定の単位数を修得することを義務付ける。 中 心 科 目：専門分野の知識を習得させるために、基礎的な科目から発展的な科目へと段階的に講義科目を配置する。 基 盤 科 目：国際社会で活用できる言語コミュニケーション能力を身に付けさせるために、英語・中国語・韓国語などの言語科目を体系的・段階的に配置する。 体 験 科 目：実践的な能力を習得させるために、特定の事象や事例についてディスカッションや模擬実践活動などを通して学ぶケーススタディ科目、国内外の現場での学修を主眼に置いた語学研修やフィールドスタディ科目を設ける。 プロジェクト科目：本学部が目指す国際社会に貢献できる人材の育成を目指し、様々なタイプのプロジェクトの実施に必要な企画力や分析力を養成するために必修科目としてのプロジェクト科目を設置する。学生は1年次には基礎演習を履修し、文献検索・プレゼンテーション・論文作成など基礎的なアカデミックスキルを演習形式で習得し、2、3年次には交流文化演習を履修し、調査の実施や企画の立案と実行により専門領域に関する知見を深め、4年次には卒業プロジェクトを通して、修学の集大成である卒業研究論文の完成を目指す。 ＊1 イングリッシュ・エキスパート、チャイニーズ・エキスパート、コリアン・エキスパート、日本語教育 ＊2 国際交流コース、観光コース ＊3 異文化コミュニケーション、国際貢献、観光マネジメント、観光ホスピタリティ、観光まちづくり

入学者の受入れに関する方針（公表方法： https://www.aasa.ac.jp/life/support/summary/pdf/summary_2025.pdf）
（概要） ■交流文化学科 ランゲージ専攻 1.学生に期待すること ランゲージ専攻では、しっかりとした日本語力を基礎にさまざまな言語や文化の知識そしてコミュニケーション能力の修得を通して、国際社会で活躍したいと考える学生の入学を期待している。 2.学生募集に際して重視すること 次のことに関心を持ち、個性を伸ばし、自らを磨いていこうという意欲のある人を歓迎する。 （１）幅広い視野から異文化を理解する力を身につけたい人。 （２）文化の知識、多言語活用能力をはじめとする異文化コミュニケーション能力の向上を目指す人。 （３）外国語を使用したスピーチ、ライティング、演劇など自己表現、また言語を教育する力を身につけたい人。 3.入学前学習として推奨すること （１）世界の言語・文化への関心を持ち、自らの基礎的なコミュニケーション能力の向上に努める。 （２）言葉を使用して自らを表現する一方、他の人の自己表現から学ぶ態度を養う。 （３）自らの母語である日本語の知識とスキルを伸ばす。 （４）お互いを理解・尊重し合い、他人の喜びを共に喜び合える態度を養う。 ■交流文化学科 国際交流・観光専攻 1.学生に期待すること 国際交流・観光専攻では、現代社会で起こるさまざまな事象を多方面からとらえ、かつ社会の発展に寄与するために実践力・行動力を身につけ、成長したいと考える学生の入学を期待している。 2.学生募集に際して重視すること 次のことに関心を持ち、個性を伸ばし、自らを磨いていこうという意欲のある人を歓迎する。 （１）幅広い視野から文化・社会を理解する力を身につけたい人。 （２）フィールドワークなどの体験学習を通して社会に貢献する力を身につけたい人。 （３）ホスピタリティ精神を培い、学び取った知識・経験を社会に還元する意欲を持つ人。 3.入学前学習として推奨すること （１）広い視野から社会を眺めるため、地域や国を超えた人の交流や世の中の出来事にたえず関心を持ち、情報収集力をつける。 （２）言語・社会・文化への関心を持ち、自らの基礎的なコミュニケーション能力の向上に努める。 （３）ささいなことにも関心を持ち、実際に自らの目で物事を見つめる好奇心・探求心を養う。 （４）お互いを理解・尊重し合い、他人の喜びを共に喜び合える態度を養う。

ビジネス学部
教育研究上の目的（公表方法： https://www.aasa.ac.jp/guidance/about/policy.html）
（概要） ■ビジネス学科 ビジネス学科は、グローバル化が進む現代社会において活躍しうる実践的専門性を備えたビジネスパーソンを育成するため、ビジネスに関する諸分野の教育研究を行うことを

目的とする。この目的に基づき、学科のもとに「現代ビジネス」「グローバルビジネス」の2専攻を置く。

■現代ビジネス専攻

現代ビジネス専攻においては、マーケティング、経営戦略、企業会計などの専門知識を身につけ、新しいビジネスの価値を創造できる人材、及び事業運営のサポートができる人材を育成するための教育研究を行う。

■グローバルビジネス専攻

グローバルビジネス専攻においては、国際経済、国際金融などの専門知識を英語と日本語のバイリンガルで身につけ、それらをグローバルなビジネスの現場で実践できる人材を育成するための教育研究を行う。

卒業又は修了の認定に関する方針（公表方法：

https://www.aasa.ac.jp/guidance/public_info/diploma_policy_fac.html）

（概要）

企業や職場を取り巻く環境は合理化、情報化、グローバリゼーションの波を受け、日々刻々と変化を遂げている。ビジネス学部は、環境変化に柔軟に対応し、実社会で自ら道を切り開く人材を育成する。そのためには、まず自らが持たない能力やスキルを持つ「他者」とつながり、「他者」の能力、スキルを活用することが不可欠となる。さらに、終身雇用制度の衰退、メンバーシップ雇用からジョブ型雇用への変化に対応するためには、「多様な業界に関する知識」を持ち、「高い職業意識」を育成することが必要となる。その上で、簿記、IT パスポート、TOEIC など実務的に有用な資格を取得し、その資格を現場で「応用」可能なノウハウを身に付けなければならない。合理化、グローバリゼーションの波に対応するためには、企業・団体等との連携を通じたアクティブラーニング・海外インターンシップ研修によって「行動するチカラ」を高めることも必須となる。

この目標を達成するために、ビジネス学部は「ビジネスイノベーション（マーケティング×経営学×アクティブラーニング）」、「ビジネスアカウンティング（会計理論・実務×経営分析×アクティブラーニング）」、「グローバルビジネス（国際経済・国際金融×ビジネス英語×アクティブラーニング）」の3専修を設置し、専修を相互に横断できる柔軟性に富むカリキュラムを編成し、以下のような知識・能力を身に付けた者に学位を授与する。

DP① ビジネスパーソンとして不可欠となるコミュニケーション力・情報スキルをみがく「つながるチカラ」

DP② 多様な業界に関する知識を修得し、シゴトを理解していると同時に高い職業意識を持つことによって高められる「適応するチカラ」

DP③ 資格を取得し、そのスキルを社会で役立てることを可能にする「応用するチカラ」

DP④ 企業・団体等と連携したプログラムや海外インターンシップ研修など、実践を通じて主体的にやり抜く「行動するチカラ」

これに加え、各専修（コース）で、次の「第5の能力」を修得することを学位授与の条件と定める。

【ビジネスイノベーション専修】（2023年度以降入学者）

【現代ビジネス専攻ビジネスイノベーションコース】（2021・2022年度入学者）

DP⑤-BI マーケティングと経営学の知識をベースとし、アクティブラーニングを通じて、企業、組織に対して問題解決案を提示する「アイデアを創造し、形にするチカラ」

【ビジネスアカウンティング専修】（2023年度以降入学者）

【現代ビジネス専攻ビジネスアカウンティングコース】（2021・2022年度入学者）

DP⑤-BA 会計学全般の知識をベースとし、財務諸表を作成・分析するスキルを修得した上で、経営者に対して専門的な助言ができる「ビジネスの言語を読み解き、経営をサポートするチカラ」

【グローバルビジネス専修】（2023 年度以降入学者） 【グローバルビジネス専攻】（2021・2022 年度入学者） DP⑤-GB 国際経済・国際金融などのグローバルビジネスの現場に必要な専門知識を、英語と日本語のバイリンガルで学修することで得られる「世界とつながり、現場で活躍するチカラ」
教育課程の編成及び実施に関する方針（公表方法： https://www.aasa.ac.jp/guidance/public_info/curriculum_policy_fac.html）
（概要） ビジネス学部が目標とする「5 つのチカラ」を身に付けた「環境変化に柔軟に対応し、実社会で自ら道を切り開く人材」を育成するために、以下の方針でカリキュラムを編成し、実施する。 CP① ビジネスパーソンとして必要となるコミュニケーション力・情報スキルに代表される「つながるチカラ」を育成するために、「コミュニケーションスキル系」・「情報スキル」科目群（クラスター）を設定する。「コミュニケーションスキル系」科目群には、成果発表を目指す強度の高いグループワーク科目を 1 年前期に開講して全専任教員が担当し、アドバイザーとしての役割も果たすことで、導入教育としての効果も実現する。さらに、社会で他者と協働する上で不可欠となる「ビジネスとマナー」・「ビジネスプレゼンテーション」といった科目を置き、1・2 年次で修得することを推奨する。また、「データ分析とレポート作成」・「ビジネス統計基礎」などを置く「情報スキル」科目群と合わせて、「つながるチカラ」を育成する。 CP② 多様な業界に関する知識を修得し、シゴトを理解していると同時に高い職業意識を持つことによって高められる「適応するチカラ」を育成するために、「シゴト学」科目群を設定する。「シゴト学」科目群には、実際に社会に出て働く上で必須となる経営学の知識を学ぶ「シゴト学入門」、「小売・流通の基礎知識」・「製造業の基礎知識」など業界の事情を学ぶ科目、3 年次には実際にビジネスの世界で活躍する実務家の経験から学ぶことで、自らのキャリアパスを描く「私のシゴト学」を配置する。多様な業界のより「リアル」な知識の修得と、実務家との交流を通じて職業意識を高め、流動的な未来に「適応するチカラ」を修得する。 CP③ 資格を取得し、そのスキルをビジネスの現場で役立てることを可能にする「応用するチカラ」を育成するために、会計教育センター、AI・データサイエンス教育センターと連携し、資格取得を学習面、経済面で支援する「応用力育成プログラム」・「資格試験サポートプログラム」を設ける。さらに、資格で学んだ知識を現場で活かすことを目指し、実務経験のある教員が担当する応用科目を「経営分析Ⅰ・Ⅱ」「会計実務Ⅰ・Ⅱ」など多数設置し、専修を問わず履修できるようにすることで、「応用するチカラ」を修得する。 CP④ 企業と連携したプログラムや海外インターンシップ研修など、3 専修すべてに企業と連携する「アクティブラーニング科目」の修得を必修で義務づけ、実践を通じて主体的にやり抜く「行動するチカラ」を育成する。 これに加え、各専修（コース）では、それぞれ異なる 5 番目のチカラの修得を目指すカリキュラムを編成・実施する。 【ビジネスイノベーション専修】（2023 年度以降入学者） 【現代ビジネス専攻ビジネスイノベーションコース】（2021・2022 年度入学者） CP⑤-BI マーケティングと経営学の知識をベースとし、アクティブラーニングを通じて、企業、組織に対して問題解決案を提示する「アイデアを創造し、形にするチカラ」を育成するために、「マーケティング&ストラテジー」と「ASICP（イノベーション・チャレンジプログラム）」という 2 つの科目群を設定する。「マーケティング&ストラテジー」では、1 年次の段階でマーケティングの基礎知識を修得し、2・3 年次でプロモーションやファッションに関するマーケティングの応用科目を学ぶことで「マーケティング」の知識を段階的に修得する。さらに 1 年次に「マネ

ジメント入門」、2・3年次に「戦略設計Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」においてグループワークで戦略論の知識を「生きた知識」として修得する。その上で、2年次からは、「イノベーション・チャレンジプログラム」を専修（コース）に所属する学生全員が履修し、企業・団体との連携に1年間を通じて真剣に取り組むことで「アイデアを創造し、形にするチカラ」を修得する。

【ビジネスアカウンティング専修】（2023年度以降入学者）

【現代ビジネス専攻ビジネスアカウンティングコース】（2021・2022年度入学者）

CP⑤-BA 会計学全般の知識をベースとし、財務諸表を作成・分析するスキルを修得した上で、経営者に対して専門的な助言ができる「ビジネスの言語を読み解き、経営をサポートするチカラ」を育成するために、「アカウンティング」と「ASAAP（アカウンティング&アナリシスプログラム）」という2つの科目群を設定する。「アカウンティング」では、大学院所属教員による会計理論系科目と実務家教員による現場の実務を重視した科目をバランスよく配置することで、会計学の知識を広く深く身に付ける。さらに、そこで身に付けた会計学の知識をベースに、「アカウンティング&アナリシスプログラム」を専修（コース）全員が必修で履修することで、現実企業の会計数値を読み解き、企業が直面する課題を分析する体験を積むことで、「ビジネスの言語を読み解き、経営をサポートするチカラ」を修得する。

【グローバルビジネス専修】（2023年度以降入学者）

【グローバルビジネス専攻】（2021・2022年度入学者）

CP⑤-GB 国際経済・国際金融などのグローバルビジネスの現場に必要な専門知識を、英語と日本語のバイリンガルで学修することで得られる「世界とつながり、現場で活躍するチカラ」を育成するために、「グローバルエコノミー」・「ASBBE（バイリンガル・ビジネス・エデュケーションプログラム）」という2つの科目群を設定し、さらに学修の集大成として「Bilingual Internship Overseas/Domestic」への参加を義務づける。また、「グローバルエコノミー」科目群では、国際経済・国際金融に関する科目に加え、国内外の最新のビジネストレンド（「国際ビジネストレンド」・「アジアビジネス」・「ヨーロッパビジネス」など）を学ぶ科目を設置し、グローバル化に伴い必須となる知識を修得する。その上で、必要な専門知識を英語で修得し、グローバルビジネスの共通語である英語を活用する能力を身に付けるために、「バイリンガル・ビジネス・エデュケーションプログラム」を設定し、選択必修条件を設けることで、体系的な学修を促す。さらに学修の集大成として「Bilingual Internship Overseas/Domestic」への参加を義務づけ、「世界とつながり、現場で活躍するチカラ」を修得する。

なお、ビジネス学部では、専攻（コース）・専修を問わず、「ゼミナール科目」を1年次から4年次までの全ての年次に設定する。特に2年次から始まる専門別の「ゼミナール科目」では、学修成果を体系的にまとめ、「見える化」するために、「ビジネスイノベーション専修」・「ビジネスアカウンティング専修」では「卒業論文」を、「グローバルビジネス専修」では、「Bilingual Internship Overseas/Domestic」の成果を取り込みつつ、派遣先の政治経済情勢や企業分析をまとめた「リサーチペーパー」の提出を全員に義務づけ、個別に綿密な研究・調査指導を実施する。

以上のカリキュラムを通じて、ビジネス学部では「環境変化に柔軟に対応し、実社会で自ら道を切り開く人材」の育成という目標を達成する。

入学者の受入れに関する方針（公表方法：

https://www.aasa.ac.jp/life/support/summary/pdf/summary_2025.pdf）

（概要）

ビジネス学部は、国内外のビジネスの現場で能力を発揮することを通じて、社会の発展

に貢献する人材を育てる。1) さまざまな職種、業種で役に立つ知識やスキル、2) 直面する問題を解決するための論理的な思考力や判断力、3) 組織の目標を達成するための協調性やリーダーシップ——これらを身につけたい人の入学を求める。

1. 学生に期待すること

ビジネス学部は、グループワーク、産学連携プロジェクトなどアクティブラーニングによる実践的な授業を多く開講しているほか、国内外のインターンシップ研修などもカリキュラムに取り入れている。このような授業に参画することを通じて、ビジネスの現場で必要となるさまざまな能力を身につけたいと考える人を歓迎する。

2. 学生募集に際して重視すること

ビジネス学部では、ビジネスの現場で能力を発揮する人材になりたいという積極的な姿勢に加え、アクティブラーニングにおいて必要となる行動力、多様な考え方と向き合うコミュニケーション力を重視する。

3. 入学前学習として推奨すること

政治・経済など国内外の動きについて、新聞・テレビ・インターネットなどを通じて広く関心をもつことが大事である。また、重要なニュースや国際情勢については、自分の考えや意見を持つように心がける。国語・英語・数学など主要科目の基礎学力は学修の基盤となる。

グローバル・コミュニケーション学部

教育研究上の目的（公表方法：

<https://www.aasa.ac.jp/guidance/about/policy.html>）

（概要）

■ グローバル・コミュニケーション学科

グローバル・コミュニケーション学科は、常に変化する国際社会を理解し、国内外の様々な事象を意識し、グローバルな視点を持てるようになるため、英語運用能力と幅広い教養を身につけるために必要な理論的、実践的な教育研究を行う。

卒業又は修了の認定に関する方針（公表方法：

https://www.aasa.ac.jp/guidance/public_info/diploma_policy_fac.html）

（概要）

グローバル・コミュニケーション学部では、グローバル社会において、文化や価値観の異なる人々と協力してさまざまな課題や問題を解決する能力のある「地球市民」を育成することとしている。

DP1

国内・国外の文化や社会情勢を理解し、世界の人々に説得力のあるメッセージを発信するために必要な知識を身に付ける。

DP2

グローバル社会であらゆる状況に対応するために必要な英語運用能力、英語コミュニケーション能力、問題解決能力を身に付ける。

DP3

文化や価値観が異なる社会での学修や体験を通じ、社会的・文化的背景の異なる人々の違いを認め、同じ「地球市民」として共生するように考えることができる姿勢を身に付ける。

教育課程の編成及び実施に関する方針（公表方法：

https://www.aasa.ac.jp/guidance/public_info/curriculum_policy_fac.html）

（概要）

グローバル・コミュニケーション学部では、グローバルな視点を持ち、どのような状況にも十分対応できる実践的な英語コミュニケーション能力を備える人材を育成することを目的とする。そのため、本学部のカリキュラムは「中心科目」「スキル科目」「セミナー科

目」で構成する。

「中心科目」(Core Subjects)では、グローバルな視点を持ち、多様化する社会で地球市民として活躍するために必要な知識を身につける。対人から集団にいたるさまざまな状況におけるコミュニケーションや、異なる文化との摩擦、および交渉などに対応できるよう言語とコミュニケーションについて学ぶ「Language and Communication」(異文化コミュニケーション)と日本の文化や歴史、伝統をグローバル社会における日本という視点から学ぶ「Global Japan Studies」(国際日本学)の2つの科目群によって専門教育科目を構成する。本学部の学生は、1年次後期に「異文化コミュニケーション」または「国際日本学」のいずれかのコースを選択し、それぞれの科目群に配置してある Basic レベル科目(1年次)、Intermediate レベル科目(2年次)、および Advanced レベル科目(3年次・4年次)を段階的に履修する。

「スキル科目」(Skill Subjects)では、グローバル社会で必要となる英語運用スキルを身につける。スキル科目は、英語運用能力を徹底的に磨くための「English Language Skills」、高度な英語コミュニケーション能力を身につけるための「English Communication Skills」、学術的な言語運用能力を高めるための「Academic Skills」の3つの科目群から構成する。学部専門科目の授業が英語で実施されるため、また、2年次 Q2(6~7月)には全員が海外渡航をするため、英語で授業を理解し単位を修得できるよう、1年次には「FEP(First-year English Program)」という集中的な英語学習プログラムを設置する。2年次と3年次には「STEP(Second and Third-year English Program)」というプログラムを設置し、海外渡航後も継続してより高度な英語運用能力とコミュニケーション能力を高めることを目指す。

「セミナー科目」(Seminar Subjects)では、4年間の切れ目のない指導を通じて、異文化適応能力を高め、問題発見・解決能力を身につける。1年次には、大学における学修の意義、知識とその獲得手法について理解を深める(「New Student Seminar」)。さらに1年次から2年次にかけて「Study Abroad」の準備として、海外に目を向ける姿勢を育成する(「GLOCOM Practicum 1」「同2」「Seminar 1」)。海外渡航後は、これまでの学びを振り返り、自らの関心を見出し深める(「Seminar 2」「同3」)。3年次、4年次には見出した問いに対し情報収集を行い、解決手法について理解を深め、その学修の集大成として英語で卒業論文を完成する(「Seminar 4」~「同11」)。

入学者の受入れに関する方針(公表方法:

https://www.aasa.ac.jp/life/support/summary/pdf/summary_2025.pdf)

(概要)

グローバル・コミュニケーション学部は、英語で考え、英語で情報を発信し、行動する、人・地域・世界の架け橋となる「地球市民」の育成を目標とした学部であり、「実用的な英語コミュニケーション能力を身に付けたい」「英語を使った仕事に就きたい」という学生を求める。

1. 学生に期待すること

グローバル社会に求められる地球市民になるためには、高度な英語コミュニケーション能力とともに、幅広い教養も必要である。学生には、世界と日本の社会や文化、人間コミュニケーション、グローバルな課題などに関心を持ち積極的に学ぶ姿勢を期待する。

2. 学生募集に際して重視すること

高度なコミュニケーション能力は、受動的な姿勢で身に付くものではない。すべての学部専門科目が英語のみで開講される“All English”の環境のもと、主体的に学ぼうとする意欲と姿勢を重視する。

3. 入学前学習として推奨すること

高等学校までの英語学習をしっかりと理解・定着させておくことが、大学入学後の高度で実践的な英語コミュニケーション能力修得の基礎となる。新聞・書籍・インターネット・テレビなどを通じて、グローバルなトピックに常に関心を向けることも重要である。

②教育研究上の基本組織に関すること

公表方法：https://www.aasa.ac.jp/guidance/public_info/index.html

③教員組織、教員の数並びに各教員が有する学位及び業績に関すること

a. 教員数（本務者）							
学部等の組織の名称	学長・副学長	教授	准教授	講師	助教	助手 その他	計
－	4人	－					4人
文学部	－	6人	1人	1人	4人	0人	12人
教育学部	－	16人	5人	0人	0人	0人	21人
人間情報学部	－	12人	3人	4人	3人	0人	22人
心理学部	－	13人	6人	2人	0人	0人	21人
創造表現学部	－	7人	5人	1人	2人	0人	15人
建築学部	－	10人	2人	3人	2人	2人	19人
健康医療科学部	－	39人	8人	4人	3人	0人	54人
食健康科学部	－	14人	5人	3人	0人	7人	29人
福祉貢献学部	－	10人	4人	2人	0人	0人	16人
交流文化学部	－	15人	6人	4人	0人	0人	25人
ビジネス学部	－	13人	3人	0人	1人	0人	17人
グローバル・コミュニケーション学部	－	6人	1人	4人	4人	0人	15人
国際交流センター	－	1人	1人	5人	1人	0人	8人
日本語教育センター	－	2人	0人	0人	1人	0人	3人
コミュニティ・コラボレーションセンター	－	0人	0人	0人	2人	0人	2人
キャリアセンター	－	0人	0人	0人	3人	0人	3人
ダイバーシティ共生センター	－	1人	0人	0人	1人	0人	2人
A1・データサイエンス教育センター	－	0人	0人	0人	1人	0人	1人
教職・司書・学芸員教育センター	－	8人	2人	0人	2人	0人	12人
学修・教育支援センター	－	0人	1人	5人	3人	0人	9人
会計教育部門	－	0人	0人	0人	0人	0人	0人
学生相談室	－	0人	0人	0人	3人	0人	3人
心理臨床相談室	－	0人	0人	0人	1人	0人	1人
b. 教員数（兼務者）							
学長・副学長			学長・副学長以外の教員				計
0人			714人				714人
各教員の有する学位及び業績 （教員データベースURL等）		https://pnavi.aasa.ac.jp/researchwork/eir01u					
c. FD（ファカルティ・デベロップメント）の状況（任意記載事項）							
全学に於いて、年1回研修会を行うとともに、各研究科・学部でも、その年度計画に基づいたテーマに沿った研修会を年1回以上実施している。テーマは直面している課題に関するものが選択されている。2024年度の全学FD研修会は、「AS VISION2030の詳細および第4期大学基準の概要とポイント」についてオンデマンドによる動画視聴形式で実施した。また、年に1度実施している授業アンケートによる授業改善、学部別アンケートによる学生の学習状況や学習成果の進捗、卒業時アンケートによる大学生活の充実度の確認などにも積極的に取り組んでいる。							

④入学者の数、収容定員及び在学する学生の数、卒業又は修了した者の数並びに
進学者数及び就職者数その他進学及び就職等の状況に関すること

a. 入学者の数、収容定員、在学する学生の数等								
学部等名	入学定員 (a)	入学者数 (b)	b/a	収容定員 (c)	在学生数 (d)	d/c	編入学 定員	編入学 者数
文学部	95 人	109 人	114.7%	380 人	1021 人	268.7%	若干名	0 人
教育学部	140 人	150 人	107.1%	560 人	150 人	26.8%	-	0 人
人間情報学部	200 人	219 人	109.5%	800 人	879 人	109.9%	若干名	1 人
心理学部	180 人	214 人	118.9%	720 人	806 人	111.9%	若干名	0 人
創造表現学部	225 人	248 人	110.2%	900 人	1230 人	136.7%	若干名	0 人
建築学部	130 人	151 人	116.2%	520 人	151 人	29.0%	-	0 人
健康医療科学部	290 人	343 人	118.3%	1,160 人	1281 人	110.4%	若干名	0 人
食健康科学部	200 人	186 人	93.0%	800 人	337 人	42.1%	若干名	0 人
福祉貢献学部	120 人	146 人	121.7%	480 人	536 人	111.7%	若干名	0 人
交流文化学部	260 人	290 人	111.5%	1,040 人	1211 人	116.4%	若干名	1 人
ビジネス学部	230 人	286 人	124.3%	920 人	1091 人	118.6%	若干名	0 人
グローバル・コミュニ ケーション学部	80 人	96 人	120.0%	320 人	312 人	97.5%	若干名	0 人
合計	2,150 人	2,438 人	113.4%	8,600 人	9,005 人	104.7%	若干名	2 人
(備考)								

b. 卒業者数・修了者数、進学者数、就職者数				
学部等名	卒業者数・修了者数	進学者数	就職者数 (自営業を含む。)	その他
文学部	297 人 (100%)	4 人 (1.3%)	27 人 (91.2%)	22 人 (7.4%)
教育学部	0 人 (%)	0 人 (%)	0 人 (%)	0 人 (%)
人間情報学部	192 人 (100%)	1 人 (0.5%)	167 人 (87.0%)	24 人 (12.5%)
心理学部	183 人 (100%)	10 人 (5.5%)	152 人 (83.1%)	21 人 (11.5%)
創造表現学部	302 人 (100%)	6 人 (2.0%)	263 人 (87.1%)	33 人 (10.9%)
建築学部	0 人 (%)	0 人 (%)	0 人 (%)	0 人 (%)
健康医療科学部	287 人 (100%)	3 人 (1.0%)	263 人 (91.6%)	21 人 (7.3%)
食健康科学部	0 人 (%)	0 人 (%)	0 人 (%)	0 人 (%)
福祉貢献学部	124 人 (100%)	0 人 (0.0%)	121 人 (97.6%)	3 人 (2.4%)
交流文化学部	272 人 (100%)	1 人 (0.4%)	251 人 (92.3%)	20 人 (7.4%)

ビジネス学部	215 人 (100%)	1 人 (0.5%)	195 人 (90.7%)	19 人 (8.8%)
グローバル・コミュニケーション学部	58 人 (100%)	1 人 (1.7%)	53 人 (91.4%)	4 人 (6.9%)
合計	1,930 人 (100%)	27 人 (1.4%)	1,736 人 (89.9%)	167 人 (8.7%)
(主な進学先・就職先) (任意記載事項)				
(備考)				

. 修業年限期間内に卒業又は修了する学生の割合、留年者数、中途退学者数 (任意記載事項)					
学部等名	入学者数	修業年限期間内 卒業・修了者数	留年者数	中途退学者数	その他
文学部	308 人 (100%)	283 人 (91.9%)	17 人 (5.5%)	8 人 (2.6%)	0 人 (0%)
教育学部	0 人 (0%)	0 人 (0%)	0 人 (0%)	0 人 (0%)	0 人 (0%)
人間情報学部	213 人 (100%)	180 人 (84.5%)	18 人 (8.5%)	15 人 (7.0%)	0 人 (0%)
心理学部	185 人 (100%)	171 人 (92.4%)	8 人 (4.3%)	6 人 (3.2%)	0 人 (0%)
創造表現学部	312 人 (100%)	290 人 (92.9%)	17 人 (5.4%)	5 人 (1.6%)	0 人 (0%)
建築学部	0 人 (0%)	0 人 (0%)	0 人 (0%)	0 人 (0%)	0 人 (0%)
健康医療科学部	319 人 (100%)	281 人 (88.1%)	20 人 (6.3%)	18 人 (5.6%)	0 人 (0%)
食健康科学部	0 人 (0%)	0 人 (0%)	0 人 (0%)	0 人 (0%)	0 人 (0%)
福祉貢献学部	127 人 (100%)	123 人 (96.9%)	1 人 (0.8%)	3 人 (2.4%)	0 人 (0%)
交流文化学部	290 人 (100%)	236 人 (81.4%)	43 人 (14.8%)	11 人 (3.8%)	0 人 (0%)
ビジネス学部	241 人 (100%)	204 人 (84.6%)	25 人 (10.4%)	12 人 (5.0%)	0 人 (0%)
グローバル・コミュニケーション学部	61 人 (100%)	49 人 (80.3%)	9 人 (14.8%)	3 人 (4.9%)	0 人 (0%)
合計	2056 人 (100%)	1817 人 (88.4%)	158 人 (7.7%)	81 人 (3.9%)	0 人 (0%)
(備考) 創造表現学部：2021 年度入学で 2023 年度転学による転出→入学者数 1 名減。 健康医療科学部：2021 年度入学で 2023 年度転学による転出→入学者数 1 名減。					

⑤授業科目、授業の方法及び内容並びに年間の授業の計画に関すること

(概要) 学生へは、シラバスによって周知する。 『シラバス作成ガイドライン』を毎年12月中旬に担当者に配付し、執筆を依頼。 担当者は、ガイドラインに基づき、1月中旬の締切までに執筆（システムに入力）する。 シラバスの記載内容 ・「基本情報」 ＊依頼時には入力済 開講科目名、主担当教員、時間割コード、必修/選択、キャンパス、主要授業科目、開講所属、授業回数、学期、授業形態、開講区分、遠隔授業、曜日・時限、ディプロマポリシー、単位数、ナンバリング、学年、科目等履修生・聴講生受入 ・「詳細情報」 ＊各担当者が入力 授業の概要（必須）、担当教員の実務経験と当該科目との関連、到達目標（必須）、学外教育、授業外学習の指示（必須）、成績評価基準（必須）、テキスト（必須）、参考文献・資料、視聴覚教材の使用 ・「授業計画」 ＊各担当者が入力 授業回数（必須）、各回の授業内容（必須）、授業実施形態（対面/オンデマンド）（必須） 執筆者は提出前に、『編集完了前チェックリスト』を用いて記載項目について正しく記述されているか確認して提出（システムにて編集完了をする）。 1月中旬の提出締め切りの後、学内において開講主体ごとにシラバス内容が適切かどうか第三者チェックを行う。修正が必要なシラバスは再執筆を依頼し、3月上旬にシラバスデータを完成。完成したシラバスデータは、3月中旬に大学HP上の、シラバス閲覧システムにて公開する。 学生はHPの他、学内システムからもシラバスを閲覧することが可能

⑥学修の成果に係る評価及び卒業又は修了の認定に当たっての基準に関すること

(概要)

成績は、授業担当者が定期試験・レポート・小テスト・平常の学修状況・実技実習等の評価方法により、学修指標に対する到達結果をもって評価する。科目ごとの具体的な評価方法については、「シラバス」に記載。

また、学部ごとに成績評価における評価項目・評価基準を定めている。

なお、下表のうち、「履修単位の登録上限」については、文学部総合英語学科、文学部教育学科、創造表現学部創造表現学科建築・インテリアデザイン専攻は 2024 年度入学者、健康医療科学部栄養学科は 2023 年度入学者、それ以外は 2025 年度入学者を対象とした単位数を記載。

学部名	学科名	卒業又は修了に必要な単位数	G P A制度の採用 (任意記載事項)	履修単位の登録上限 (任意記載事項)
文学部	国文学科	124 単位	⑦・無	1・2・4 年前期 24 単位 3 年のみ前期 25 単位 後期 24 単位
	総合英語学科	124 単位	⑦・無	前期 25 単位 後期 24 単位
	教育学科	124 単位	⑦・無	前期 25 単位 後期 24 単位

教育学部	教育学科	124 単位	⑦・無	前期 24 単位 1・2・4 年後期 24 単位 3 年のみ後期 25 単位
人間情報学部	人間情報学科 感性工学専攻	124 単位	⑦・無	前期 24 単位 後期 24 単位
	人間情報学科 データサイエンス 専攻	124 単位	⑦・無	前期 24 単位 後期 24 単位
心理学部	心理学科	124 単位	⑦・無	前期 24 単位 後期 24 単位
創造表現学部	創造表現学科 創作表現専攻	124 単位	⑦・無	前期 24 単位 1・2・4 年後期 24 単位 3 年のみ後期 25 単位
	創造表現学科 メディア プロデュース専攻	124 単位	⑦・無	前期 24 単位 1・2・4 年後期 24 単位 3 年のみ後期 25 単位
	創造表現学科 建築・インテリア デザイン専攻	124 単位	⑦・無	1・2・4 年前期 24 単位 3 年のみ前期 25 単位 後期 24 単位
建築学部	建築学科 建築・まちづくり 専攻	124 単位	⑦・無	1・2・4 年前期 24 単位 3 年のみ前期 25 単位 後期 24 単位
	建築学科 住居・インテリア デザイン専攻	124 単位	⑦・無	1・2・4 年前期 24 単位 3 年のみ前期 25 単位 後期 24 単位
健康医療科学	医療貢献学科 言語聴覚学専攻	140 単位	⑦・無	1・3・4 年前期 25 単位 2 年後期 25 単位 その他の年次・学期 24 単位
	医療貢献学科 視覚科学専攻	140 単位	⑦・無	前期 24 単位 後期 25 単位
	医療貢献学科 理学療法学専攻	143 単位	⑦・無	1・2 年のみ前期 25 単位 その他の年次・学期 24 単位
	医療貢献学科 臨床検査学専攻	131 単位	⑦・無	前期 24 単位 後期 24 単位
	スポーツ・健康医 科学科スポーツ・ 健康科学専攻	125 単位	⑦・無	前期 24 単位 後期 24 単位
	スポーツ・健康医 科学科 救急救命学専攻	129 単位	⑦・無	1 年のみ前期 25 単位 2・3・4 年前期 24 単位 後期 24 単位
	健康栄養学科	124 単位	⑦・無	1 年のみ前期 25 単位 2・3・4 年前期 24 単位 後期 24 単位
食健康科学部	健康栄養学科	124 単位	⑦・無	1 年のみ前期 25 単位 2・3・4 年前期 24 単位 後期 24 単位
	食創造科学科	124 単位	⑦・無	前期 24 単位 後期 24 単位

福祉貢献学部	福祉貢献学科 社会福祉専攻	124 単位	⑦・無	前期 24 単位 後期 24 単位
	福祉貢献学科 子ども福祉専攻	124 単位	⑦・無	前期 24 単位 後期 24 単位
交流文化学部	交流文化学科 ランゲージ専攻	124 単位	⑦・無	1 年前期・2 年後期 25 単位 その他の年次・学期 24 単位
	交流文化学科 国際交流・観光専攻	124 単位	⑦・無	1 年前期・2 年後期 25 単位 その他の年次・学期 24 単位
ビジネス学部	ビジネス学科	124 単位	⑦・無	前期 24 単位 後期 24 単位
グローバル・ コミュニケーション学部	グローバル・コミュニ ケーション学科	124 単位	⑦・無	前期 24 単位 後期 24 単位
G P A の活用状況（任意記載事項）		成績評価の明確化及び学習意欲の向上を目的として、G P A 制度を導入。また、半期における履修登録単位数の上限（C A P 制の導入）を定めている。 公表方法： https://www.aasa.ac.jp/life/support/summary/directory.html		
学生の学修状況に係る参考情報 （任意記載事項）		公表方法：		

⑦校地、校舎等の施設及び設備その他の学生の教育研究環境に関すること

公表方法：https://www.aasa.ac.jp/guidance/public_info/index.html

⑧授業料、入学金その他の大学等が徴収する費用に関すること

学部名	学科名	授業料 (年間)	入学金	その他	備考（任意記載事項）
文学部	国文学科 1年生	760,000 円	200,000 円	420,000 円	教育充実費： 370,000 円 休学中の在籍料： 50,000 円
	国文学科 2～4年生	760,000 円	—	470,000 円	教育充実費： 370,000 円 休学中の在籍料： 100,000 円
	総合英語学科 2～4年生	760,000 円	—	470,000 円	教育充実費： 370,000 円 休学中の在籍料： 100,000 円
	教育学科 2～4年生	760,000 円	—	520,000 円	教育充実費： 420,000 円 休学中の在籍料： 100,000 円
教育学部	教育学科 1年生	760,000 円	200,000 円	470,000 円	教育充実費： 420,000 円 休学中の在籍料： 50,000 円
人間情報学部	人間情報学科 1年生	760,000 円	200,000 円	470,000 円	教育充実費： 420,000 円 休学中の在籍料： 50,000 円
	人間情報学科 2～4年生	760,000 円	—	520,000 円	教育充実費： 420,000 円 休学中の在籍料： 100,000 円
心理学部	心理学科 1年生	760,000 円	200,000 円	470,000 円	教育充実費： 420,000 円 休学中の在籍料： 50,000 円
	心理学科 2～4年生	760,000 円	—	520,000 円	教育充実費： 420,000 円 休学中の在籍料： 100,000 円
創造表現学部	創造表現学科 (創作表現専攻、 メディアプロデュ ース専攻1年生)	760,000 円	200,000 円	420,000 円	教育充実費： 370,000 円 休学中の在籍料： 50,000 円
	創造表現学科 (創作表現専攻、 メディアプロデュ ース専攻2～4年 生)	760,000 円	—	470,000 円	教育充実費： 370,000 円 休学中の在籍料： 100,000 円
創造表現学部	創造表現学科 (建築・インテリ アデザイン専攻2～ 4年生)	760,000 円	—	570,000 円	教育充実費： 450,000 円 実験実習費： 20,000 円 休学中の在籍料： 100,000 円
建築学部	建築学科 1年生	780,000 円	200,000 円	470,000 円	教育充実費： 420,000 円 休学中の在籍料： 50,000 円
健康医療科学 部	医療貢献学科 言語聴覚学専攻 1年生	860,000 円	200,000 円	590,000 円	教育充実費： 510,000 円 実験実習費： 30,000 円 休学中の在籍料： 50,000 円
	医療貢献学科 言語聴覚学専攻 2・3年生	860,000 円	—	810,000 円	教育充実費： 610,000 円 実験実習費： 100,000 円 休学中の在籍料： 100,000 円
	医療貢献学科 言語聴覚学専攻 4年生	860,000 円	—	785,000 円	教育充実費： 610,000 円 実験実習費： 75,000 円 休学中の在籍料： 100,000 円
	医療貢献学科 視覚科学専攻 1年生	860,000 円	200,000 円	560,000 円	教育充実費： 510,000 円 休学中の在籍料： 50,000 円

健康医療科学部	医療貢献学科 視覚科学専攻 2～4年生	860,000 円	—	760,000 円	教育充実費： 610,000 円 実験実習費： 50,000 円 休学中の在籍料： 100,000 円
	医療貢献学科 理学療法学専攻 1年生	860,000 円	200,000 円	660,000 円	教育充実費： 540,000 円 実験実習費： 70,000 円 休学中の在籍料： 50,000 円
	医療貢献学科 理学療法学専攻 2年生	860,000 円	—	770,000 円	教育充実費： 640,000 円 実験実習費： 30,000 円 休学中の在籍料： 100,000 円
	医療貢献学科 臨床検査学専攻 1年生	860,000 円	200,000 円	640,000 円	教育充実費： 540,000 円 実験実習費： 50,000 円 休学中の在籍料： 50,000 円
	医療貢献学科 臨床検査学専攻 2年生	860,000 円	—	840,000 円	教育充実費： 640,000 円 実験実習費： 100,000 円 休学中の在籍料： 100,000 円
	スポーツ・健康 医科学科 スポーツ・健康科 学専攻 1年生	760,000 円	200,000 円	470,000 円	教育充実費： 420,000 円 休学中の在籍料： 50,000 円
健康医療科学部	スポーツ・健康 医科学科 スポーツ・健康科 学専攻 2～4年生	760,000 円	—	520,000 円	教育充実費： 420,000 円 休学中の在籍料： 100,000 円
	スポーツ・健康 医科学科 救急救命学専攻 1年生	890,000 円	200,000 円	580,000 円	教育充実費： 420,000 円 実験実習費： 110,000 円 休学中の在籍料： 50,000 円
	スポーツ・健康 医科学科 救急救命学専攻 2年生	890,000 円	—	585,000 円	教育充実費： 420,000 円 実験実習費： 65,000 円 休学中の在籍料： 100,000 円
	スポーツ・健康 医科学科 救急救命学専攻 3年生	890,000 円	—	580,000 円	教育充実費： 420,000 円 実験実習費： 60,000 円 休学中の在籍料： 100,000 円
	スポーツ・健康 医科学科 救急救命学専攻 4年生	890,000 円	—	584,000 円	教育充実費： 420,000 円 実験実習費： 64,000 円 休学中の在籍料： 100,000 円
健康医療科学部	健康栄養学科 3・4年生	800,000 円	—	720,000 円	教育充実費： 510,000 円 実験実習費： 110,000 円 休学中の在籍料： 100,000 円
食健康科学部	健康栄養学科 1年生	800,000 円	200,000 円	580,000 円	教育充実費： 460,000 円 実験実習費： 70,000 円 休学中の在籍料： 50,000 円
	健康栄養学科 2年生	800,000 円	—	650,000 円	教育充実費： 510,000 円 実験実習費： 40,000 円 休学中の在籍料： 100,000 円

食健康科学部	食創造科学科 1年生	800,000 円	200,000 円	510,000 円	教育充実費： 460,000 円 休学中の在籍料： 50,000 円
	食創造科学科 2年生	800,000 円	—	610,000 円	教育充実費： 510,000 円 休学中の在籍料： 100,000 円
福祉貢献学部	福祉貢献学科 1年生	760,000 円	200,000 円	470,000 円	教育充実費： 420,000 円 休学中の在籍料： 50,000 円
	福祉貢献学科 2～4年生	760,000 円	—	520,000 円	教育充実費： 420,000 円 休学中の在籍料： 100,000 円
交流文化学部	交流文化学科 1年生	760,000 円	200,000 円	420,000 円	教育充実費： 370,000 円 休学中の在籍料： 50,000 円
	交流文化学科 2～4年生	760,000 円	—	470,000 円	教育充実費： 370,000 円 休学中の在籍料： 100,000 円
ビジネス学部	ビジネス学科 1年生	760,000 円	200,000 円	420,000 円	教育充実費： 370,000 円 休学中の在籍料： 50,000 円
	ビジネス学科 2～4年生	760,000 円	—	470,000 円	教育充実費： 370,000 円 休学中の在籍料： 100,000 円
グローバル・コミュニケーション学部	グローバル・コミュニケーション学科 1年生	860,000 円	200,000 円	420,000 円	教育充実費： 370,000 円 休学中の在籍料： 50,000 円
	グローバル・コミュニケーション学科 2～4年生	860,000 円	—	470,000 円	教育充実費： 370,000 円 休学中の在籍料： 100,000 円

⑨大学等が行う学生の修学、進路選択及び心身の健康等に係る支援に関すること

a. 学生の修学に係る支援に関する取組
(概要) アドバイザーによる面談をセメスターごとに実施している。そこで把握した問題については、各教育組織単位ごとに必要に応じて共有し、各教育組織単位全体で支援体制を整えている。
b. 進路選択に係る支援に関する取組
(概要) キャリアセンターは、学生が「自立心」を身につけることができるように、キャリア形成プログラムを提供し、「キャリア教育」「キャリア支援」をおこなっている。キャリア教育はインターンシップを中心に展開し、職業イメージを明確につかみ、社会人としての実践力を養うとともに、「キャリアの形成」「ビジネスの世界」等の科目を設定し、教養を深め、人間力を養っている。キャリア支援としては、ガイダンスや学内企業説明会、個人面談などを実施し、社会への認識や就職に必要な力を磨き、一人ひとりが最良の道へ自ら進めるように経験豊富なスタッフが一丸となってサポートしている。
c. 学生の心身の健康等に係る支援に関する取組
(概要) メンタルについては学生相談室におけるカウンセラーによる支援をおこなっており、必要に応じて各教育組織単位との連携を図っている。身体的健康については、保健管理室が支援を行い、必要に応じて各教育組織単位と連携している。メンタル、身体ともにクリニックとの連携も進められている。身体障害については、障がい学生支援委員会が中心となり、学生部、各教育組織単位、学生によるボランティア活動組織との連携の下、支援を行って入る。学生組織による、聴覚障がい学生のためのノートテイク支援が活発に行われている。

⑩教育研究活動等の状況についての情報の公表の方法

公表方法：https://www.aasa.ac.jp/guidance/public_info/index.html

備考 この用紙の大きさは、日本産業規格 A 4 とする。

(別紙)

※ この別紙は、更新確認申請書を提出する場合に提出すること。

※ 以下に掲げる人数を記載すべき全ての欄（合計欄を含む。）について、該当する人数が1人以上10人以下の場合には、当該欄に「－」を記載すること。該当する人数が0人の場合には、「0人」と記載すること。

学校コード (13桁)	F123310106853
学校名 (〇〇大学 等)	愛知淑徳大学
設置者名 (学校法人〇〇学園 等)	学校法人 愛知淑徳学園

1. 前年度の授業料等減免対象者及び給付奨学生の数

		前半期	後半期	年間
支援対象者数 ※括弧内は多子世帯の学生等（内数） ※家計急変による者を除く。		673人（ 30 ）人	702人（ 82 ）人	一人（ － ）
内 訳	第Ⅰ区分	353人	332人	
	(うち多子世帯)	(0 人)	(0 人)	
	第Ⅱ区分	201人	202人	
	(うち多子世帯)	(0 人)	(0 人)	
	第Ⅲ区分	89人	86人	
	(うち多子世帯)	(0 人)	(0 人)	
	第Ⅳ区分（理工農）	0人	0人	
	第Ⅳ区分（多子世帯）	一人	26人	
	区分外（多子世帯）	一人	56人	
家計急変による 支援対象者（年間）				一人（ － ）
合計（年間）				727人（ 91 ）人
(備考)				

※ 本表において、多子世帯とは大学等における修学の支援に関する法律（令和元年法律第8号）第4条第2項第1号に掲げる授業料等減免対象者をいい、第Ⅰ区分、第Ⅱ区分、第Ⅲ区分、第Ⅳ区分（理工農）とは、それぞれ大学等における修学の支援に関する法律施行令（令和元年政令第49号）第2条第1項第2号イ～ニに掲げる区分をいう。

※ 備考欄は、特記事項がある場合に記載すること。

2. 前年度に授業料等減免対象者としての認定の取消しを受けた者及び給付奨学生認定の取消しを受けた者の数

(1) 偽りその他不正の手段により授業料等減免又は学資支給金の支給を受けたことにより認定の取消しを受けた者の数

年間	0人
----	----

(2) 適格認定における学業成績の判定の結果、学業成績が廃止の区分に該当したことにより認定の取消しを受けた者の数

	右以外の大学等	短期大学（修業年限が2年のものに限り、認定専攻科を含む。）、高等専門学校（認定専攻科を含む。）及び専門学校（修業年限が2年以下のものに限る。）	
	年間	前半期	後半期
修業年限で卒業又は修了できないことが確定	0人	人	人
修得単位数が「廃止」の基準に該当 （単位制によらない専門学校にあっては、履修科目の単位時間数が廃止の基準に該当）	一人	人	人
出席率が「廃止」の基準に該当又は学修意欲が著しく低い状況	一人	人	人
「警告」の区分に連続して該当 ※「停止」となった場合を除く。	28人	人	人
計	33人	人	人
(備考)			

※備考欄は、特記事項がある場合に記載すること。

上記の(2)のうち、学業成績が著しく不良であると認められる者であって、当該学業成績が著しく不良であることについて災害、傷病その他やむを得ない事由があると認められず、遑って認定の効力を失った者の数

右以外の大学等		短期大学（修業年限が2年のものに限り、認定専攻科を含む。）、高等専門学校（認定専攻科を含む。）及び専門学校（修業年限が2年以下のものに限る。）			
年間	一人	前半期	人	後半期	人

(3) 退学又は停学（期間の定めのないもの又は3月以上の期間のものに限る。）の処分を受けたことにより認定の取消しを受けた者の数

退学	一人
3月以上の停学	0人
年間計	一人
(備考)	

※備考欄は、特記事項がある場合に記載すること。

3. 前年度に授業料等減免対象者としての認定の効力の停止を受けた者及び給付奨学生認定の効力の停止を受けた者の数

(1) 停学（3月未満の期間のものに限る。）又は訓告の処分を受けたことにより認定の効力の停止を受けた者の数

3月未満の停学	0人
訓告	0人
年間計	0人
(備考)	

※備考欄は、特記事項がある場合に記載すること。

(2) 適格認定における学業成績の判定の結果、停止を受けた者の数

	右以外の大学等	短期大学（修業年限が2年のものに限り、認定専攻科を含む。）、高等専門学校（認定専攻科を含む。）及び専門学校（修業年限が2年以下のものに限る。）	
	年間	前半期	後半期
GPA等が下位4分の1	22人	人	人

4. 適格認定における学業成績の判定の結果、警告を受けた者の数

	右以外の大学等	短期大学（修業年限が2年のものに限り、認定専攻科を含む。）、高等専門学校（認定専攻科を含む。）及び専門学校（修業年限が2年以下のものに限る。）	
	年間	前半期	後半期
修得単位数が「警告」の基準に該当 （単位制によらない専門学校にあっては、履修科目の単位時間数が警告の基準に該当）	0人	人	人
GPA等が下位4分の1	95人	人	人
出席率が「警告」の基準に該当又は学修意欲が低い状況	13人	人	人
計	103人	人	人
(備考)			

※備考欄は、特記事項がある場合に記載すること。